

石川県埋蔵文化財情報

第 6 号

巻頭カラー写真（加茂遺跡・九谷 A 遺跡）

平成12(2000)年度下半期の発掘調査調査部長 小嶋 芳孝..(1)

発掘調査略報

山岸古墳群.....	(4)
館郷堂遺跡.....	(6)
大町ゴンジョガリ遺跡.....	(8)
大町ダイジングウ遺跡.....	(12)
金丸宮地遺跡.....	(14)
荻島 B 遺跡	(16)
加茂遺跡.....	(18)
観法寺古墳群.....	(22)
金沢西部第二土地区画整理事業に係る発掘調査.....	(24)
金沢城跡.....	(30)
額谷遺跡.....	(36)
千代・能美遺跡	(38)
浄水寺遺跡.....	(42)
柴山貝塚.....	(44)
刀何理遺跡・狐森塚古墳.....	(46)
九谷 A 遺跡	(48)

平成12(2000)年度下半期の遺物整理作業企画部整理課..(50)

調査・研究報告

北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について	久田正弘..(52)
北陸における弥生時代の拠点集落について	安 英樹..(66)
墳丘構築技術から見た秋常山 1 号墳築造の思惟	伊藤雅文..(84)

2001年 7 月



加賀郡榜示札

加賀郡榜示札の釈文（正字）

符深見村□郷驛長并諸刀弥等
應奉行壹拾條之事

一田夫朝以寅時下田夕以戌時還私狀
一禁制田夫任意喫魚酒狀
一禁斷不勞作溝堰百姓狀
一以五月卅日前可申田殖竟狀
一可搜捉村邑内竄宕為諸人被疑人狀
一可禁制无原養蚕百姓狀
一可禁制里邑之内故喫醉酒及戲逸百姓狀
〔慎カ〕

一可填勤農業狀 □村里長人申百姓名
〔有カ〕

案内被國去□月廿八日符併勸催農業
〔正カ〕

〔有カ〕
□法條而百姓等恣事逸遊不耕作喫
魚毆乱為宗播殖過時還種不熟只非
弊耳復致飢饉之苦此郡司等不治
〔期カ〕

之□而豈可○然哉郡宜承知並□示
事早令勤作若不遵符旨稱倦懈
由加勘決者謹依符旨仰下田領等宜
〔諭カ〕

每村屢廻偷有懈怠者移身進郡符
國道之齋糜竊進之榜示路頭嚴加禁
領刀祢有怨憎隱容以其人為罪背不
〔宥カ〕

有符到奉行
大領錦村主 主政八戸史
擬大領錦部連真手磨 擬主帳甲臣
少領道公夏□ 副擬主帳字治
〔擬カ〕

□少領勘了

〔二カ〕〔二カ〕〔二カ〕
嘉祥□年□月□日
〔二カ〕
□月十五日 請 田領丈部浪磨

加賀郡榜示札釈文



加茂遺跡（第6次） 区下層第1面全景

読み下し文

郡符す 深見村 郷の驛長並びに諸刀弥等應に奉行すべき壹拾條の事

一つ、田夫、朝は寅の時を以て田に下り、夕は戌の時を以て私に還るの状。

一つ、田夫、意に任せて魚酒を喫ふを禁制するの状。

一つ、溝堰を勞作せざる百姓を禁断するの状。

一つ、五月卅日前を以て、田殖えの竟るを申すべきの状。

一つ、村邑の内に竄れ宿みて諸人と為ると、疑る人を捜し捉ふべきの状。

一つ、棄原無くして、蚕を養う百姓を禁制すべきの状。

一つ、里邑の内にて故に酒を喫ひ酔ひ、戲逸に及ぶ百姓を禁制すべきの状

一つ、農業を填(慎)勤すべきの状。 村里の長たる人は百姓の名を申せ

案内を檢するに、國の去る (正)月廿八日の符を被るに併(備)く。「農業

を勤催すること法條有り。而るに百姓等、恣しいままに逸遊するを事とし、

耕作せず酒魚を喫ひ、毆乱するを宗と為す。播殖に時を過し、還りて不熟と

稱す。只疲弊するのみにあらず。復た飢饉の苦を致さん。此れ、郡司等治

(田)せざるの期にして、豈然る可けん哉。郡宜しく承知し、並びに符の事

を口示し、早く勤め作さしむべし。若符の旨に遵わず、倦懈の由を稱さば、

勅決を加えよ。」てへれば、謹しんで符の旨に依り、田領等に仰せ下し、宜し

く各村に屢廻らし諭(論)すべし。懈怠有らば、身を移し郡に進めん。符旨

を國の道の裔に庶羈し之を進め、路頭に勝示し、嚴しく禁を加えん。田領・

刀弥、怨憎隱容有らば其人を以て罪と為よ。背むくこと寛有(宥)せず。符

到りなば奉行せよ。

主政八戸史

大領錦村主

擬大領錦部連 真手磨

少領道公 夏

擬少領 勅 了

擬主帳甲臣

副擬主帳宇治

嘉祥 年 月 十二日

月十五日請く 田領文部浪麿

加賀郡勝示札は、勝示用の木簡である。上・下端部を欠損する。復元すると、ほぼ一尺弱×二尺となり、古代の紙の寸法と同じとなる。板のほぼ中央と下端部中央には、穿孔があり、上端部の左右と下端部の左、左側面下半部には、切り込みがある。樹種はヒノキである。

墨のほとんどは、風化により失われているが、字画部分のみ周囲より盛り上がり、文字の判読が可能となっている。このような文字の状態と形状から、一定期間、屋外に掛けられていた(傍示されていた)と考えられる。

表面は、二八本の縦界線を引いている。界幅は一定ではないが、二cm前後であり、界幅七分が意識されていたといえる。各行は、界線にあまりとられずに記されている。すべての行は、下にゆくに従い、右にそれる書き手の癖が現れている。これらを木簡の寸法とあわせて考えると、本木簡は同様の紙の文書を転記したものと考えられる。

書式は、律令に規定された符式。構成と内容は以下のとおり。

事書 差出所(加賀郡)、宛所(深見村の有力者)と、律令政府より出された「壹拾條」を施行すべきことが記されている。「深見村」は、天平勝宝元年(七四九)、越前国権大伴池主が加賀郡の境、深海村で駅使を迎え越中国司大伴家持に書状と歌を贈ったことが「万葉集」に記されている。また、駅は「延喜式」に深見駅の記載があり、本遺跡周辺も比定地となっている。

禁令 勸農を目的とした百姓の行動規範というべき内容となっている。事書には「壹拾條」とみえるが、実際には八条しかない。最後に、細字で村里の長たる人は、以上の禁制に違反した百姓名を報告すべきことが記されている。

加賀郡の命令 前半に加賀国符を引く(「一行目」「勸催農業」)「七行目」「加勅決」までが、「去 月廿八日」の国符。加賀国符には、飢饉に至るのは郡司らの責任であるとし、早く符を口頭で下達し、動作させるべきことが記されている。

後半には加賀郡の命令として、田領等が村毎に屢通じて(符旨を)諭すべきことと、符を路頭に勝示すべきこと、田領等の不正は容認しないことが記されている。

加賀郡司署名 郡領氏族の大半が渡来系である。
施行年月日 年数部分は、判読が困難。嘉祥年間は、嘉祥元(八四八)〜四(八五二)に該当する。

田領の署名と受取り月日 田領の文部氏は、本遺跡第四次調査で出土した木簡中にも下級官人と想定されている同姓者が記されている。

以上のような内容から本木簡は、律令政府から加賀国を経て下達された命令を加賀郡が田領を通じて村々に下した郡符であり、その郡符を勝示するために作成されたと考えられる。

本木簡の内容は、非常に豊富である。中でも、駅を含め複数の郷を包括した、村の存在が明らかとなった意義は大きい。また、徹底した文書行政の一環として出された本木簡の中に、口頭で伝達する旨が明記されていることも注目し、本木簡は他にも、律令国家による具体的な勸農政策、当時の加賀郡の状況、深見村・深見駅の所在、等々を窺い知ることのできる貴重な資料といえよう。



写真1 九谷A遺跡 A2区全景



写真2 A2区 焼土1 (北から)

(写真の解説)

写真1 九谷A遺跡 A2区全景(東から)

A2区では少なくとも7基の焼土遺構が確認された。なお、写真右の石列および礎石は焼土遺構に後出する時期のものと考えられる。

写真2 九谷A遺跡 A2区焼土1(北から)

色絵窯と思われる焼土遺構。焼土が1辺約1mの正方形に敷き詰められ、中央部が直径60cm程の円形に、また左手前の部分も強く焼けている。

平成12(2000)年度下半期の発掘調査

調査部長 小嶋芳孝

平成12(2000)年度は、県教委から30遺跡の調査を受託した。調査面積の総計は、実績で84,467㎡となった。内訳は、建設省(国土交通省)事業に伴う調査が7件、県農林水産部関係が13件、県土木部関係が10件である。

本書では9～3月の調査を紹介する。中島町山岸古墳群でおこなった25号墳の調査は、石材が抜かれていたにもかかわらず石室跡から多数の鉄器や土器を検出することができた。横穴式石室墳の群集墳は県内では例が少なく、今回の調査により古墳時代後期における七尾湾西湾地域の特質を考える手懸りを得た調査となった。

加茂遺跡では、加賀郡勝示札の出土にともなう記者発表を9月7日におこない、あわせて現地説明会と資料解説会をおこなった。加賀郡勝示札が出土した地点や古代北陸道跡の取り扱いについては、石川県教委と国土交通省金沢工事事務所が協議を進めている。加賀郡勝示札の近くから、過所様木簡が出土している。羽咋郷長が道路修理のために人を派遣した時に発給した通行証で、加茂遺跡に往来人をチェックする機能があったことを示す木簡である。加茂遺跡は、関の機能を持った駅家だった可能性が高くなってきた。

加茂遺跡の背後にある丘陵では、弥生時代後期の高地性集落を検出している。斜面にテラスを階段状に造成し、その上に竪穴住居を建築している。調査区外の斜面にも段状のテラスがあり、かなりの規模で遺跡が造営されていたと思われる。調査は予想以上に難渋して冬も行わざるを得なくなり、例年のない大雪下での発掘となった。

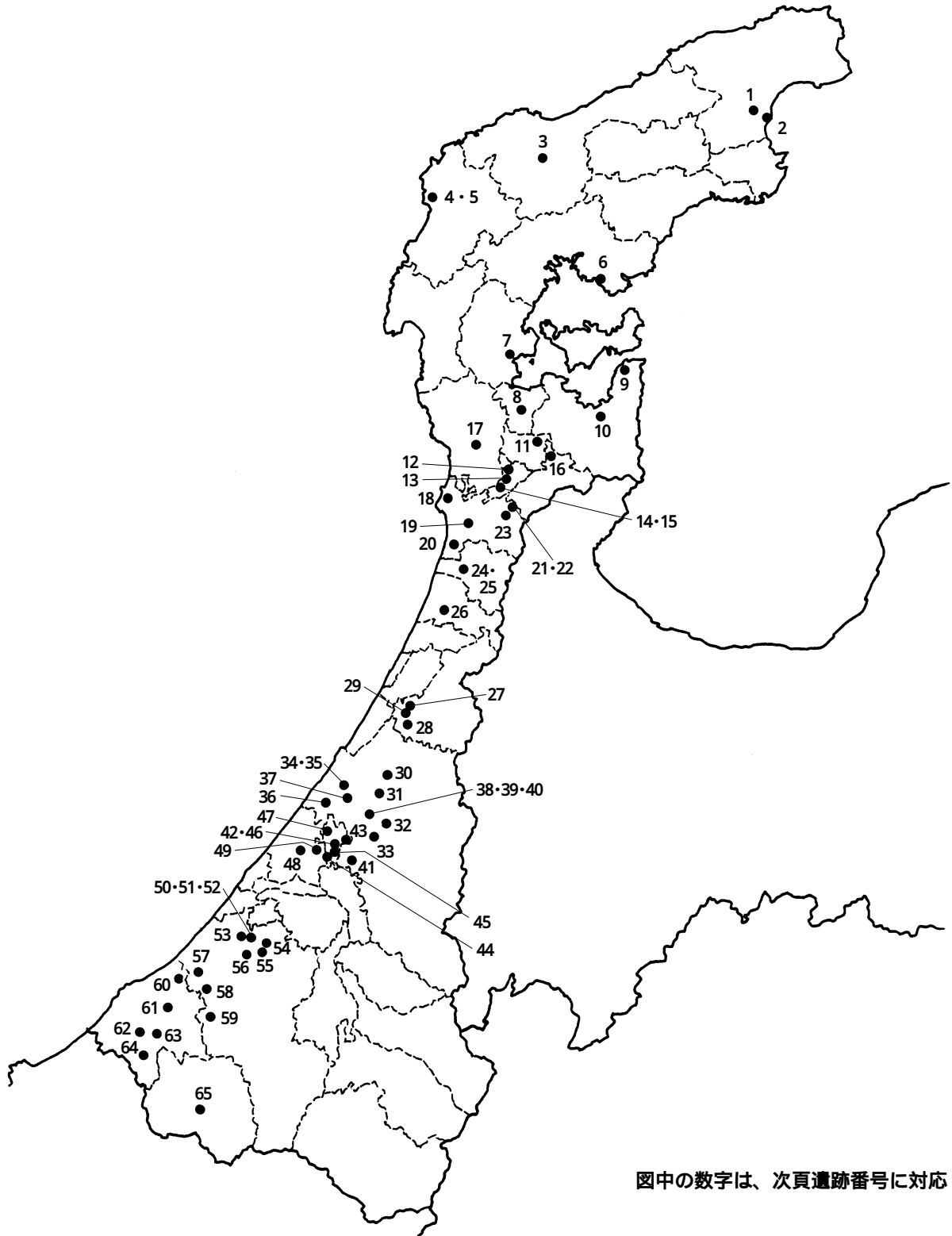
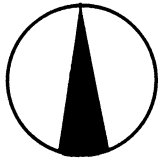
金沢西部第二土地区画製理事業にともなう畝田ナベタ遺跡の調査は二年目に入り、掘立柱建物を多数検出している。稲の品種と思われる単語を書いた木簡が、川跡から三枚出土している。また、建物群からやや離れたところで検出した井戸は、縦板井戸材の上に大型の蒸籠組の井戸枠を乗せ、地上部では格式の高い蒸籠組井戸のように見せている。井戸の内部から多量の斉串が出土しており、井戸祭祀が行われていた。これらの状況から、畝田ナベタ遺跡は加賀郡の物流にかかわる遺跡で、大野川左岸に置かれた戸水C遺跡(国府津?)と関係する施設と考えている。

金沢城跡の調査は、いもり堀での調査で大きな成果があがっている。金沢城創建期の様子や、土木技術を探る上で重要な調査となった。城内の調査は、緑化フェア準備に伴う小規模な調査が多く行われている。今後は、これまでの調査成果を報告書にまとめる作業が課題である。

千代能美遺跡の調査では、古墳時代初頭の首長居館を検出している。遺跡の周囲を堀で囲み、内部を柵列で二分している。北区画では大型掘立柱建物や井戸、棟持柱を伴う掘立柱建物があり、南区画では川跡から大量の木器が出土し、また川沿いに掘立柱建物を検出している。関東などで検出されている豪族居館は5世紀代の遺跡が多く、4世紀前半代の首長居館は調査事例が少ない。梯川中流域を領域とする首長の居館と考えているが、北陸の古墳時代初期社会を考える上で重要な調査となった。

九谷A遺跡では、絵付窯の基底部と思われる遺構を検出している。詳細は今後の検討に待ちたいが、九谷A遺跡で色絵磁器の生産がおこなわれていた可能性を示唆する遺構である。

平成12(2000)年度に実施された発掘調査一覧

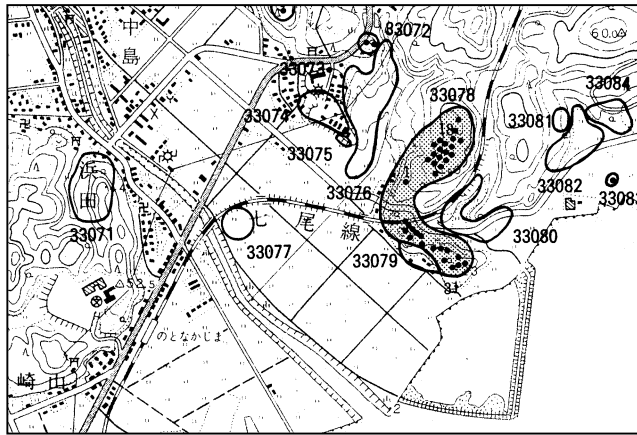


	遺跡名	所在地	時代	調査担当	調査面積 (㎡)	着手時期	終了時期
1	柏原ミツハシ遺跡、柏原ゾッチン遺跡	珠洲市宝立町柏原	弥生～中世	県埋文センター	1,180	平成12年5月9日	平成12年8月1日
2	鶴島遺跡	珠洲市宝立町鶴島	古代・中世	県埋文センター	1,350	平成12年7月3日	平成12年9月29日
3	西脇遺跡	輪島市西脇町	古墳	輪島市教委	580	平成12年10月2日	平成12年11月30日
4	鹿嶋タタラ遺跡	鳳至郡門前町字道下	平安	門前町教委	250	平成12年5月1日	平成12年7月31日
5	鹿嶋タタラ跡	鳳至郡門前町字道下	古代	門前町教委	250	平成12年9月17日	平成12年11月30日
6	鹿波しゃく川遺跡	鳳至郡穴水町鹿波	弥生・古墳・古代	県埋文センター	200	平成12年6月19日	平成12年8月3日
7	山岸古墳群	鹿島郡中島町岩崎	古墳	県埋文センター	200	平成12年10月5日	平成12年12月21日
8	吉田C遺跡	鹿島郡田鶴浜町吉田	弥生・古墳・古代	県埋文センター	520	平成12年8月7日	平成12年9月21日
9	三室オオタン遺跡、三室トクサ遺跡 三室新崎遺跡	七尾市三室町・端浦町	古墳・古代	七尾市教委	4,300	平成12年5月8日	平成12年11月30日
10	万行遺跡	七尾市万行町	弥生・古墳・中世	七尾市教委	3,700	平成12年4月17日	平成13年3月31日
11	川田古墳群	鹿島郡鳥屋町字川田	古墳	鳥屋町教委	15,000	平成12年7月29日	平成12年8月12日
12	徳丸遺跡	鹿島郡鹿西町徳丸	縄文～中世	県埋文センター	485	平成12年4月17日	平成12年6月12日
13	ゴロジヤマ1号墳	鹿島郡鹿西町能登部下	古墳	鹿西町教委	300	平成12年5月22日	平成12年6月30日
14	テラダヤチ遺跡	鹿島郡鹿西町金丸	古墳・古代・中世	鹿西町教委	500	平成13年3月26日	平成12年7月31日
15	金丸宮地遺跡	鹿島郡鹿西町宮地	弥生・古墳・古代	県埋文センター	280	平成12年11月27日	平成13年2月9日
16	坪川遺跡	鹿島郡鹿島町坪川、在江	古墳・古代・中世	県埋文センター	300	平成12年6月27日	平成12年8月7日
17	館郷堂遺跡	羽咋郡志賀町館	古代・中世	県埋文センター	330	平成12年11月13日	平成12年12月15日
18	滝谷八幡社遺跡	羽咋市滝町	古墳	羽咋市教委	1,500	平成12年7月3日	平成12年9月30日
19	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町	弥生	羽咋市教委	100	平成12年5月15日	平成12年6月30日
20	粟生シモデ遺跡	羽咋市粟生町	古墳	羽咋市教委	400	平成12年10月5日	平成12年11月30日
21	大町ゴンジョガリ遺跡	羽咋市大町	古墳・古代・中世	県埋文センター	6,800	平成12年4月20日	平成13年2月13日
22	大町ダイジングウ遺跡	羽咋市大町	中世	県埋文センター	1,400	平成12年11月16日	平成12年2月9日
23	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	弥生～中世	県埋文センター	7,000	平成12年5月10日	平成12年11月15日
24	荻島遺跡	羽咋郡志雄町荻島	縄文～中世	県埋文センター	480	平成12年5月18日	平成12年7月3日
25	荻島B遺跡	羽咋郡志雄町荻島	弥生～古代	県埋文センター	310	平成12年4月24日 平成12年10月31日	平成12年5月17日 平成12年11月17日
26	御館館跡	羽咋郡押水町御館	中世	押水町教委	300	平成12年5月8日	平成12年10月31日
27	谷内石山古墳群	河北郡津幡町	弥生・平安	津幡町教委	550	平成12年4月6日	平成12年9月8日
28	北中条遺跡	河北郡津幡町	縄文～古代	津幡町教委	10,700	平成12年9月6日	平成13年7月6日
29	加茂遺跡	河北郡津幡町加茂	弥生・古代	県埋文センター	7,500	平成12年5月8日	平成13年3月16日
30	観法寺古墳群	金沢市観法寺町	弥生・古墳・古代	県埋文センター	4,000	平成12年4月26日	平成12年10月26日
31	神谷内古墳群	金沢市神谷内町	古墳	金沢市教委	3,000	平成12年5月22日	平成12年11月30日
32	田上東遺跡、田上西遺跡、 田上北遺跡	金沢市田上町西・田上町北・ 田上町理	古墳・古代・中世	金沢市教委	11,200	平成12年4月10日	平成12年12月15日
33	大桑B遺跡	金沢市大桑町	平安・中世	金沢市教委	900	平成12年11月20日	平成12年3月19日
34	畝田大徳川遺跡、畝田B遺跡、 畝田C遺跡	金沢市畝田中3丁目畝田西3丁目	弥生～中世	金沢市教委	2,800	平成12年5月22日	平成12年12月20日
35	畝田・寺中遺跡、畝田B遺跡、 畝田C遺跡、畝田ナベタ遺跡、 畝田無量寺遺跡	金沢市畝田西・中・東・無量寺	弥生～近世	県埋文センター	24,350	平成12年4月26日	平成13年1月11日
36	豊穂遺跡	金沢市豊穂町	古代・中世	県埋文センター	800	平成12年4月17日	平成12年6月2日
37	松村遺跡群	金沢市松村3丁目・7丁目	弥生～中世	金沢市教委	1,440	平成12年7月24日	平成12年10月13日
38	広坂遺跡	金沢市広坂1丁目	弥生～近世	金沢市教委	9,000	平成12年4月5日	平成12年8月31日
39	広坂遺跡	金沢市広坂1丁目	弥生～近世	金沢市教委	160	平成12年10月23日	平成12年11月30日
40	金沢城跡	金沢市丸の内	近世	県埋文センター	1,050	平成12年5月9日	平成12年8月28日
41	額谷遺跡	金沢市額谷町	弥生・古墳・中世	県埋文センター	1,500	平成12年8月17日	平成12年12月22日
42	三納トヘイダゴシ遺跡	石川郡野々市町本町	平安・中世	野々市町教委	3,400	平成12年5月8日	平成12年3月31日
43	扇が丘ハワイゴク遺跡	石川郡野々市町扇が丘	平安	野々市町教委	260	平成12年5月18日	平成12年6月30日
44	未松A遺跡	石川郡野々市町中林2丁目	古墳・古代	野々市町教委	600	平成12年6月14日	平成12年7月31日
45	粟田遺跡	石川郡野々市町本町5丁目	古代	野々市町教委	680	平成12年7月3日	平成12年8月20日
46	三納ニシヨウサ遺跡	石川郡野々市町字三納	中世	野々市町教委	3,100	平成12年8月25日	平成12年12月22日
47	三日市A遺跡	石川郡野々市町三日市町	弥生～中世	野々市町教委	1,400	平成12年9月25日	平成12年12月25日
48	野本遺跡	松任市倉光二丁目	弥生	松任市教委	600	平成12年6月15日	平成12年8月31日
49	橋爪B遺跡	松任市橋爪町	弥生・古代・中世	県埋文センター	600	平成12年4月27日	平成12年6月26日
50	千代・能美遺跡	小松市千代町	弥生・古墳	県埋文センター	7,000	平成12年5月1日	平成13年3月19日
51	千代オオキダ遺跡	小松市千代町	弥生～中世	小松市教委	8,500	平成12年5月22日	平成13年3月30日
52	千代オオキダ遺跡	小松市千代町	弥生～中世	小松市教委	330	平成12年6月6日	平成12年8月11日
53	一針B遺跡、一針C遺跡	小松市一針町	弥生・古墳	県埋文センター	1,700	平成12年4月28日	平成12年9月25日
54	埴田後明神4号墳	小松市埴田町	古墳	小松市教委	20	平成12年8月1日	平成12年8月10日
55	荒木田遺跡	小松市荒木田町	古墳・古代・中世	小松市教委	220	平成12年5月10日	平成12年6月30日
56	浄水寺遺跡	小松市八幡町	古代・中世	県埋文センター	1,700	平成12年8月17日	平成13年1月19日
57	額見遺跡(H地区)	小松市串町・額見町	古墳・古代	小松市教委	4,000	平成12年4月10日	平成12年12月20日
58	刀何理遺跡、狐森塚遺跡	小松市矢田野町	古墳・古代	県埋文センター	530	平成12年9月25日	平成12年11月15日
59	那谷B遺跡	小松市那谷町	古代・中世	県埋文センター	500	平成12年10月12日	平成12年12月6日
60	柴山出村遺跡、柴山貝塚	加賀市柴山町	縄文・古代	県埋文センター	512	平成12年9月26日	平成12年11月15日
61	片山津玉造遺跡	加賀市富塚町	古墳	県埋文センター	420	平成12年11月13日	平成12年12月14日
62	山代再興九谷窯跡	加賀市大聖寺南町	近世	加賀市教委	300	平成12年6月12日	平成12年8月31日
63	保賀遺跡	加賀市保賀町	古代	加賀市教委	510	平成12年9月25日	平成12年3月30日
64	直下遺跡	加賀市直下町	弥生・古代・中世	県埋文センター	1,600	平成12年6月16日	平成12年10月17日
65	九谷A遺跡	江沼郡山中町九谷町	中世・近世	県埋文センター	2,700	平成12年5月17日	平成12年12月20日

ヤマントン
山岸古墳群

所在地 鹿島郡中島町中島地内
調査面積 200m²

調査期間 平成12年10月5日～平成12年12月21日
調査担当 土屋宣雄 大西 顕



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

山岸(ヤマントン)古墳群は鹿島郡中島町、熊木川河口及び七尾西湾を望む丘陵上に位置する。古墳時代中期から終末期にかけての古墳群で、確認総数41基から成る。今回県営ほ場整備事業に付随する道路建設工事に係り25号墳の発掘調査を実施した。

墳丘は径約11mの円墳である。緩斜面を切り盛りし、墳丘を構築している。墳丘表面には、元の石室石材が散乱していた。また、墳丘裾部には、これを区画するような石列が検出されている。盛土内では、特に前庭部側面や石室の周囲から多数の石が出土した。土

留め用としての性格が一つに考えられる。周溝は北西の山側に掘り込まれている。

埋葬施設として、無袖型の横穴式石室の一部が確認された。石室全長約3.6m、玄室長約2.5m、玄室奥幅約1.2mで、南西方向に開口する。玄室床面は、小石を敷いた上に板石石材等をのせて構築されている。玄門側の小石を厚く盛ることにより奥壁側が低くなっている。

石室内からは骨片が出土しているが、小片であり詳細は不明である。

副葬品は、現在整理中であるため暫定的な紹介であるが、直刀、刀子、鉄鏃、耳環2、勾玉3、管玉2、ガラス製丸玉27、白玉9、土製丸玉3、ヤリガンナ、須恵器提瓶2、甕1などが出土している。またベンガラが塊状となって2箇所から検出された。盗掘を受けていることを考慮すると、副葬品の数は比較的豊富であると言えよう。これら副葬品は奥壁側から多く出土している。また、須恵器提瓶には時期差があることから、1回以上の追葬が想定される。そして副葬品は追葬により奥壁側に片づけられているものと推定される。須恵器は6世紀末から7世紀初めの時期のものである。

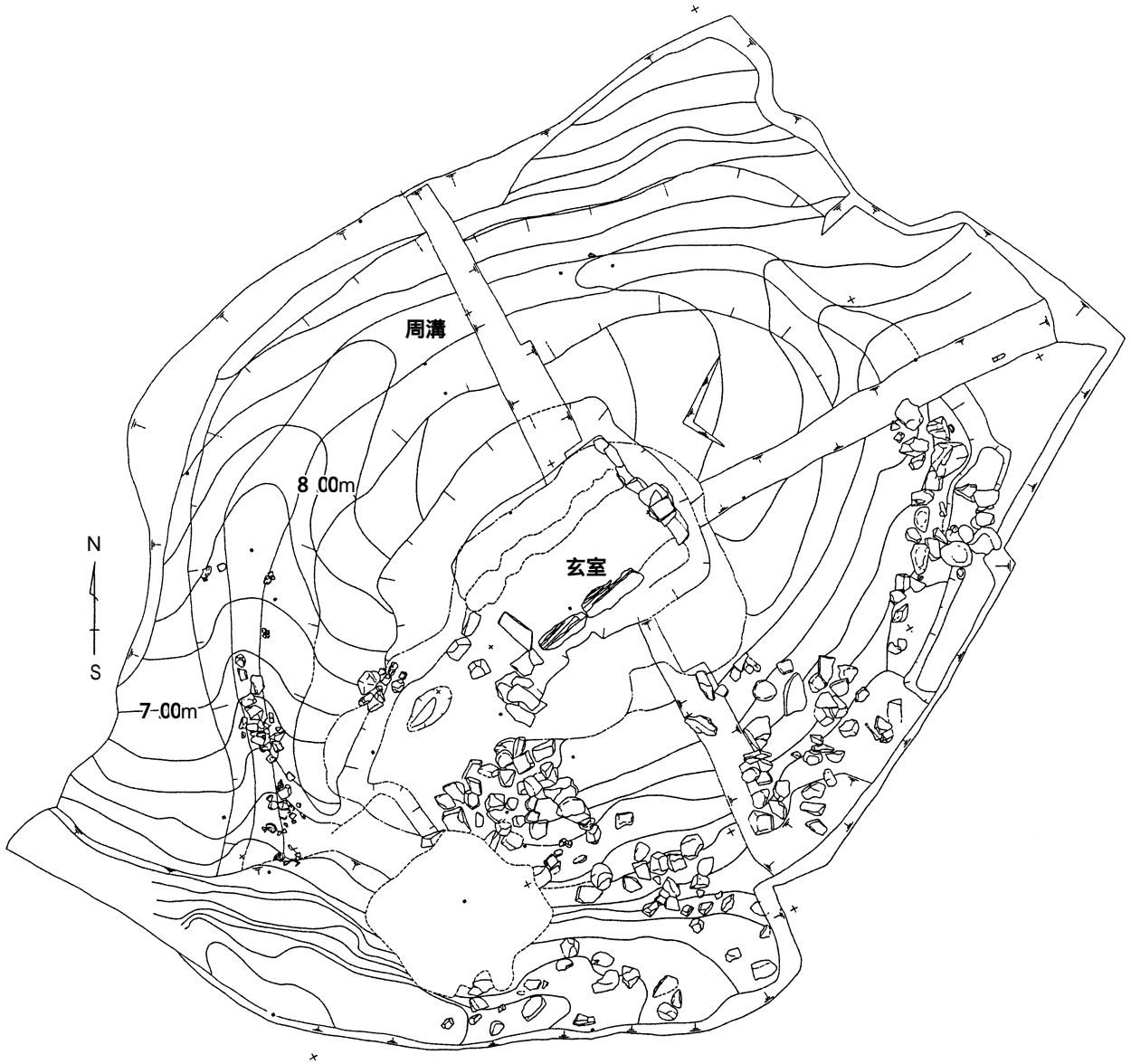
なお、墳丘盛土下の旧表土付近から、金属製品、土師器椀、須恵器坏身、須恵器甕が完形に近い形で出土している。須恵器の時期は5世紀代まで遡る可能性のある古いものである。 (大西)



25号墳 墳丘全景 (北東から)



玄室全景 (北西から)



25号墳測量図 (S = 1 / 100)



石室全景 (南西から)



副葬品出土状況 (奥壁付近)

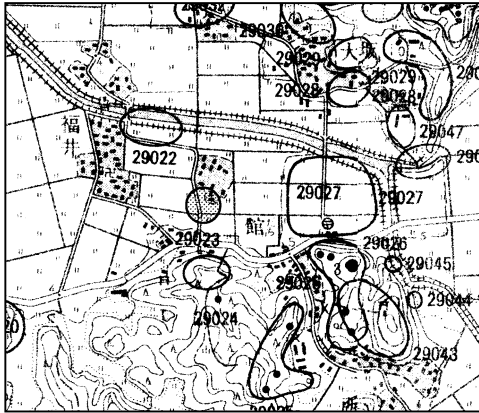
館郷堂遺跡

所在地 羽咋郡志賀町館地内

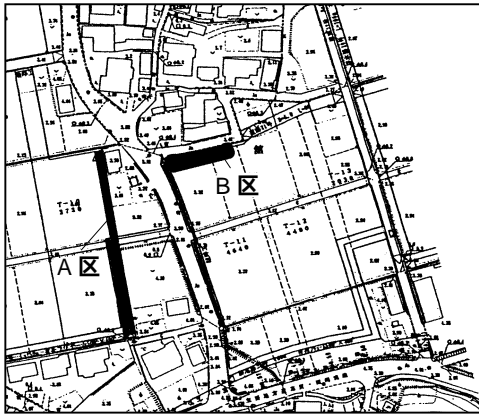
調査期間 平成12年11月13日～平成12年12月15日

調査面積 330m²

調査担当 久田正弘 荒木麻理子 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 3,000)

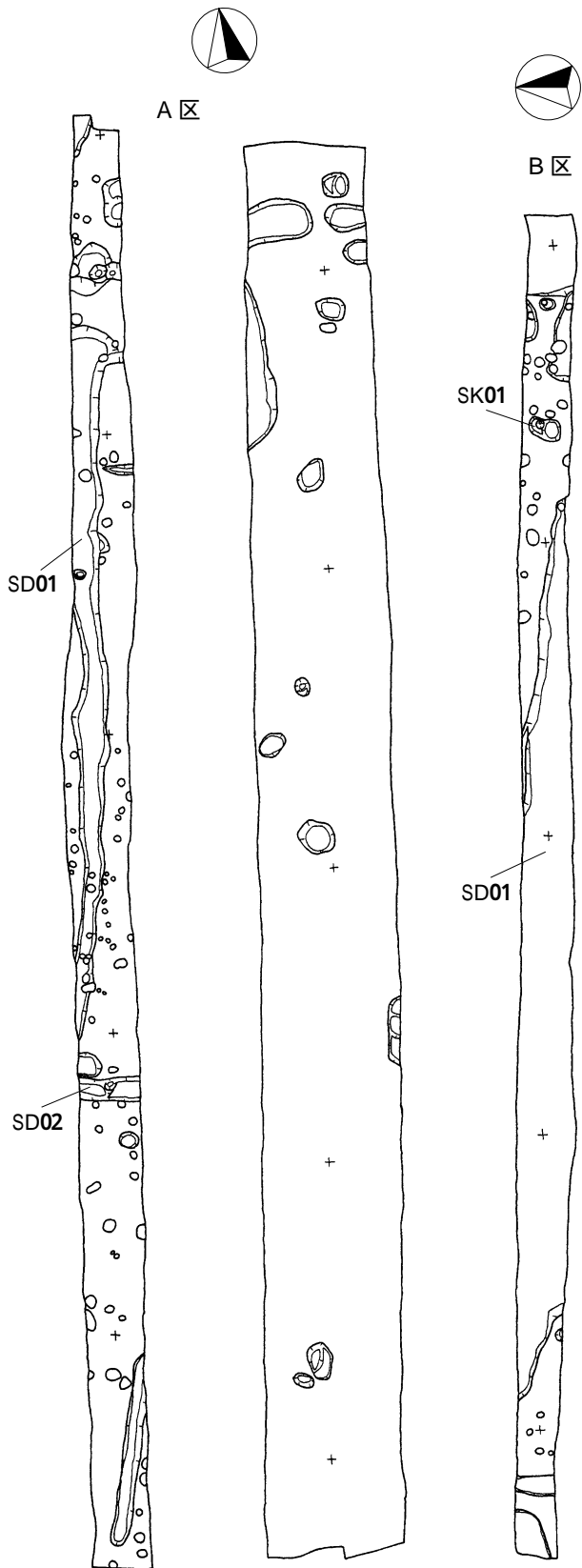
館郷堂遺跡は、志賀町の南東部、館地内に位置し、於古川沿いに広がる水田地帯に立地する。県営ほ場整備事業（於古川地区）に伴う発掘調査であり、調査区は道路を境に西側をA区、東側をB区とした。遺構・遺物は少なく、包含層出土遺物がほとんどを占める。時代は古代から中世である。遺構検出面は褐色粗砂層である。

各調査区の概要を述べていく。A区では溝を2条検出した。SD01は幅80cm、深さ15cmを測り、断面は逆台形状である。須恵器、土師器が少量出土している。SD02は幅75cm、深さ30cmを測り、緩やかに落ち込んでいる。土師器、珠洲焼が出土した。中央から南端の包含層では、土師器や須恵器、珠洲焼や陶磁器などが出土しており、古代のものが大半である。南端は攪乱を受けており、遺構は確認できなかった。

B区では土坑と河跡（堀？）を検出した。SK01は最大径1m、深さ20cmを測り、楕円状である。石製硯が出土した。長さ12.3cm、幅7.7cmを測り、近江産の高嶋硯と考えられ、時期は中世後半と思われる。オカ（墨を磨る所）とムコウデ（墨を溜める所）の境目がへこんでおり、かなり使い込んだ痕跡が認められる。硯の出土は識字層の存在を反映するので、このあたりに居住した有力な在地領主を想定できよう。SD01は推定幅5m、深さ

45cmを測る。南東から北西に向けて流れており、土師器、須恵器、珠洲焼、曲物が出土した。曲物は底の部分と思われ、最大径12.6cm、厚さ6mmを測る。下辺と斜辺に割られた痕跡が認められ、台形状を呈している。少々剥離しているものの、内外面とも黒漆が塗布されており、内面には一部焼けた跡も認められた。

さて、遺跡の性格であるが、本遺跡の所在する館という地名に注目したい。この地名は南北朝時代、地元出身守護吉見氏の軍奉行として活躍した土田氏の館跡に由来するといわれている。『志賀町史』には、土田氏の館跡が村内にあること、東四十二間・西四十六間・南四十六間・北五十六間の略方形プランを呈していたこと、東・西・南三方は堀、北は河で防備していたことなどが記されている。だが、その跡地として説得力をもつ有力な遺構の確認例はない。今回出土した硯や検出した河跡が、土田氏の館跡の位置を特定していく上で有効な手がかりになるのではないだろうか。（谷内）



調査区遺構図 (S = 1 / 250)



A区SD01実掘状況(南から)



硯出土状況



B区完掘状況(東から)

掘立柱建物は3間×3間、3間×2間とほぼ同じ大きさを持ち、いずれも北西-南東方向を主軸とする。竪穴建物は3区東南隅で発見された。一辺4mの方形プランで、貼床、カマドは確認されなかった。

掘立柱建物と竪穴建物の間には畝溝が見られ、建物周辺は畑地であったことが認められた。建物北方には掘立柱建物の主軸に沿った溝が走っており、集落の境界を示すと考えられる。溝は途中切れているところがあり、出入口になっていたと思われる。

中世

14世紀後半～15世紀の掘立柱建物跡、井戸、土坑などを確認した。遺構は3区南側に集中し、調査区西側にものびる模様である。掘立柱建物は一定の場所に集中しており、同じ箇所でも何度も立て替えが行われていたようである。建物の数や規模は柱穴が縦横無尽に掘られ復元しづらいことから現時点ではよくわからない。

井戸は13基確認された。井戸枠は石組と曲物のセットとなるものと曲物のみの2タイプが存在する。井戸は建物集中域から離れたところにも多く存在していることから屋内と屋外両方に構築されていたと思われる。

出土遺物は土師器皿、珠洲焼甕、すり鉢等土器・陶磁器の他、漆器、箸、呪符木簡など木製品が多く発見されている。前述した大町ダイジングウ遺跡と時期的に併存し、口能登の中世集落の構造を考える上で非常に興味深い。

(田村)



竪穴建物群（古墳時代）

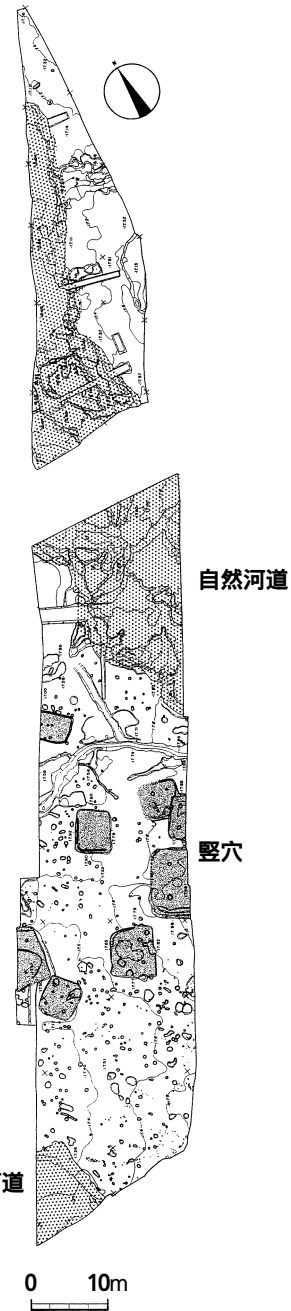


図3 古墳時代遺構図

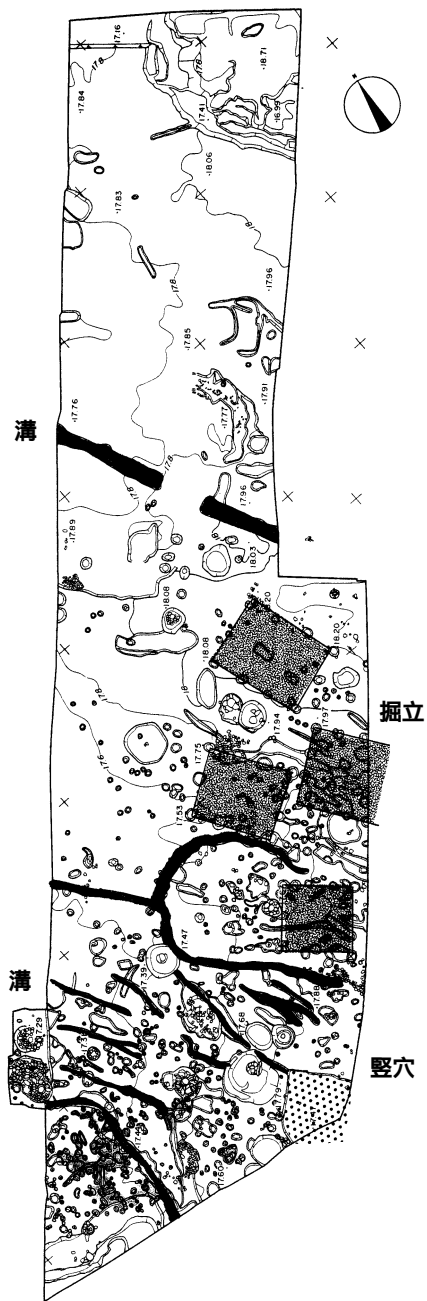
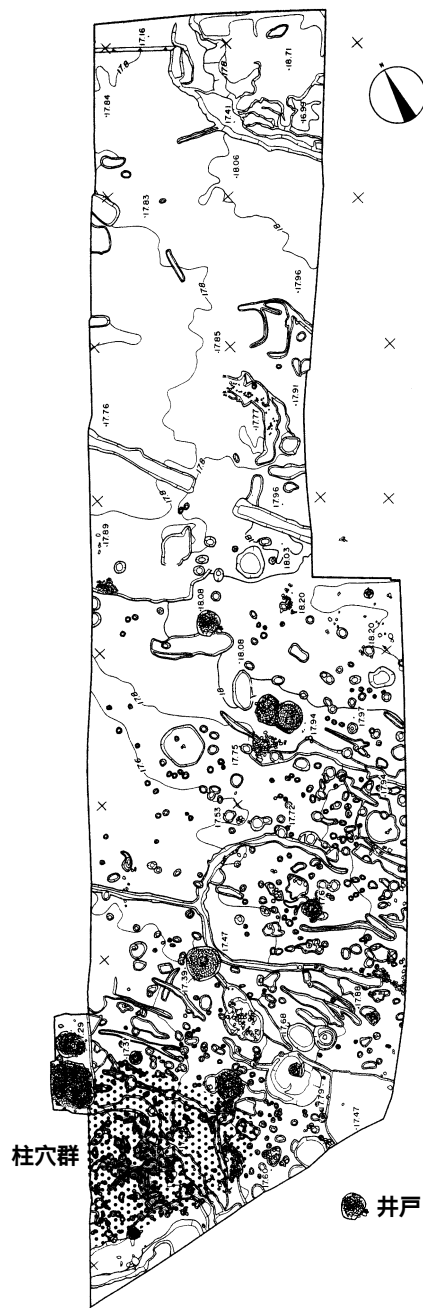


图4 古代遺構図





自然河道（古墳時代）



掘立柱建物跡（古代）



河からみつけた小壺（古墳時代）



掘立柱建物群と井戸（中世）



水さらし場跡（古墳時代）



石組井戸（中世）



竪穴建物跡からみつけた土器（古墳時代）



呪符木簡出土状況（中世）

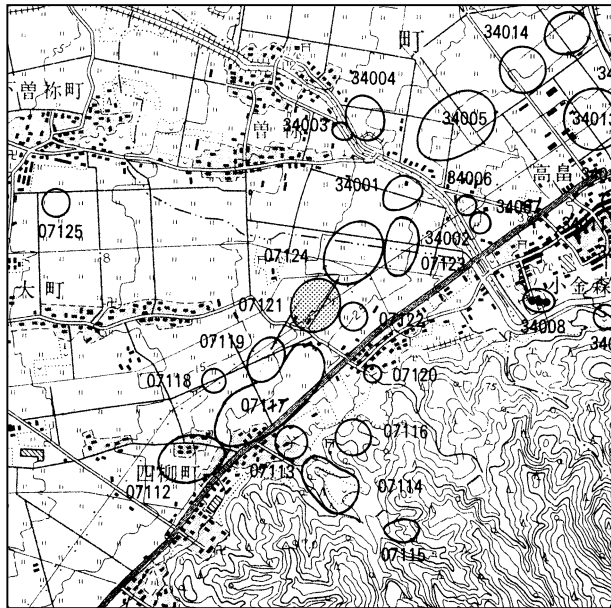
大町ダイジングウ遺跡

所在地 羽咋市大町地内

調査期間 平成12年11月16日～平成13年2月9日

調査面積 1,400m²

調査担当 宮川勝次 岡田有紀子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

大町ダイジングウ遺跡は、能登半島の基部を北東から南西方向に帯状に走る平野部（邑知地溝帯）に位置し、その南東側山麓域（碁石ヶ峰）の大町地内に所在する。

発掘調査は、国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴い、平成11（1999）年度に引き続いて実施した。調査区は、昨年度調査区の北側に位置する。

検出した遺構、遺物は中世の井戸跡、土坑、溝、ピット、珠洲焼、土師皿等であり、昨年度に比べて遺構密度、遺物量は減少している。

井戸跡は石組みのものを3基確認し、その内の2基（SE01、02）は内部に曲物が備え付けられている。共に、直径約150cmを測り、

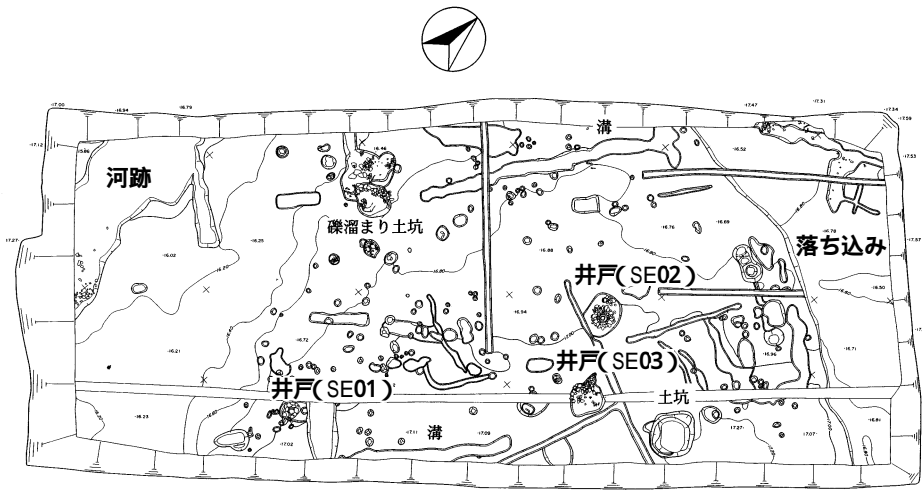
自然石を使用していると思われる。曲物は2段もしくは3段組まれており、直径約40～60cmを測るものである。また、下段のものほど小さなものが使用されており、1段目は石の崩落により遺存状態は悪い。

SE01では2段目と3段目の曲物の間に、長さ約60cm、幅約6cmを測る板材が置かれており、それらは曲物を安定させるためのものであろうか。遺物は珠洲焼片、漆椀、曲物の底板等が出土している。SE02、03からは13世紀代と思われる完形の土師皿が数点出土している。

土坑は10基以上検出した。その大半は、直径約70～100cm、深さ約10～40cmの大きさで、内部に拳大ほどの礫がみられる。これらの礫は、煩雑に入ったものと組み立てられている状態のものが検出できた。後者の中には、礫が比熱を受けているものも確認でき、炉跡という可能性がある。これらの土坑からは、珠洲焼片が数点出土している。また、直径約3mを測り、覆土に炭粒が多量に混じるものや、直径2m前後の土坑が数基切り合いを持っていると思われるもの（礫溜まり土坑）等を検出できたが、性格は不明である。

以上の遺構、遺物は、調査区の中央部から確認できたものであり、調査区の南側と北側は、河跡と落ち込みにより希薄である。河跡からは珠洲焼等が多量に出土しており、須恵器や弥生土器も確認できたが、これらは流れ込みによるものと思われる。北側の落ち込みは谷部へと向かう自然地形によるものであり、その谷部を挟んで北方には中世の集落遺跡である大町ゴンジョガリ遺跡が存在する。今後、近隣する大町ゴンジョガリ遺跡、四柳ミッコ遺跡、四柳白山下遺跡等の調査成果や地形的要因等を踏まえて、本遺跡一帯の中世像を検討していく必要がある。

（宮川勝）



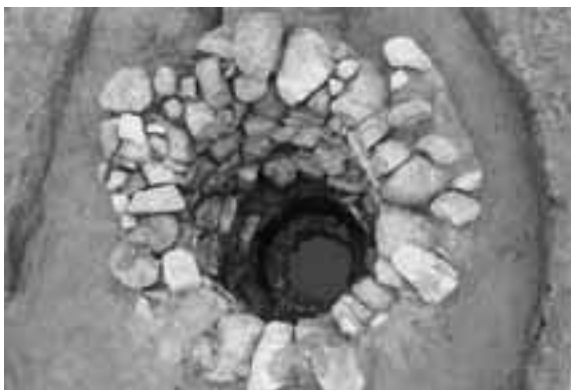
調査区全体図 (S = 1 / 500)



調査区全景



土師皿出土状況



石組井戸完掘状況

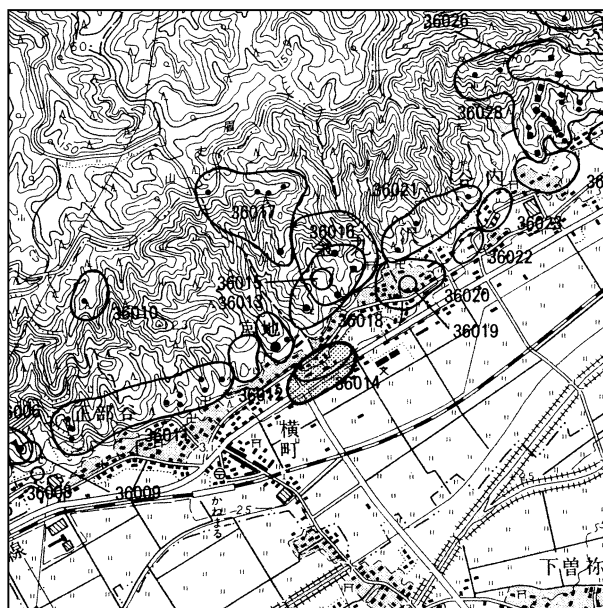


石組井戸断ち割り状況

金丸宮地遺跡

所在地 鹿島郡鹿西町金丸地内
調査面積 280m² (累積800m²)

調査期間 平成12年11月27～平成13年2月9日
調査担当 安中哲徳 三谷正輝



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

金丸宮地遺跡は、昭和35(1960)年から平成11(1999)年までの間の数度の調査により、古墳時代から奈良・平安時代の集落として知られており、特に古墳時代中期の土器は金丸宮地式土器として石川県の標識資料となっている。東往來の酒井町から邑知瀧東側の大町を通り、西往來の宮地を結ぶ道路の結節点に当たり、古来より交通の要衝となっていた場所である。今回の調査地は眉丈山系から派生した複数の小河川が作りだした、小規模な扇状地が重なった場所に位置しており、邑知地溝帯との比高差約1～2m、標高約4～5mを測る。

歩道整備に係る発掘調査として、過去2年間には町教委により宮地交差点東側の調査が行われており、今回の調査地は交差点の西側に位置す

る。北東約3kmに所在する鹿西町徳丸遺跡や対岸の羽咋市四柳白山下遺跡でみられるように、遺構面が複数存在することが確認され、邑知地溝帯両側の地域では、古来より各所で土砂崩れ等による災害が繰り返されてきたことがわかった。全部で6面を数える各遺構面の境は通常は砂層を挟むことにより区別できるが、今回は土砂の堆積が均一でなく面の把握が難しかったこともあり、また、1月の大雪で70cm以上も雪が積もったことにより、除雪をしながらの作業をせざるを得なかったため、遺構検出と掘削に思いのほか手間どった。また、遺構面自体もその後の土石流等により削平を受けているため、遺構の残り自体も非常に良くない状況であった。

古代および中世に属する1面と古墳時代中期もしくは後期に属すると思われる2面からは、畦畔状遺構や杭列、溝跡、土坑などが断片的に検出され、珠洲焼、須恵器、土師器などが若干出土しており、生産域であったと思われる。古墳時代初頭に属する3面から弥生時代終末に属する4面、弥生時代後期後半に属する5面にかけての面には小溝や小穴、杭列、土坑が確認され、集落縁辺部もしくは水田等の生産域であったとみられるが、遺構面は安定しておらず、正確な面の時期、性格等の把握については今後の課題としたい。3面の溝跡からは古墳時代に属すると思われる緑色の管玉が1点出土しており、付近の山側に古墳が存在していたものと考えられる。また、4面からは50～60cmの幅で踏み固められた両側側溝を持つ道路状の遺構が部分的にみついている。道路としては幅が狭く農道的な性格も考えられるが、現在の西往來に並行していることは興味深い。6面からは弥生時代後期後半の集落跡が確認されている。建物跡の炉跡や多数の柱穴、大型の土坑等がみつかり、土器もまとまって出土している。竪穴か平地式の建物跡や掘立柱建物跡が存在していたと思われるが、上部の削平が著しいため、建物の種類や規模、棟数等の把握は今後の課題としたい。特徴的な遺物としては土錘がいくつか出土しており、邑知瀧へ繰り出して漁労に出かけていた当時の人々の姿が想像できる。また、小型の木棺墓と思われる方形の土坑がみついている。副葬品はみられず、木棺構造も明らかにすることはできなかったが、一括土器が得られている。

他にも各面の中間層からは弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土器が多数出土している。山側に展開するこれらの時期の集落跡が土石流等によって流され遺物が堆積したもので、土器の残りは非常に良い。近年の邑知地溝帯周辺の発掘調査により、弥生時代から古墳時代にかけての資料がかなり増加してきている。今後これらの資料を整理・検討することにより、加賀地方に比べ遅れている能登地方の土器編年を確立していきたい。

また、調査区の西端部は旧河川等により地盤が西側へ落ち込んでいることが確認されており、さらに西側の試掘調査の結果からも、この河川を境に遺跡は続かないようである。 (安中)



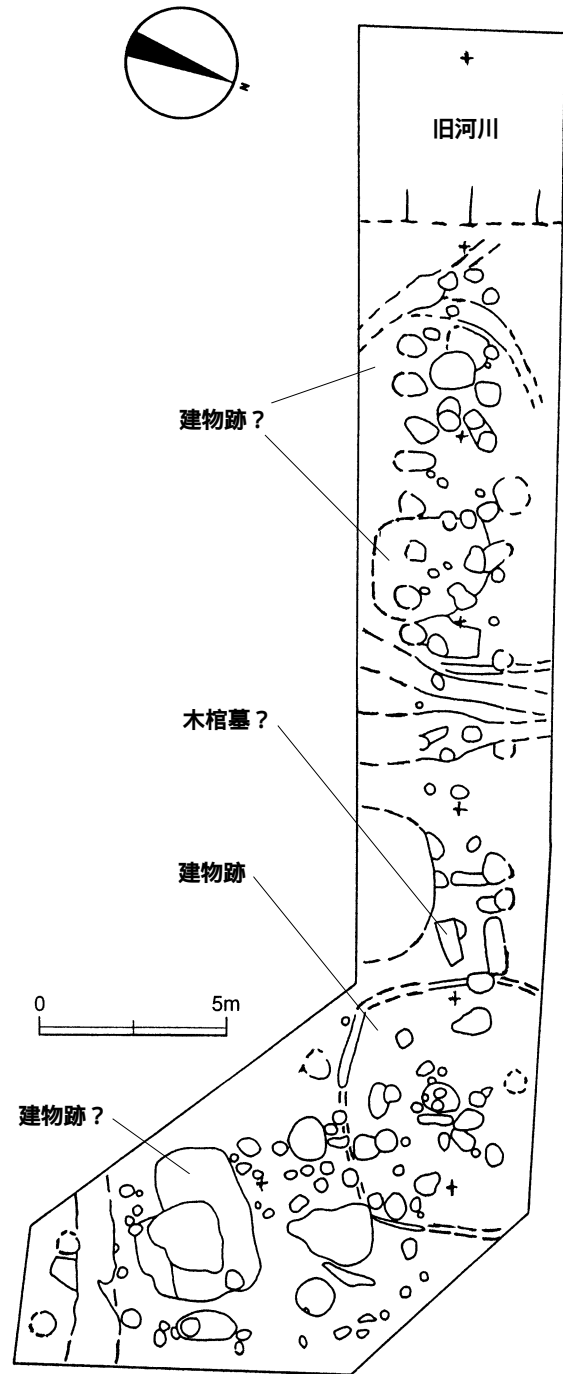
6面完掘状況(西から)



6面木棺墓?完掘状況(西から)



住居跡完掘状況(北から)



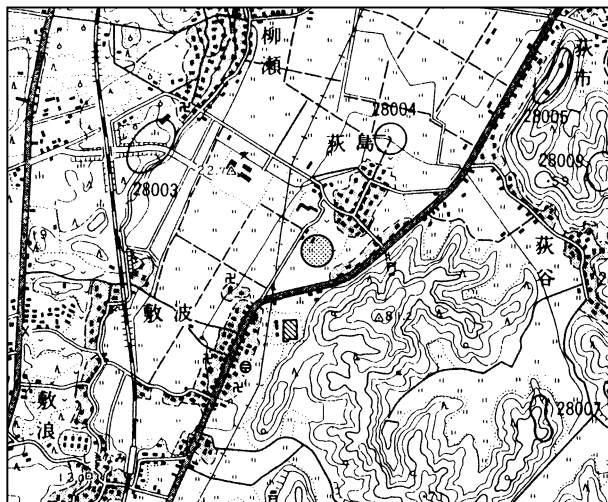
6面遺構略図(S=1/200)

荻島 B 遺跡

所在地 羽咋郡志雄町敷波地内

調査期間 平成12年4月24日～同年5月17日、平成12年10月31日～同年11月17日

調査面積 240㎡、70㎡ 調査担当 立原秀明 加藤克郎



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



6、7区完掘状況 (北西から)



調査区遠景 (西から)

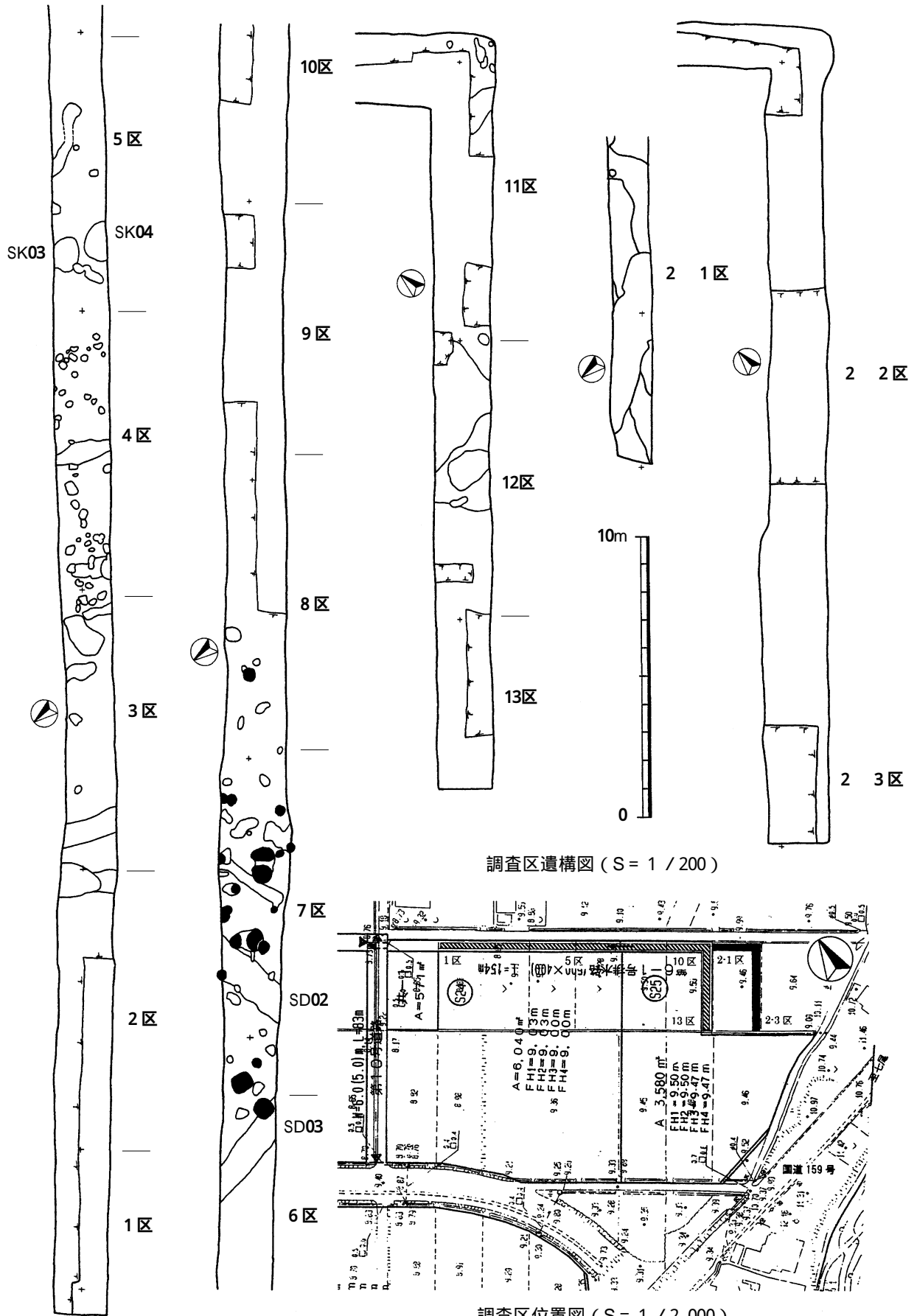
志雄町は日本海に突出する能登半島の基部に位置し、金沢や七尾に出るよりも峠を越えて富山県の氷見に出た方が距離的に近く、古代には大伴家持が、近世には幕府の巡見使が通行した場所であり能登・加賀・越中を結ぶ交通の要衝であった。

荻島 B 遺跡は七尾から羽咋にかけて走る邑知地溝帯の南西端に位置し、羽咋砂丘の後背地に立地している。調査地点での微地形は南東側が微高地状になっており1・2・9・10・13・2 - 2・2 - 3区が低地になっている。9・10区では主に古代の須恵器や土師器が比較的多く出土し、墨書土器も1点確認された。珠洲焼の破片などもみられたが、調査区内で中世の遺構は確認できなかった。

5・6・7区では弥生時代と古代の遺構・遺物を検出した。弥生時代の遺構には調査区を斜めに横断する6区のSD03と7区のSD02があり幅約1～1.2m、深さ約0.6～0.7mを測る。両者は覆土が同質であり、おそらく調査区外でつながるものと思われるが性格は不明である。出土遺物は弥生後期～終末期の土器小片が極少量出土している。また5区では同時期の所産と考えられる土坑2基を検出している。

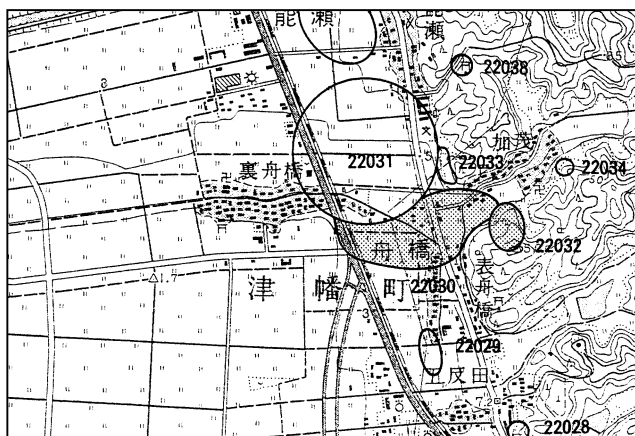
古代では掘立柱建物の柱穴を数十基検出し、そのうちの2基は明らかに方形の掘り方を呈している。数棟の建物が存在するものと思われるが、調査区内で規模が確定できたものは皆無である。

ちなみに柱穴が多く検出された6・7区の農道を挟んだ北西側の畑地は、現在、南西丘陵の中腹に鎮座する志乎神社がその昔にあったと伝承されている場所である。(立原)



加茂遺跡（第6次）

所在地 河北郡津幡町加茂・舟橋地内 調査期間 平成12年5月8日～平成13年3月16日
 調査面積 7,500m² 調査担当 本田秀生 浅野豊子 三谷正輝 安 英樹



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

津幡北バイパス改築工事に伴う加茂遺跡発掘調査は、今年度で第6次調査となる。今年度の調査区は、これまで調査された県道宇ノ気津幡線西側の調査未完了地（～区）と県道東側水田部分（区）、丘陵部分（マメダン山地区）である。

区は、第4次調査で、古代北陸道が発見された地点の下層（弥生時代後期）が対象である。また、第5次調査区内に残っていた10×8mの分厚いコンクリート製建物基礎が撤去され、今年度の調査区に追加した。

この部分は上層（古代）から調査を実施し、既調査区を貫く大溝の始まり付近を検出した。大溝からは、全国初となる勝示札、過所様木簡などが出土し、注目を集めた（巻頭図版）

下層は、古代面から10cm程掘り下げて1回目の遺構検出を行った。調査区南側では溝、柱穴等の遺構を確認したが、北側では不整形な土坑状の落ち込みを確認したにとどまる。これら遺構の調査中にベース面にさらに遺構面が存在することがわかり、これを下層第2面とし調査を行った。

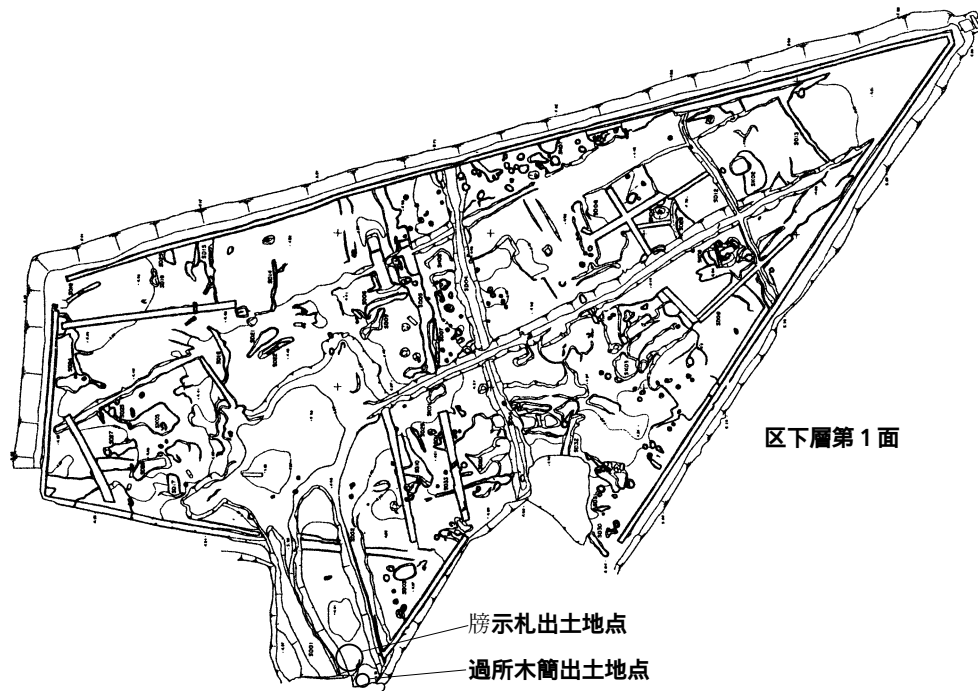
下層第2面ではベース面が西に行くほど低くなる。中央部からやや南側の地点で、黄灰白色の砂で充填された溝3条を確認し、さらにその5～15cm下の面で弥生時代後期の竪穴住居跡、平地式建物の周溝などを検出した。弥生後期の面はこれらの南側で急激に落ち込む。

一方北側は、白色の細砂で充填された溝1条を確認したにとどまるが、さらに20cm程下で弥生時代中期の遺構面が確認され、土坑、柱穴等を検出した。弥生時代中期面は調査区北端から10m程で

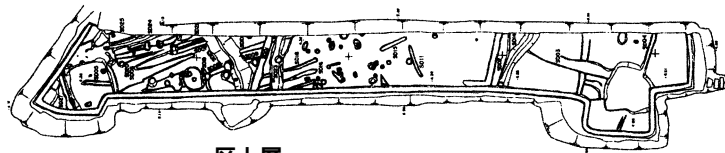
落ち込み始め、遺構、遺物は検出されなくなる。これらの結果、下層は複数の遺構面が存在すること。また、いずれの面も調査区の南側の谷に面して展開し、谷の埋没に伴い、南側へとその中心を移していったことが判明した。これまでの調査でも、上層の遺構も建物は埋没谷最深部の上には構築されていない。



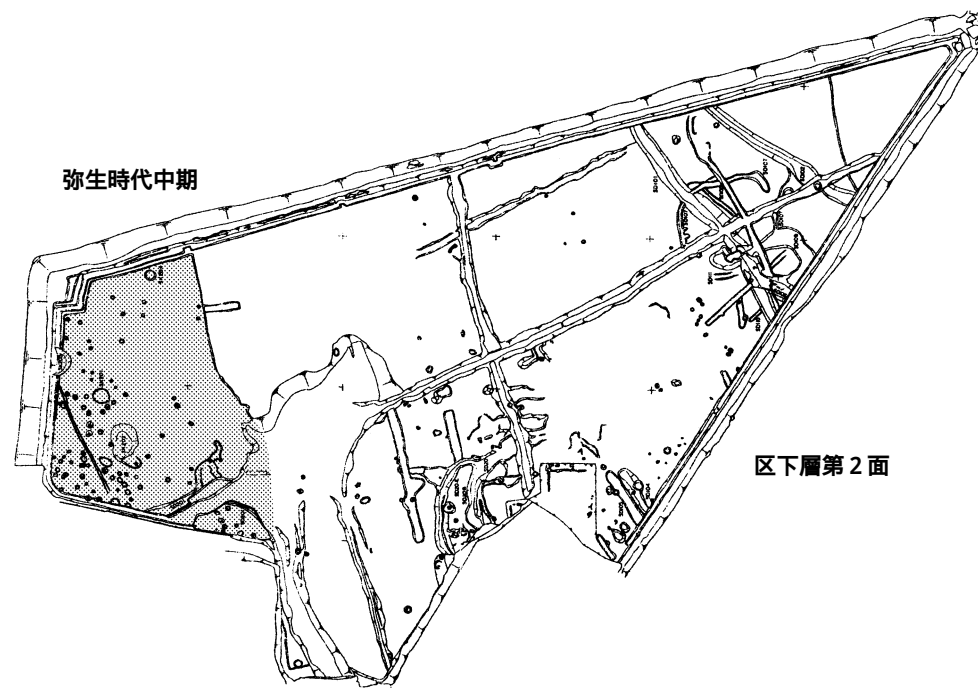
調査区的位置



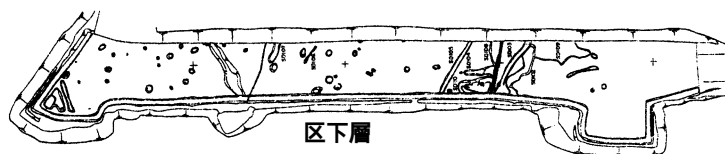
区上層



区上層

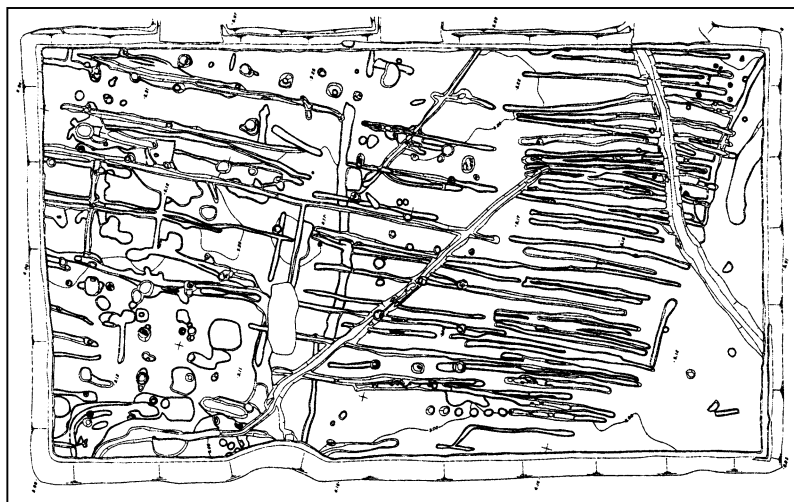


区下層



区下層

加茂遺跡(第6次) ~ 区遺構図(S=1/500)



加茂遺跡（第6次） 区上層遺構図（S = 1 / 500）

区は、第3次調査区間の農道部分、区は、農道の延長北の宅地角部分である。共に上層（古代）下層（弥生時代後期）の調査を実施した。上層は、区では大溝、部、柱穴、畝溝、区では柱穴、溝等を検出した。下層は、区で柱穴、溝、区は柱穴等を検出した。

～ 区とも下層出土土器は遺存状態が極めて悪い。また、区は狭い範囲であり、上下層とも既調査区遺構との関係

を検討し、その性格を明らかにしていく必要がある。

区は上層（古代）の調査を実施した。調査区南側は畝溝が集中し、柱穴等は存在しない。中央から北側では畝溝の他、柱穴、土坑等が検出され、2間×2間2棟、2間×3間以上1棟、2間以上×1間以上1棟の計4棟の掘立柱建物を確認した。この内、規模の判明しなかった2棟は、柱穴堀方の長径が約70cmと大きく、加茂遺跡の主要な建物と考えられる。

出土土器の時期は9世紀を中心とし、貯蔵具が目立つ印象を受ける。神功開寶、『与知』と書かれた墨書土器等が出土している。

マメダン山地区は、バイパス路線が丘陵にかかる部分で2つの丘陵張り出し部とその間の谷を調査した。西側の丘陵部では柱穴と少量の土器を確認した。谷部では谷埋没土中から古墳時代後期の土器が出土したが、遺構は確認できなかった。

東側の丘陵は、比較的急な北向きの斜面である。調査開始前は、竪穴住居跡10棟前後の規模の小さな集落を想定していたが、予想に反し、多数の弥生時代終末期の竪穴住居跡、土坑等を検出した。

竪穴住居跡は重複が著しく、検出段階では等高線に沿う帯のような状態でしか捉えられない部分もあった。また、堀方を持つものがほとんどで、それを念頭においた調査ができず、床面やプラン、柱穴すら捉えられなかったものが多い。調査時期や期間の問題もあったが、破壊に等しい調査となってしまったことをおわびしたい。正確な数は今後の検討によらねばならないが、総数は50棟前後と考えられる。土坑は55基確認したが、円形、方形の大型土坑を含み、多くが貯蔵穴と考えられる。竪穴住居跡と重複するものも多く、竪穴住居跡より古いものは、埋め戻されたものが多い。なお、掘立柱建物は確認されていない。出土遺物は、土器類の他、管玉およびその製作関連剥片、鉄器などがある。また、縄文土器、須恵器等も少量ながら出土している。

以上のような状況から本遺跡は、環壕を確認出来なかったが、宇ノ気町鉢伏茶白山遺跡や、七尾市国分高井山遺跡などと同じ高地性集落と考えられる。

今回の調査では、勝示札や過所様木簡の出土で、駅家や関との関連が強くなった。しかし、遺構の状況からは断定することができない。下層の調査では本遺跡で本格的に集落が営まれるのは弥生時代中期に遡る事が確認された。周辺を含めれば加茂遺跡周辺は継続的に集落が営まれ、伝統的集落と言える。このような伝統的集落が、律令体制の中での大きな役割を担っていたと考えられる。（本田）



加賀郡勝示札出土状況



マメダン山地区の住居跡群

観法寺古墳群

所在地 金沢市観法寺町地内

調査期間 平成12年4月26日～10月26日

調査面積 4,000m²

調査担当 安 英樹 湯川善一



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

観法寺古墳群は森下川右岸域の丘陵に立地する古墳群の一つとして周知されていた。発掘調査は、その一支群を対象として平成10(1998)年度から継続して実施されており、古墳群と古代・中世の祭祀遺跡が複合した状況が確認されている。第3次調査となる本年度をもって、一般国道8号東部環状道路改築工事に係る観法寺古墳群の発掘調査は完了した。

第3次調査の成果については、古墳群と古代の祭祀遺跡について新たな知見を加えるところが大きかったことから、時代を追って古い順に紹介したい。

古墳群は、標高約60mを測る尾根上に2基の墳丘が存在する。より高所に位置する第1号墳は、墳

丘の崩壊・流出が著しく、詳しい形状は明らかでないが、東側に周溝が遺存し、西側に張り出しが確認されており、全長18m程度の規模に復元される。埋葬施設は、後世に破壊されているが、底面に小口痕が残る箱形木棺が数基存在する。第1号墳に伴う遺物はきわめて少なく、墳丘周辺から土器片が出土した程度である。第2号墳は丘陵の先端側へ寄った位置にあり、墳丘は北東・南東・南西の3方に周溝を有し、北西に張り出しが見られる。平面的には長辺約18m・短辺約16mの長方形に全長3～4mの張り出しが付随する形状を呈し、比高は最大で約2mを測る。埋葬施設は2基確認されており、第1主体は長辺2.6m・短辺1.5mの墓坑に箱形木棺を、第2主体は長辺3.4m・短辺1.4mの墓坑に割板式木棺を内蔵するものと判断される。第1主体と第2主体は端が接する配置であり、まず第2主体、次いで第1主体の順で構築されたことが判明している。第2主体では赤色顔料の散布が認められ、鉄剣が1点出土した。第2号墳に伴う遺物は前述した鉄剣の他、周溝から供献用と推定される土器の壺等が数個出土している。第1号墳と第2号墳を比較すると、埋葬施設の構造や出土土器から新古関係が認められ、第1号墳が先行し、第2号墳が後出する。詳しい時期は第1号墳については弥生時代の末、第2号墳については古墳時代の初頭が想定され、古墳の前方形と関連することが予想される「張り出し」の存在と併せてまさに時代の過渡期に位置付けられる古墳群と評価できよう。

古代の祭祀遺跡については、掘立柱建物跡、土坑、溝等を検出し、土師器・須恵器等が出土した。掘立柱建物跡は斜面を削り込んで造成された1坪ほどの平坦地に梁行・桁行1間の小規模な建物を検出した。周囲には柵ないし塀となる配置の柱穴や、地山を切り盛りした20段以上の階段も検出されており、お堂か祠のような一体的施設と推定できる。溝のうち、丘陵頂部を尾根方向に沿って走る溝は、幅約80cm・深さ約1mを測り、両端は完結する。土坑には側面が焼けたものや炭化物が充満したものが検出されている。以上のような溝・土坑は第1次調査・第2次調査で検出されたものと同質の遺構であり、溝については区画意識の強い遺構と推定されている。以上のような古代の遺構は、奈良時代から平安時代にかけての時期幅を持って展開するが、その前半期は区画溝と土坑、後半期は掘立柱建物跡に区分することが可能と思われ、付近に存在したとされる寺院(小嶋芳孝1977「弥勒寺推定地について」『石川考古学研究会々誌』第20号)の時期とほぼ一致する。今後は遺物整理と併せてより検討を深めるとともに、寺院と関係した宗教施設としての可能性も追求していきたい。(安)



第1号墳全景（北西から）



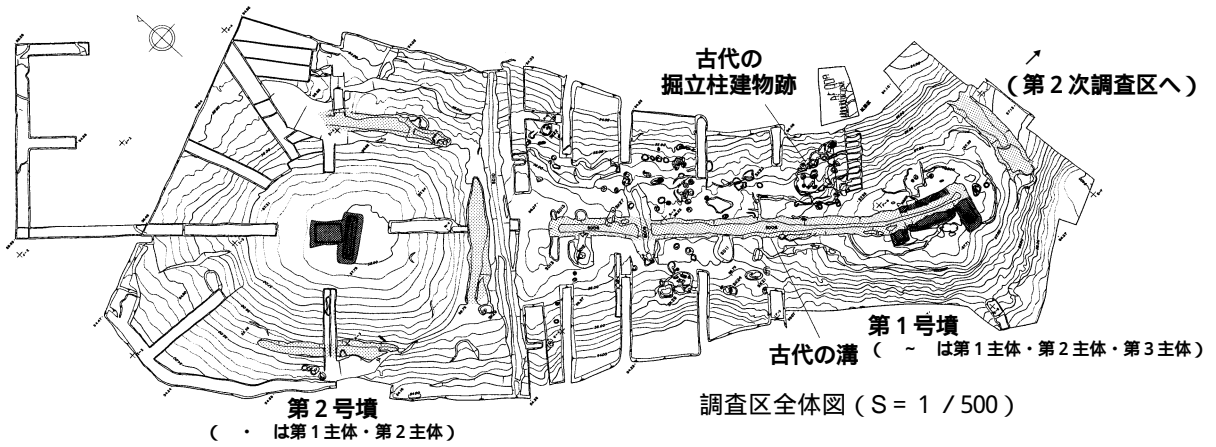
第1号墳埋葬施設（西から）



第2号墳全景（東から）



第2号墳埋葬施設（南から）



古代の掘立柱建物跡等（西から）



古代の溝（東から）

金沢西部第二土地区画整理事業に係る発掘調査

所在地 金沢市畝田西・中・東、無量寺町地内

調査面積 24,350㎡

畝田・寺中遺跡他2遺跡 9,650㎡

畝田B遺跡 3,900㎡

畝田C遺跡 1,400㎡

畝田ナベタ遺跡 9,050㎡

畝田・無量寺遺跡 350㎡

調査期間 平成12年4月26日～

平成13年1月11日

調査担当 浜崎悟司 永井浩 白田義彦

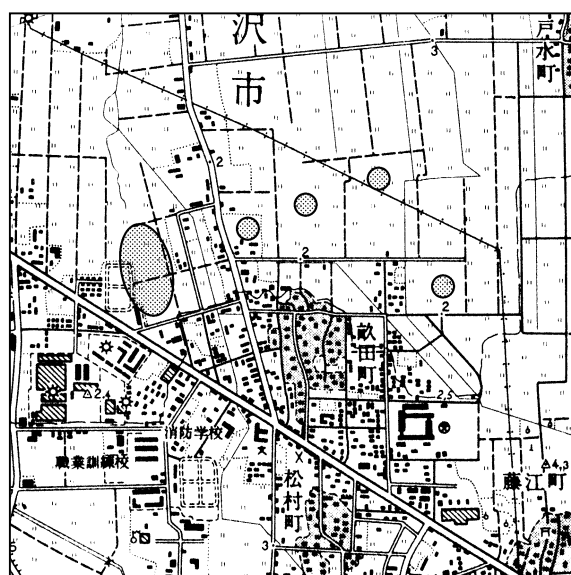
中西洋司 熊谷葉月 河村美紀

和田龍介 布尾幸恵 宮川彩子

金沢西部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査

は、上記の5地点を対象に担当の調査第4課にお

いて3組4班体制で実施した。事業にかかる土木工事も随所で本格化し、工事区域との隣接調査が恒常化し始める中での調査となった。

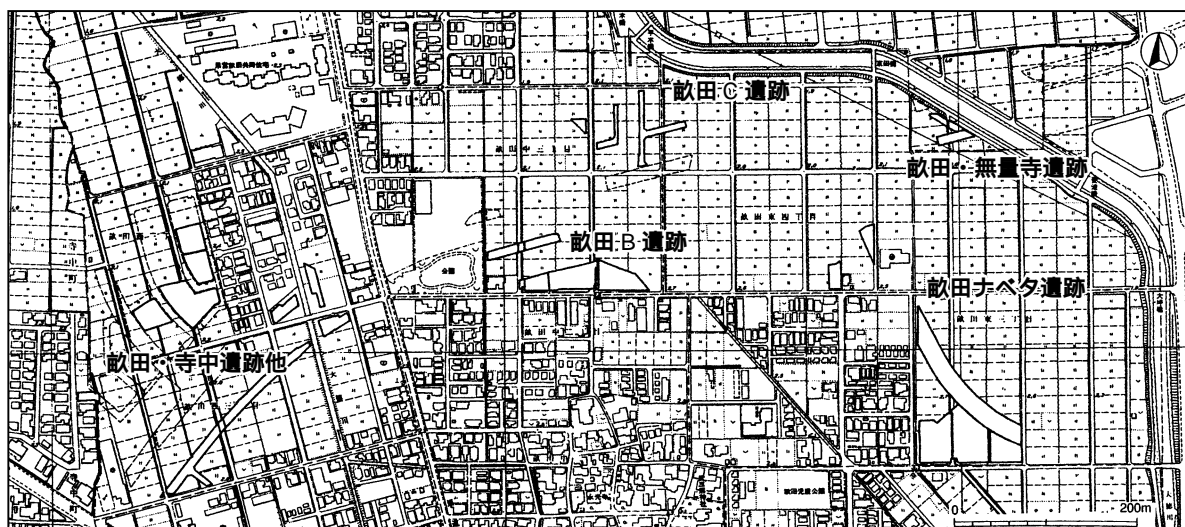


遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

畝田・寺中遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田遺跡

沖積平野に展開した各時代の集落跡である。平成11年度からの継続となる調査で、略報は当誌第3号及び第4号に掲載されている。平成12年度の調査地点は別図に示すような東西300m・南北300mの範囲に点在することとなった。調査の結果判明した遺跡の年代・性格は多岐にわたることとなり、ここでまとめることもできないため、以下、地区毎に検出された主な遺構遺物について記す。なお、調査地区名のA地区は海側幹線の海側側道、C地区は街路及び排水路、L地区は海側幹線の山側側道、M・N・O地区はそれぞれ街区、P地区は海側幹線側道の大徳川橋梁工事に伴う暫定振り替え水路の部分にそれぞれあたる。

A5区 東端でL字状に南に屈曲する東西溝（鎌倉時代）を検出。他に中世の掘立柱建物1、弥生時



調査区位置図

代後期の溝などを検出。調査区の東側は大徳川に向かって緩やかに地形が降る。

C8区 中世の建物（総柱建物）2及び溝・井戸、古墳時代中期～後期の土坑群を検出。それぞれの時代の居住地と見られる。

L1区 調査区中央を横断する古墳時代中期～後期の溝を検出。溝以西で同時期とみられる柱穴・土坑・井戸・小溝など多数の遺構を検出。他に、散発的に平安時代末期～室町時代の柱穴・土坑などを検出。

L2区 調査区の半分弱が河道（底の標高は+0.2m）。古墳時代初頭～平安時代前期頃の遺物を含むが過半は古墳時代中期頃。土器類の他に木製品・石製品（玉類）・金属製品（金環）なども出土。河川の東岸にはL1区から、西岸にはL3区から連続するような遺構が展開するが、密度はやや乏しくなっている。

L3区 弥生時代中期の竪穴建物1及び同時期とみられる掘立柱建物1、古墳時代前期頃の掘立柱（布掘）建物2、中世の掘立柱建物4以上並びに井戸3などを検出。また、古墳時代中期頃の土坑を10基程度検出。居住域として繰り返し利用された地点であったことが判明した。

L4区 時期不明の溝1を検出した。

L5区 調査区の東半は河道。弥生時代後期頃の遺物を少量含む。東端は旧大徳川とみられる近世以降の埋土。調査区西半で掘立柱建物1及び井戸4を検出。平安時代末期頃かとみられる。

L6・P3区 調査区の西側は河道。河道は上層が中世以降、下層が弥生時代後期。東半では中世の掘立柱建物3（総柱1・側柱2）及び土坑などを検出。

L7区 調査区を横断する古墳時代前期頃の溝2及びL字状に屈曲して東と南に伸びる溝（中世か）を検出。各時代を通じて耕作地或いは荒蕪地的な利用が考えられる。

M1・2区 中世の柱穴・土坑・井戸を多数検出。調査区西側の南北溝以西で検出された室町時代の遺構・遺物が多く、建物の抽出には未だ至らないが、当該期の屋敷地の一角にあたるものとみられる。土器・陶磁器類の他に略完形に復元される石製行火や木製柄付きの鑿などが出土している。居住関係の遺構の他には木棺墓が1基検出されている。また、中世の遺構に寸断されている場合が多いながら、弥生時代中期・後期の溝・土坑も散発的に検出されている

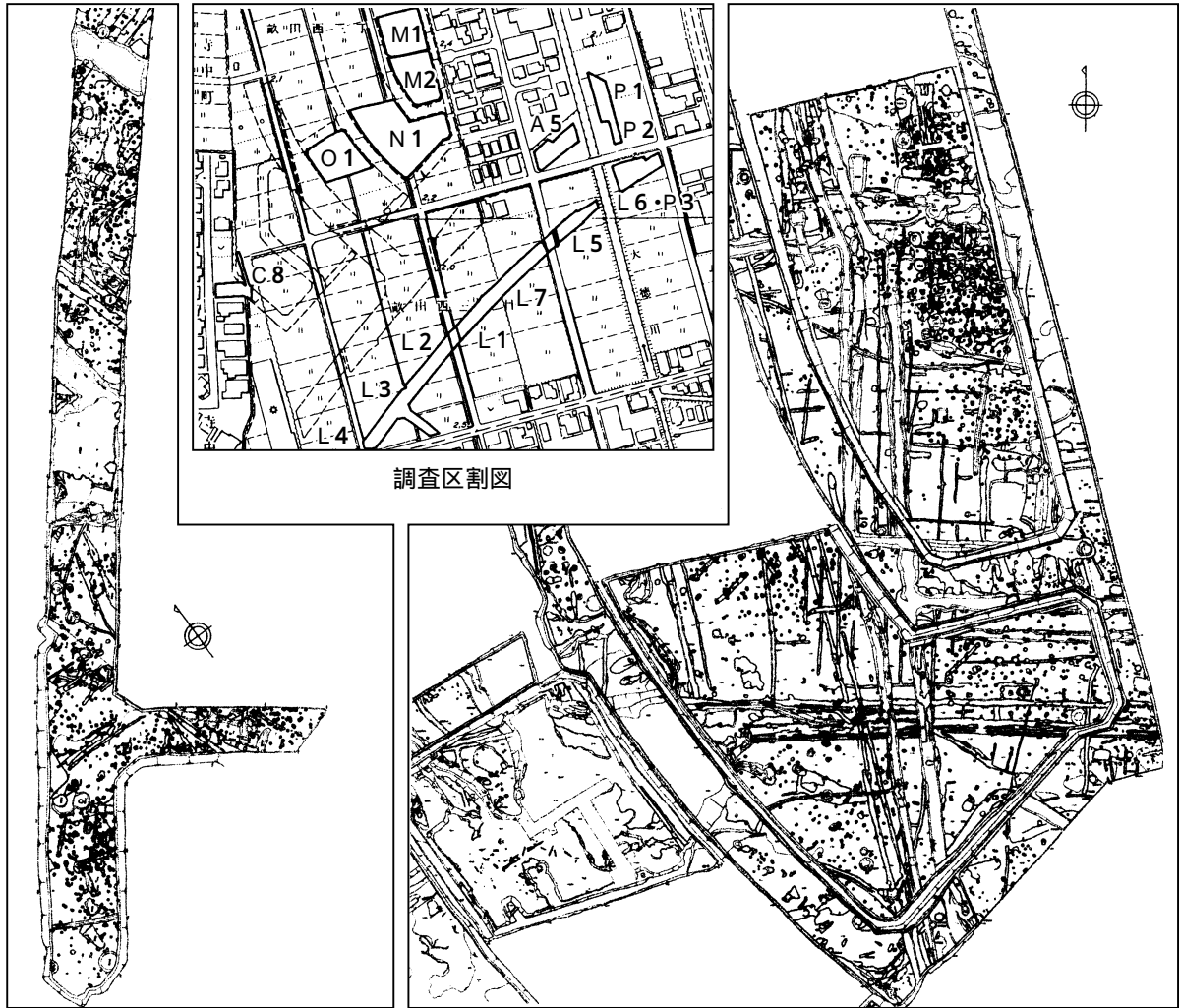
N1区 古墳時代前期の掘立柱建物4（布掘3・側柱1）、中世の掘立柱（総柱）建物5・井戸7などを検出。また、M区で検出されたものにつながるとみられる東西・南北方向の中世の溝を検出。

O1区 調査区の7割方が河道（底の標高は-0.2m）。弥生後期～平安時代の遺物を含むが、過半は古墳時代中期・後期。土器類の他に多量の木製品が出土。河道以外の部分では、古墳時代前期の井戸などの遺構が検出された。古墳時代前期の井戸底からは完形の甕が出土した（写真参照）。これは当誌第4号に述べられている本遺跡F区の2つの井戸の場合と同様である。

P1・2区 全面が旧河道。弥生時代末頃の土器が少量出土した。

平成11・12年度の調査結果を合わせると、この付近での遺跡の展開におおよその見通しを持つことができると考えられる。詳述できないが、一言だけ付するなら、N45°前後の軸線を意識した建物が調査対象域の中・西部に集中する古墳時代中・後期の様相がこの遺跡の特質の一を表すものであろう。古墳時代初頭～前期の有力な集落と目される畝田遺跡にも程近いこの地における、次代の顕著な集落遺跡発見の意義は小さくないものと思われる。

（浜崎）



L1・2・3区平面図

M1・2、N1、O1区平面図 (S=1/1,000)



L1区建物跡 (古墳中～後期)



M2区木棺墓 (中世か)



O1区井戸跡 (古墳前期)



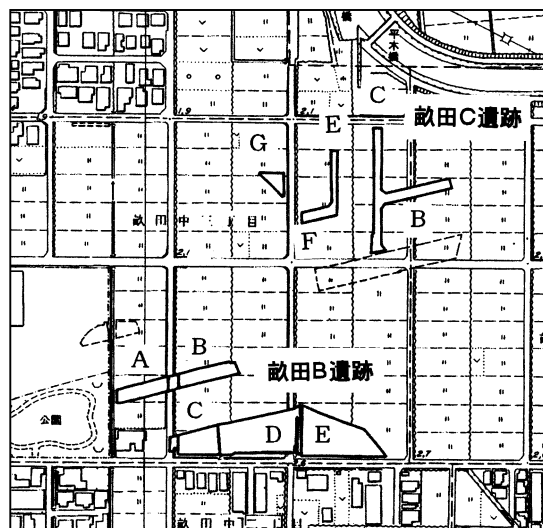
N1区建物跡 (古墳前期・中世)

畝田 B 遺跡

A・B・D・E区では河道、溝、掘立柱建物、塀、井戸、土坑など主に平安時代前期に属する遺構を中心に検出した。溝は東西・南北を軸としており、人工的に掘削されたと思われる。上面から9世紀代の土器が多く出土している。何らかの土地区画を示すものと考えられる。確認された6棟の掘立柱建物も平安時代に属し、主にE区南半で5棟が集中して検出された。遺物で特筆されるのは、帯金具と墨書土器である。帯金具は鉞尾の部分で紙や裏板が残っている。墨書土器は「赤万呂」「大家」と判読できるものなど20点ほど出土している。若干ではあるが、弥生時代の遺構・遺物も検出している。地形の落ち込みにたまった洪水砂や、淡灰褐色砂の堆積する河道などから、弥生土器片や石器が出土している。弥生時代の遺構は、古代以降に著しい削平を受けたものと推定される。C区では、遺物が伴わず時期は明確でないが、中世以降に属すると思われる南北方向の畝溝のみが検出された。古代以前においては、低湿なため利用されなかった部分であると思われる。遺跡の広がりにはA・B区からD・E区にかけて北西から南東方向へ、中心はさらに調査区外へと伸びるものと思われる。(熊谷)

畝田 C 遺跡

本年度は街路部分の調査のため、幅3～6m程度の細長い調査区であった。隣接する昨年度の調査区では、掘立柱建物や井戸、溝などから構成される平安時代の集落が検出されており、今回の井戸、柱穴などの遺構も一連のものと考えられる。C区では井戸が2基検出されており、うち1基(SK01)からは外側面に「庄」と墨書された須恵器の椀が2個重ねられた状態で出土している。B・E・F区では南北方向に貫流する河道を数条検出した。9世紀代の土器が上面で多く出土する河道と、若干の弥生土器を包含するもののが存在する。弥生時代の遺構では、B区で平地式建物周溝の一部と思われる溝のほか、B区とG区で大小の土坑5、6基を検出した。弥生時代後期に属すると思われる土器片が少量のほか、石鏃数点や磨製石斧などが出土している。畝田B遺跡と同様、著しく削平された可能性が高いものと思われる。(熊谷)



畝田 B 遺跡・畝田 C 遺跡
平成12年度調査区



畝田 B 遺跡 E 区



畝田 C 遺跡 井戸 (SK01)

畝田ナベタ遺跡

都市計画道路と宅地部分に関する調査を行い、面積は約9,050㎡である。調査区は、市道を挟んでA区とB区に分かれる。

A区は、溝群と土坑を中心としている。鉄滓・焼土・灰の廃棄土坑が数基確認され、羽口も出土している。土器は少量出土しており、B区に若干先行するか、ほぼ同時期と考えられる。

B区は、大きく東区・西区と北区に分けられる。東区は、遺構がもっとも密集している地点で、径50～80cm程度の掘方を持つ柱穴で構成された、大型の掘立柱建物を中心とする。掘立柱建物は側柱建物が主で、軸を真北から僅かに西に振った南北棟がもっとも東寄りに並び、東西棟は2棟ほどである。総柱建物は1棟確認されたに留まる。同時期の井戸8基は、うち4基が隅柱横棧留め縦板組の井戸側を持つ。西エリアには、一部近世河道が通っているが、掘方3×3m、深度2mのSK107を中心として空閑地が広がる。SK107は、長さ2m程度の板を縦板として使用した井戸で、多量の土器・斎串のほか、牛馬の大腿骨を出土している。

西区は、SD68の西側部分である。径50～60cmの掘方を持つ柱穴で構成された2×2間の総柱建物が南寄りに並び、北に近づくにつれて側柱建物が増える傾向にある。東区に比べて遺構密度は低く、軸をさらに西に振った南北棟を主体とする。また、西寄りには、径20～30cmの掘方を持たない柱穴が数多く分布する。井戸は6基確認されているが、すべて井戸側は検出されていない。この区の特徴は、覆土に多量の焼土・灰・炭化物を含む土坑が多いことである。SD67は、古代の自然河道である。9世紀～10世紀前半まで通水していたものと思われ、多量の土器をはじめとして木製皿・蓋・円形板・木簡などが出土した。北区は、近世河道が中央を通っており、建物群などの構成は、不明な点が多い。井戸は5基確認されており、SK16(隅柱横棧留め縦板組とSK21(曲物)に井戸側が見られる。近世河道の東側に掘方を持つ柱穴が多く、西側には少ない。

当該年度の遺物は、9世紀～10世紀前半を主体とする。未だ整理の途中ではあるが、須恵器・土師器供膳具が主体であり、須恵器貯蔵具や土師器煮炊具は少ないようである。転用硯も多数確認されている。緑釉陶器は2点である。また、特殊な出土状況としては、井戸SK16の上層に、口縁部を打ち欠いた平瓶が、埋納された状況で出土している。墨書土器は、「東」がもっとも多く、次いで「東」「射水」「宅万呂」「大」「」」「×」などが見られる。SD67から出土した木簡は、付札木簡が4点・削片が2点である。付札木簡は、「酒流女一石余」「須留女一石二斗」「否益一石一斗」「比田知子一石二斗」と記されている。習書の削片は、他の木片類とともにSD67の下層から出土しており、「盗」などの字が確認できる。木製品は、前述の通り、SD67から集中的に出土した。皿・蓋などの白木の製品のほか、箸類も多い。漆製品は、黒色漆を片面に塗った円形板や、漆パレットとして使用された須恵器片が確認されているが、篋などの工具類は見つかっていない。また、SD67はシジミ・アサリを中心とした貝類が多量に出土し、当遺跡を考える上で重要である。

以上のように、当遺跡は、総柱建物が多く工房の存在を示唆する遺構が多い西区と、溝・空閑地を挟んで大型の側柱建物を中心とした東区・北区のふたつの特色を有する。掘立柱建物の配置状況、竪穴状遺構が検出されていないこと、獣脚付円面硯や付札木簡の存在などから、一般的な集落とは異なる、より公的な性格の強い遺跡であると考えられる。周辺には、時期の先行する畝田・寺中遺跡や金石本町遺跡、同時期の畝田C遺跡・戸水C遺跡・戸水大西遺跡など、古代の官衙関連遺跡が集中する。個々の掘立柱建物の時期的な変遷の把握とともに、周辺の遺跡と併せ、当遺跡の性格や地域の性質を考えていく必要がある。(布尾)



東区 掘立柱建物群



西区 炭化物廃棄土坑



SD67 木簡出土状況



SK107 獣骨出土状況

畝田・無量寺遺跡

本年度は側道部分の調査を行った。調査区の幅は広いところで約9.3m、狭いところで約6.6mである。古代の掘立柱建物、井戸を検出した。検出した掘立柱建物は全て調査区外にかかるもので、調査区内に収まるものはない。従って、規模の確定はできないが、2間×2間以上となる総柱建物、2間×2間以上となる側柱建物を検出した。総柱建物の柱穴掘方は方形で、規模は約1m×1mを測る大型のものである。井戸は1基検出した。井戸の検出状況は縦板が内側に倒れこんでいた。おそらく、横棧がはずされたため倒れこんだのであろう。この状況から、井戸枠の構造は縦板を横棧で支えるものであったと推察される。井戸枠の規模を復元すると約1.2m×1.2mの大型のものとなる。井戸の底の方から土器、木製品が出土している。 (白田)



掘立柱建物検出状況



土器出土状況 (井戸)

金沢城跡

所在地 金沢市丸の内地内

調査期間 平成12年8月10日～平成12年12月25日

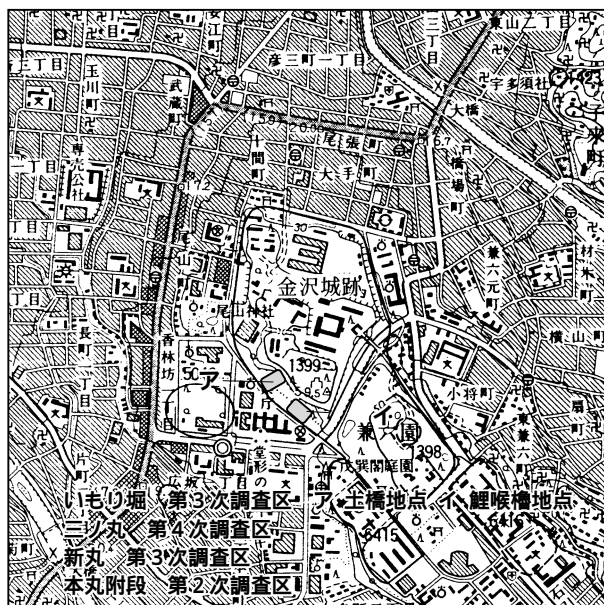
調査面積 いもり堀第3次調査区 3,800㎡

三ノ丸第4次調査区 180㎡

新丸第3次調査区 100㎡

本丸附段第2次調査区 20㎡

調査担当 富田和気夫 滝川重徳 立原秀明 湊屋玲美 加藤克郎 土田友信



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

金沢城は、小立野台地の先端部に位置する。台地の両側には犀川・浅野川が流れており、天然の要害を巧みに利用した平山城である。16世紀中頃この地に築かれた一向宗の加賀門徒の一大拠点である尾山御坊(金沢御堂)を前身とし、佐久間盛政在城期を経て、天正11年(1583)前田利家入城後約300年間加賀藩前田氏の居城であった。明治4年(1871)廃藩置県後は兵部省(後の陸軍省)所管となり、第2次大戦後一時期進駐軍に接收されたが、昭和24年(1949)新制の金沢大学が城内に置かれた。しかし大学の城外への総合移転を契機として石川県が城域の大半を取得し、歴史性を生かした都市公園として整備することになり、事前に城内の埋蔵文化財を調査することになった。平成12年度下半期

(加藤)

は以下の地点について発掘調査を実施している。

いもり堀第3次調査区

[西区・土橋地点]

当調査区は、城址公園南端と金沢広坂消防署の北側に位置し、いもり堀第2次調査区の東側にあたる。江戸時代後期の絵図と調査区を照合すると、稻荷屋敷南東の御花畠といもり堀の一角に相当する。

いもり堀は、平成10年度に第1次調査を行っており、その際、いもり堀の北岸を面的に検出し、位置と範囲を確定するとともに、その北方でいもり堀に先行する「旧いもり堀」の存在を確認し、それに伴う石垣土橋の上面を検出した。

今回は、土橋を立体的に検出し、その構造と変遷の把握を目的に調査を行った。その結果、土橋



調査区全景(北から)



石垣土橋東面

は構築から廃絶までの間に改修、拡張されており、それと連動して「旧いもり堀」も浅い空堀から深い水堀へと変化した可能性が出てきた。

・構築当初の土橋

構築当初の土橋は、東西面に、石を積んだ石垣土橋である。検出した土橋の規模は、長さ約17.4m、基底幅約5.8m（北）～5.1m（南）、高さ約1.9m、主軸方向は座標北から約17°西である。現状では両端及び上部が失われているが、構築当初の規模は長さ20m以上、高さ約2.5m～4m程と推定している。石垣面角度は一定だが基底幅が変化していることから、土橋は、北側が高くなる土橋坂であった可能性が高い。

土橋両側の堀底は、地山を掘削して平坦に整えられている。地山上には、砂質土が薄く堆積していたことから、堀は空堀であったと考えられる。また、その状態は、短期間であった可能性が高い。

【土橋の石垣】土橋の石垣は、戸室自然石主体の石垣で、大半が赤戸室石、次に青戸室石、河原石が混じる。石垣石の寸法は、大方約50cm（高）×50cm（幅）×70cm（控）である。石積みは、石の正面を横長に置き、控え（奥行き）が短めであることが特徴で、いわゆる乱積みに区分される。石垣石のいくつかには、墨印と線刻が確認された。墨印は、“丸”“一ツ棒”等があり、線刻は、“十文字”等数種が確認された。間詰石は、河原石がほぼ全域に使用されており、隙間にぎっしりと詰め込まれている。石垣土橋の構築年代は、城内の石垣と積みの特徴等を比較すると、文禄期前後（1580～1590年代）と推測される。

【構築方法】土橋は、水平に掘削された岩盤（地山）上に築かれている。岩盤上に根石を据え、裏込土を約50cm盛る。裏込土の最上層は粘土層で整地され、その段階で一旦作業面が形成される。次の段



土俵列（改修後の土橋 東側）

の積石は、石垣裏込めに、河原石主体で若干の戸室割石も含む栗石を少量入れ、裏込土を盛って作業面を形成する。以下、これを繰り返して石垣を構築したものと考えられる。

・改修後の土橋

【土橋東側】土橋の東側では、石垣前面が盛土され土羽面となる。土羽面からは、土羽斜面の傾斜に沿って堀底が約2.3m掘削されていた。堀内部には、堀底から土羽斜面に沿って、水中堆積特有の粘土層の形成が見られ、砂質土と交

互に堆積している。従って第一段階の空堀は、より深さを増すと同時に水堀へ改修されていることが判明した。

土羽面からは、二重一列に並べた土俵を検出した。土俵は、粘土層の上端レベルから復元される当時の水際附近に位置しており、侵食防止のための護岸の目的で埋設されたものと考えられる。土俵の残存状況は、比較的良好であるほか、両端に棧俵を当てるタイプであることが確認された。なお、土俵列は、部分的に剥ぎ取って取り上げた。

【土橋西側】土橋の西側では、土橋の石垣面から約3m前面に、戸室自然石主体の石列が、南北方向に延びる。構築当初の石垣に比べて、石は小ぶりで控えは短く、裏込め全体に河原石が充填されていた。石列は、残存状況の制約から規模、構造に不明な点を残すが、土橋の拡幅に伴う構造物の基底部と考えられる。また、調査による掘削深度の範囲内では堆積土に、東側のような水性粘土堆積層は認められなかったため、土橋東側同様に水堀だったとすれば、その水位は東側よりも3m以上低かったことになる。

・土橋の廃絶

土橋は、その南端が南北幅約7m、深さ約3mに渡って掘り込まれ、破壊されていた。掘り込み内の覆土は、堀の埋め立て土と連続していることから、「旧いもり堀」廃絶時の造作と考えられる。おそらく、埋め立て時に、土橋南端部を取壊し水抜きを行ったものと思われる。なお、掘り込みの南岸でも、約五、六段に重ねられた土俵群が検出されている。

・出土遺物

旧いもり堀の埋土から、瓦と木製品等が出土した。瓦には金箔鯨瓦片3点・金箔軒平瓦片3点・金箔軒丸瓦片1点が含まれる。金箔は、漆とみられる黒褐色の接着剤で、軒文様の凸部に貼付けされている。金箔瓦以外を含めて軒平瓦片の中心飾りには桐文が見られ、豊臣氏と関係の深い前田利家・利長の時期に使用された可能性がある。

また、建築部材1点も出土している。建築部材は、残存長4m、太さ25cmの針葉樹材で、略八角形に面取りされ、表面が広範囲に炭化している。端にアリ仕口が刻まれており、梁材の可能性が指摘されている。



金箔軒平瓦片

・土橋の廃絶といもり堀の掘削

土橋の廃絶と、「旧いもり堀」の埋め立ては、いもり堀の掘削と連動する一連の普請であったと考えられる。その時期は、いもり堀北岸の石垣が文禄年間普請（伝）の本丸東石垣より新しく、慶長15年普請（伝）の本丸高石垣より古い様相を呈することから、慶長期中頃（1600年代初頭）と考えられる。「旧いもり堀」埋土から出土した遺物の時期も、これを下るものはない。

【終わりに】今回の調査で明らかになった、「旧いもり堀」に伴う土橋の構造と変遷は、金沢城初期の縄張り整備とその具体的な土木技術の一端をしめすものであり、出土した金箔瓦や建築部材は、城内建物のイメージを彷彿させるものであった。いずれも、金沢城初期の姿を解明するための重要な手がかりといえる。

（土田）

[東区・鯉喉櫓地点]

当調査区は、いもり堀東端の鯉喉櫓台周辺に位置している。御花島と呼ばれるいもり堀北岸より本丸側は、明治40（1907）年の陸軍被服庫建設工事に伴い、櫓台もろとも削平されて、堀は埋め戻されている。平成10年度の第1次調査では、櫓台石垣の残存部上面を検出している。今回の調査では、櫓台の構造と変遷を明らかにするため、櫓台周辺のいもり堀埋土を現地表面から約2.5m掘り下げ、石垣石の観察を行った。また櫓台石垣内部については土層や栗石の断ち割りをを行った。

櫓台北では、栗石で櫓台の張り出しが造成される以前の土羽ラインを検出した。慶長期中頃のいもり堀掘削当初は、東端では北岸に石垣が敷設されているが、櫓台が設置された痕跡はなく、土羽の堀であったと考えられる。また、櫓台の設置に伴い北岸の石垣は埋められ、その埋土に寛永8（1631）年の大火によると思われる焼土層を確認していることから、櫓台の設置は大火以降であると考えられる。

次に櫓台構築後の遺構について触れる。櫓台石垣の規模は、現況の上端では、南面が25m、西面が8mを測る。櫓台南西隅や南面の石垣石は、面が大きく全面にノミ調整がされている。控えは長く、整然とした積み方で、角石の稜線部には江戸切りが認められるという、寛文期の特徴が見られる。南面石垣に伴う栗石は、30cm前後の非常に大きな石を使用している。また、西面石垣石は、面の加工は寛文期の石に近いが若干小振りで、南面に比べて勾配が緩く、積み方がやや雑然としている。刻印が入った寛永期に見られる石が点在する。西面石垣に伴う栗石は20cm前後のものが多く、南面石垣に伴う栗石の下にもぐり込んでいる。この栗石内部では、南面石垣に平行して積まれた北面の石積み（裏石積み）を検出した。裏石積みの石は、刻印や加工が寛永期の特徴を持つ。また、櫓台北の土羽ライン付近では、西面石垣に伴う栗石よりさらに下で15cm前後の小振りの栗石を検出しており、櫓台構築時の栗石と推測している。

以上の調査所見から、鯉喉櫓台の設置は寛永8年の大火後である可能性が高く、石垣石や栗石の特徴から、櫓台は2度に渡る大規模な修築を経ていることが推定された。文献では、正保元（1644）年に浸透水増加による土砂流出に伴う修築、寛文4（1664）年に寛文大地震による石垣崩壊箇所の修築が記録されており、これらの修築記事と発掘で確認された改修痕跡が対応する可能性が高い。正保の土砂流出の際には、崩壊した寛永石垣石を使用して補強のために裏石積みをし、石垣を修築したと考えられ、寛文大地震の際には西面石垣は崩れず、南西隅から東のみを修築したものと推測される。

（湊屋）



鯉喉櫓台全景（北西から）



鯉喉櫓台中央裏石積み
左上南面石垣、右上西面石垣（北東から）

室石で、角石に加工されている。また川原石を用いたものも確認されている。角石の加工状況は寛永年間（17世紀前半）頃の特徴を有しており、河北門櫓台が寛永の大火を契機に整備されたとする従来からの説を裏付けるものである。また門柱の礎石を支えた根固石を2ヶ所で確認された。これは栗石を集中的に置いたもので、石川門と同様、方形の大型礎石上に柱を据えていた門であったことを確認した。

[河北坂地点]

当地点では幾十にも累積している河北坂の路面を確認した。大雨等による路面損傷の度に10cm 前後の厚さで路盤を嵩上げし、路面を作り替えていたことが判明した。作り替えの際には、坂の上から下まで通して修築する場合と、部分的に修築する場合があることを確認した。また路面に礫や破損した瓦を敷設して坂道の損傷や泥濘を防止した様子が観察された路面もある。これら路面の修築された年代を特定できる遺物等の出土が殆ど見られないので、個々の路面の造成された詳細な年代については分からないが、土層の観察から寛永の大火以前には既に造成されていたことが判明する路面も確認されている。ちなみに最下層の路面から現在の路面まで度重なる工事により約2m 嵩上げされている。

河北一ノ門から坂道にかけての地点では、河北門枡形内の雨水を排出するための石組み側溝を新旧2条検出した。この側溝は扁平な川原石を使用した底石を伴うもので、内法は約30cm である。古段階の側溝は寛永期の枡形整備に伴う可能性もある。



河北一ノ門と石組側溝（北東から）

三ノ丸第4次調査区

平成12年度は河北門枡形と新丸から三ノ丸に延びる河北坂についての発掘調査を行った。河北門は三ノ丸の大手であって、明治初年に陸軍によって撤去される以前は枡形式・多聞造で櫓を備えた堅固な施設であった。度重なる火災の度に再建されていることは文献や絵図面等により知られていたが、河北門の発掘調査は今回が初めてである。

[河北門地点]

今回の調査では河北二ノ門の石垣台根石の南西側の一部が残存していることが確認された。石材は戸



河北二ノ門 石垣台根石（南東から）

[河北坂築造以前の遺構]

現河北坂北端部は最大2m 以上の盛土で構築されており、盛土層の下から河北坂造成以前の遺構群が確認された。個々の遺構の性格は不明であるが、川原石の石列や焚き火を伴う土坑などが高密度に分布し、天正期に属する陶磁器片等が出土している。以上の成果から河北坂の造成は、慶長4年（1599）造成と伝えられる新丸と同時期であった可能性が高まるとともに、検出した遺構群は尾山御坊期ないし築城初期に遡る可能性がある。これ

らの遺構群からは、『金澤古蹟志』の「新丸に取囲なき以前は、河北門外は武士・町人等雜居して、家屋連櫓すと云ふ」という記述が想起される。遺構群の年代や性格については今後詳細に検討したい。
(加藤)

新丸第3次調査区

[尾坂門地点]

当調査区は、城址公園の北部、ホテルKKR金沢の南東部に位置する尾坂門枡形内にあたる。調査区中央は、近代の石組暗渠と現代の管・溜枡が埋設されており、近世以前の遺構は検出できなかった。調査区中央以外にも、部分的に近代以降の攪乱が入っていた。

調査区南西部一帯では、路面遺構が検出され、路面中央附近に、南北一列に配置された石段を検出した。石段の石材寸法は、30cm(高)×30cm(長)×60cm(幅)の長方体である。石材は、青戸室石で、上面と正面上部三分之一以外は地中に埋まっていたと考えられる。路面は、段差の低いスロープ状をなしていたと考えられる。石段に伴う路面下部から釉薬黒瓦が1点出土した。

東部から南西部東では、尾坂門形成以前の遺構が検出された。尾坂門設置に伴う道路遺構は、近代以降に削平を受けていた。遺構は、地山を掘削するピット群と溝で、その覆土やその上層の包含層は、炭化物を含んだ焼土層である。焼土層の上面は、被熱した硬化面が形成されていることから、炉床とその下部の除湿施設の可能性がある。焼土層から16世紀末から17世紀初頭の陶磁器が数点出土し、また、ピット7の覆土から韃の羽口片が出土していることから、中世末～近世初頭に存在した鍛冶関連の遺構であると考えられる。



鍛冶関連遺構

遺構の西部では、南北方向に不規則に並んだ河原石群が、長さ約0.7m×幅約1m検出された。河原石群の寸法は、統一されていない。河原石群の下部盛土からは、16世紀末から17世紀初頭の陶磁器が1点出土している。

調査区の南東に位置する新丸第2次調査区(平成11年度)では、新丸造成以前の町屋と考えられる遺構が確認されている。遺構状況や出土遺物は比較的類似していることから、町屋の中に存在した鍛冶の可能性もある。

今回の調査は、尾坂門の形成と構造のみならず、金沢御堂期の土地利用から金沢城の縄張り形成過程を考える上で、重要な資料である。
(土田)

本丸附段第2次調査区

本調査区は、二ノ丸より空堀を経て本丸附段へ上る斜面部分に相当する。階段の復元整備に伴う平成10年度の第1次調査では、階段の普請時期が寛永8年(1631)の大火後であることが推測された。

今回平成12年度の調査は、第1次調査時には処置が保留されていた松の大木の伐採に伴い、大木周囲の未調査部分約20㎡を改めて発掘の対象としたものである。この部分は最下段から数えて第10～15段に相当する。調査の結果、足がかりとなる雁木状の石は全て抜き取られ、かつ松の根等による攪乱・流出が一部見られるものの、段状を呈する盛土・切土、根固め・裏込めに用いられた礫の配置状態など、階段造成の痕跡は比較的明瞭であった。
(滝川)

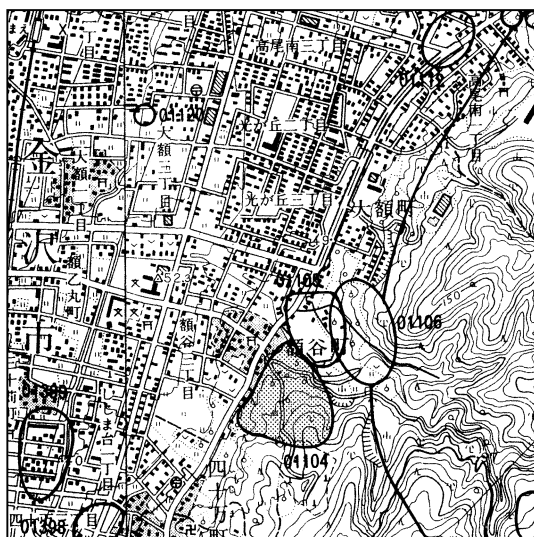
額谷遺跡

所在地 金沢市額谷町地内

調査面積 1,500㎡

調査期間 平成12年8月17～平成12年12月22日

調査担当 安中哲徳 三谷正輝



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

今回の調査区は平成7(1995)年度調査区の南側に位置する標高63m～68m代を測る緩傾斜地に立地しており、弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけて存続した集落のすぐ南側に位置する谷部と谷部南側の平坦部である。谷部からは弥生土器・古式土師器が多数出土している。谷南側の平坦部に存在すると思われた弥生時代～古墳時代にかけての遺構面は、後世に完全に削平されており、建物の柱穴など比較的掘削が深く行われた遺構のみ確認されているだけで、建物跡のプランは確認できなかったが、小片ではあるが弥生土器・古式土師器が出土し、谷南側の平坦部へも集落が広がることが確認された。

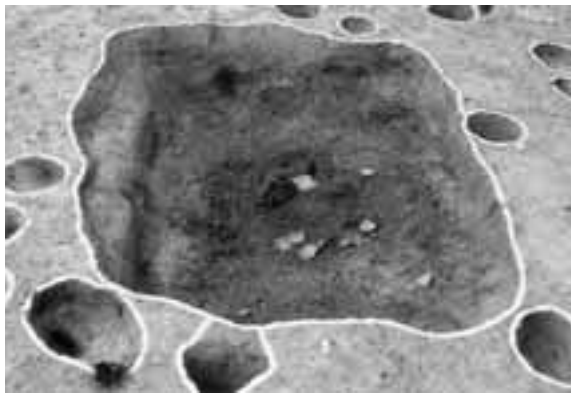
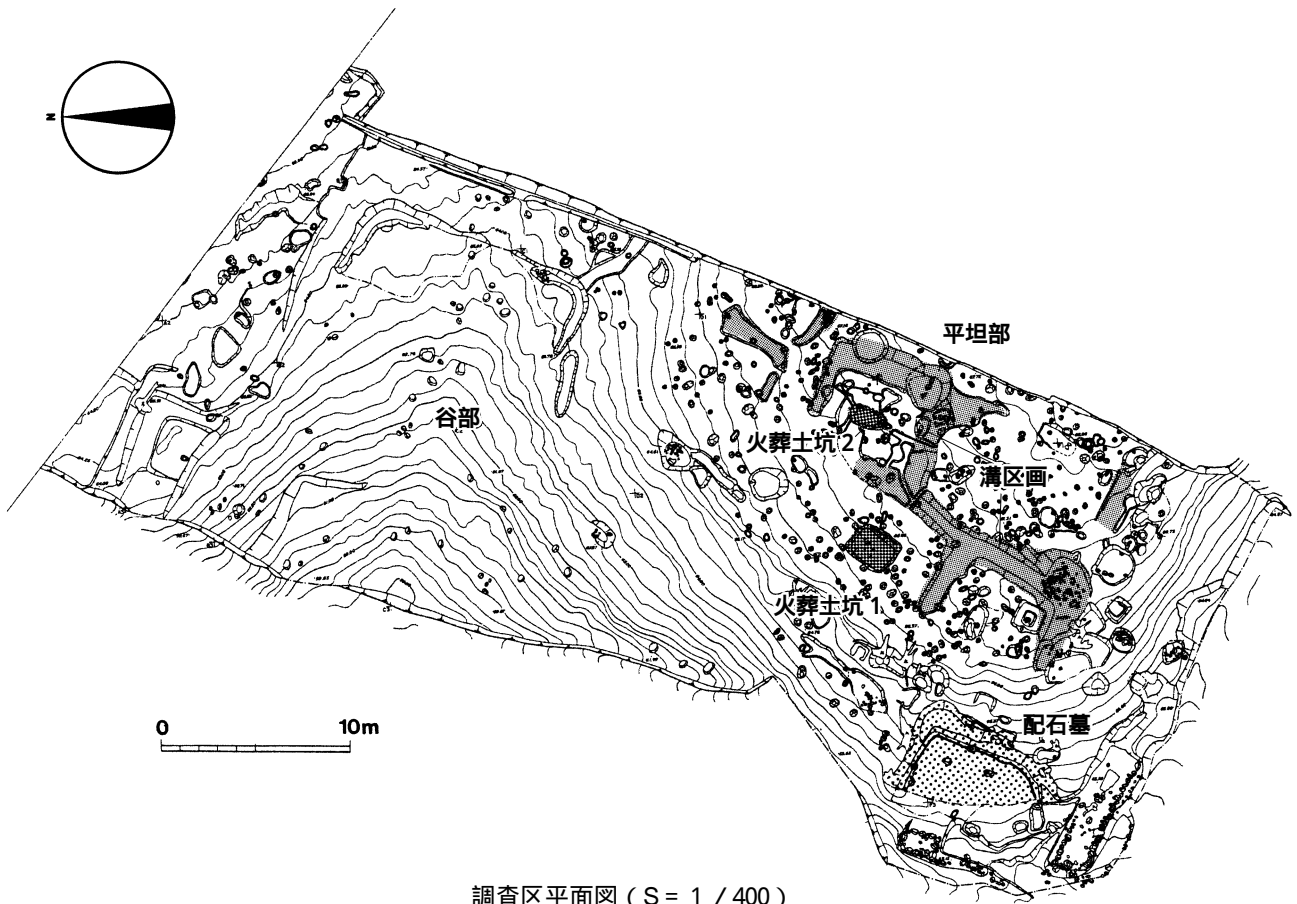
平坦部からは火葬土坑や方形の溝で区画された中世の墓跡が確認され、西・南側の斜面上部からも火葬遺構や配石墓、半横穴状に掘られ底に焼土と灰が堆積した方形土坑などが確認されており、五輪塔や宝塔などの石造物や蔵骨器と思われる珠洲焼片、陶磁器片、さらに人骨片も出土するなど、この地に中世の墓域が広がっていたことが確認された。これにより、当地では中世以降墓地として利用されてきたことがわかった。

平坦部からは火葬土坑や方形の溝で区画された中世

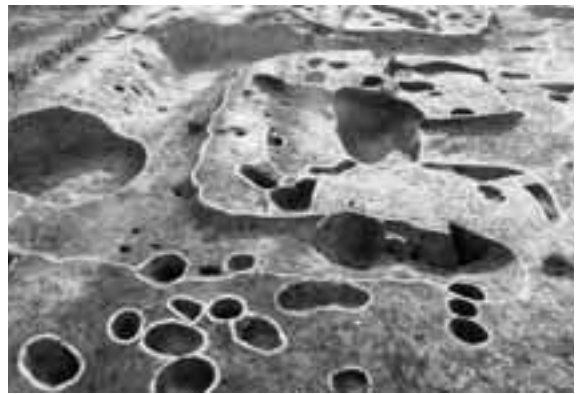
火葬土坑1は壁面が焼け、底には炭と灰が堆積しており、その上に完形の中世土師器皿が10枚程度入れられていた。骨片は確認されておらず、土坑上部も削平されていたため、上部構造やその後墓として用いられたかどうかはわかっていない。火葬土坑2は方形の溝で囲まれ、整地された平坦部の中央に位置し、中に黒灰が多く堆積していた土坑である。底には少量ではあるが骨片が円形に検出されており、火葬後曲物等に入れて埋葬したとも考えられるが、1個体分の人骨としては量が少ない。その後この土坑と平坦部には盛土がされ、周囲に新たに溝を掘り直し、土坑の近くに瀬戸の瓶子を蔵骨器として埋葬していたようである。削平のため墓の上部構造はわかっていないが、このような火葬土坑を中心として方形の溝で囲まれた区画墓は、松任市の宮永ほじ川遺跡や剣崎遺跡などでみついている。これらの遺跡からは、土坑や溝から五輪塔や宝塔などの石造物が出土しており、額谷遺跡の区画墓の上部構造も同様に墳墓の上に石造物が置かれているものであったと考えられる。

配石墓は平野を見下ろすことができる西側斜面上部に位置し、多量の拳大の礫が斜面に堆積していた。人頭大の礫を並べたいくつかの区画列が見られ、複数の墓が存在していたが、当初は斜面を大規模に造成して山側に排水溝を巡らせた平坦面を作り、平坦面中央部に石を方形に積み上げた基壇の上部に宝塔を置き、珠洲焼の蔵骨器を中に埋納していた単独の墓であったと考えられる。また、平坦面底には長さ1m大の石が2個置かれており、平坦面の西側半分は急斜面で流されていることから、もともとは4個の大石を礎石とした建物が建てられていた可能性を考えている。

今回の調査で見つかった中世の火葬土坑や墓跡はどれも上部が削平されており、完全に構造がわかったものはないが、遺跡北方に位置する額谷カネカヤブ遺跡の火葬土坑や御廟谷墳墓群など、遺跡周辺には中世の墓域が展開しており、さらに北側に所在する高尾城跡や富樫氏との関連も含めて今後遺跡の位置づけをして行く必要があると考えている。(安中)



火葬土坑 1 土師器皿出土状況 (南から)



区画墓・火葬土坑 2 検出状況 (北から)



配石墓配石検出状況 (北から)



宝塔笠・土師器皿出土状況 (西から)

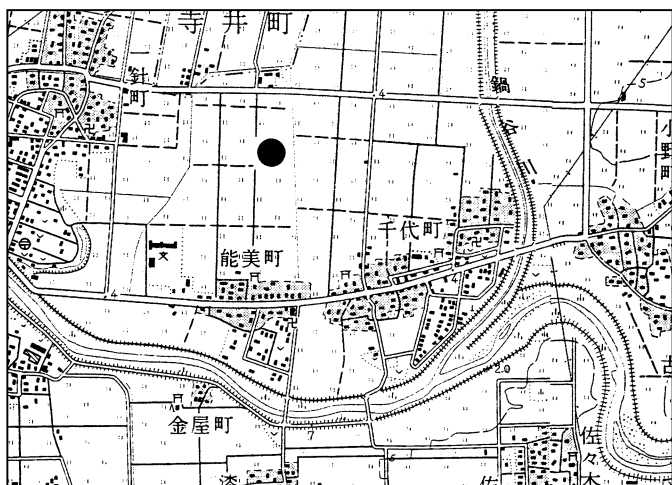
千代・能美遺跡

所在地 小松市能美町地内

調査期間 平成12年5月1日～平成13年3月19日

調査面積 7,000m²

調査担当 岡本恭一 三浦ゆかり 林 大智 兼田康彦



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

千代・能美遺跡は、小松市街地の東側に広がる沖積平野に位置し、遺跡の南側を流れる梯川と、その支流である鍋谷川によって形成された自然堤防状の微高地上に立地している。

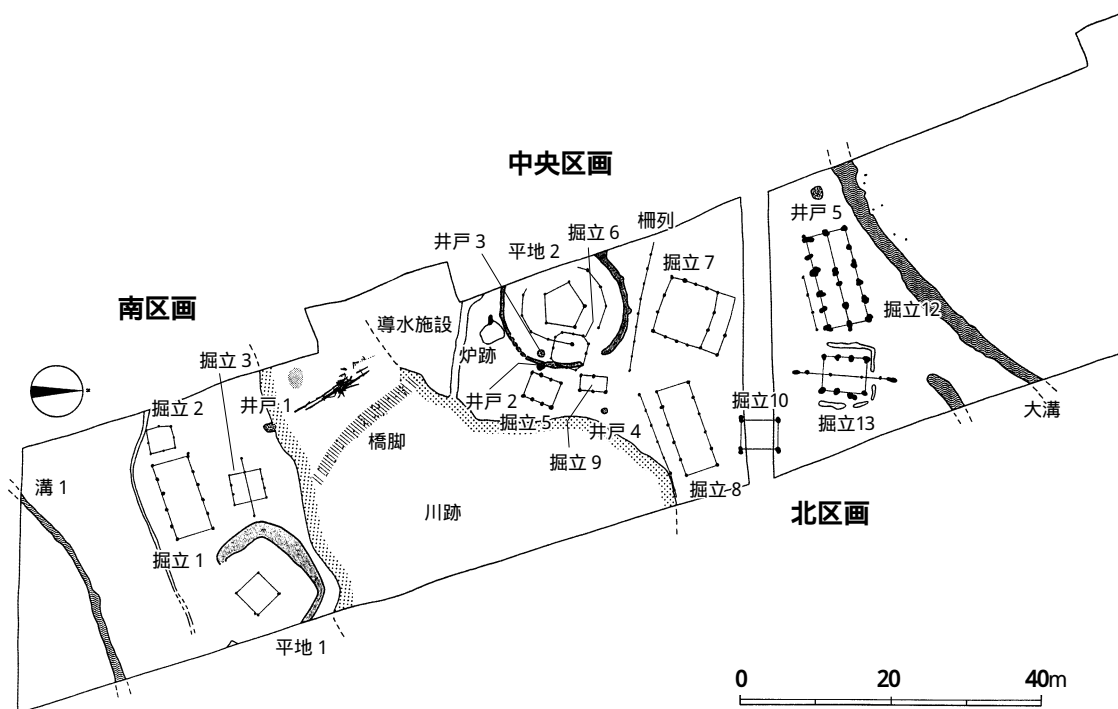
梯川の中・下流域は、県内有数の遺跡密集地として知られており、弥生時代後期に属する青銅器の土製鋳型外枠が出土した一針B遺跡や、弥生・古墳時代の大規模集落である漆町遺跡などの著名な遺跡が近隣に存在している。

発掘調査は一般国道8号(小松バイパス)改築工事に伴うもので、平成12(2000)年度はA～D地区(計7,000m²)の調査を実施した。

その結果、A～C地区に古墳時代前期(3世紀後半～4世紀前半)頃の首長居館と考えられる施設群を確認した。居館の内部は川跡や柵列によって3つの区画(南区画・中央区画・北区画)に区分されており、居館域の南・北端には、周りをとり囲んでいたと考えられる溝(溝1・大溝)を検出した。

居館を構成する施設群は、北東から南西方向に流れる川跡の両側にひろがっており、平地式建物跡2棟(1棟は弥生時代終末期)、掘立柱建物跡11棟以上、井戸5基、炉跡、橋脚状遺構、導水施設などの施設を検出した。以下、各区画内の施設群、及びそれらを区分する遺構について概要を述べる。

発掘調査は一般国道8号(小松バイパス)改築工事に伴うもので、平成12(2000)年度はA～D地区(計7,000m²)の調査を実施した。



A～C地区 遺構配置図 (S = 1 / 1,000)

南区画からは、平地式建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟以上、井戸1基、溝5条などを検出した。

平地式建物1は、4本の支柱穴の周囲に方形の外周溝を巡らせた建物で、同じ場所で建て替えを行っている。外周溝の覆土からは、屋根材と考えられる炭化した茅と焼土が出土した。

掘立柱建物跡は3棟が「L」字形に配置されている。掘立柱建物1は梁行1間(4.9m)×桁行5間(10.3m)を測り、南区画の中では最大規模の掘立柱建物跡である。北区画の掘立柱建物8と規模や柱穴配置が類似しており、同じ機能を有する建物跡と考えられる。

井戸1は円形で直径1.1mを測る。川跡と接する箇所には、断面V字形の切り込みが認められる。この切り込みは、井戸1から溢れる水を、後述する導水施設に流すために設けられたものと考えられる。導水施設の周囲からは、剣形・舟形木製品、木製高杯など祭祀的色彩の強い遺物が多く出土した。これらのことから、南区画は祭祀的な要素の強い区画と推定できる。



導水施設



木製高杯

中央区画からは、掘立柱建物跡3棟、井戸3基、炉跡1基などを検出した。また、これらに先行する時期の遺構として、平地式建物跡1棟を検出した。

掘立柱建物跡は川跡の際に集中している。掘立柱建物6は各辺に3つの柱穴をもち、四隅に柱穴をもたない特異な建物である。同様の柱穴配置をもつ建物は、滋賀県滋賀里遺跡などで認められる。

井戸は掘立柱建物跡に隣接して設置されている。全ての井戸が、楕円形の平面形態を呈し、長軸1m弱を測る素堀のものである。井戸2からは、ほぼ完形の布留甕が出土した。

炉跡は不整楕円形で、長軸98cm、短軸50cmを測る。覆土には多量の炭と焼土が認められ、焼土が濃密に確認できた箇所は直径50cm程度の範囲である。覆土を水洗してみたところ、わずかながら微細な鉄片が確認できたため、鍛冶炉である可能性が高い。

鍛冶炉や後述する木製品製作の存在から、中央区画は生産の機能を担っていた区画と考えられる。



南区画と中央区画間の橋脚状遺構



農具未製品(左:平鋤 右:泥よけ)

北区画からは、掘立柱建物跡5棟以上、井戸1基、溝2条を検出した。建物の数は居館域中で最も多く、建物の規模も他の区画と比較して大きなものが目立つ。

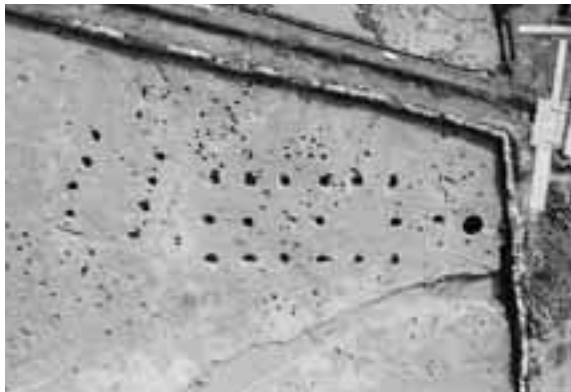
掘立柱建物12は、梁行2間(5m)×桁行5間(12m)の大型建物で、柱穴の大きさも他の建物と比べて際立つことから、居館内の中心的建物と考えられる。建物の南側には柱穴列を確認した。

掘立柱建物7は、梁行4間(6.6m)×桁行3間(7.4m)で、北側には^{ひまし}庇を設けている。庇部分を除いた四隅の柱穴には断面が方形の柱、その他の柱穴には板状の柱を用いており、それらの柱間には一辺4~5cm程度で断面方形の杭がほぼ等間隔に打ち込まれている。これは「^{かべこま}壁木舞」と考えられ、建物の上部構造を伺うことのできる貴重な資料である。

掘立柱建物13は、独立棟持柱をもつ建物である。建物の周囲には雨落ち溝が認められる。

井戸5は、掘立柱建物12と中心軸を合わせるように設置されている。井戸枠として丸太を割り抜いた桶を使用している。桶は楕円形を呈し、長軸で96cmを測る大型品である。

他の区画と比較して、卓越した規模の掘立柱建物跡や井戸をもつことや、中央区画との境に柵列と考えられる柱穴列が設置されていることから、北区画は首長の居住空間と考えられる。



掘立柱建物12・13



井戸5



掘立柱建物7



「壁木舞」出土状況

川跡は中央区画と南区画の間を区分するように、北東から南西方向に流れている。川幅は約20m、深さは約2mを測る。川跡からは橋脚状遺構、導水施設、木製農具集中箇所などの施設を確認した。

橋脚状遺構は川跡を横断するように、2本一対の杭(橋脚)が打ち込まれたものである。中央区画と南区画を結ぶように設置されており、両区画の人々が盛んに往来していたことを推測できる。周囲には^{はしげた}橋桁に使用したと思われる木材が多数出土し、これらの中には準構造船の部材も含まれていた。

導水施設は井戸1から溢れる水を流すための施設で、長い板材を幅約60cmの間隔で平行に並べて設置し、その両外側に杭を打って固定したものである。総延長は約11.3mを測る。祭祀遺物の出土状

況から、祭祀の行為者は南区画の居住者であった可能性が高い。

導水施設の西側からは木製農具集中箇所を確認した。やや埋まり淀んだ状態の川底に、自然木を「コ」の字に設置したもので、中からはナスビ形曲柄鍬が3～5枚重なった状態で4セット（総計15点）と、平鍬4点（うち3点が柄と泥よけを装着した状態）が出土した。

川跡からは、他にも多量の木製品が出土した。出土した木製品は、建築部材や農具、工具、容器など多岐にわたるが、その中には、装飾木製品、四方転びの箱など、県内では類例の少ないものも含まれている。装飾木製品はかまぼこ形で、表面（湾曲した面）には直弧文が彫り込まれている。また、農具の未製品や削りかすなども出土しており、居館内で木製品の製作が行われていたことがわかる。農具の未製品は、平鍬と泥よけの未製品が、柄に装着するような状態で重なって出土した。

川跡の東端部からは柱根10本が集中して出土した。これらの柱根は太さなどから、掘立柱建物12・13の柱根を抜き取ったものと考えられる。柱根集中箇所の中央部には、大型の臼が出土した。

居館の南北端に認められる溝1と大溝は、居館域をとり囲む溝と考えられる。幅が最も広い箇所でも2.2m、最深部は60cm程度を測る。居館域の内部と外部を区別する役割をもつと考えられ、居館域の北端にある大溝北側には、部分的に柵列と考えられる柱穴列が認められる。

今回の調査によって、千代・能美遺跡は「首長の居住空間」の周辺に「生産」、「祭祀」という各種機能を担う区画が付随し、それらが川跡、柵列、大溝などによって明瞭に区分された首長居館と考えられることが明らかになった。また川跡からは、準構造船部材や装飾木製品などに代表される多量の木製品など、そこに居住していた人々が残した多くの道具が認められた。これほど明瞭に居館内部について何うことのできる遺跡はとても少なく、今後古墳時代の社会について考える際に、大きな示唆を与え得る資料になるものと思われる。

（林）



木製農具集中箇所



川跡内の木製品出土状況



準構造船部材（縦板）

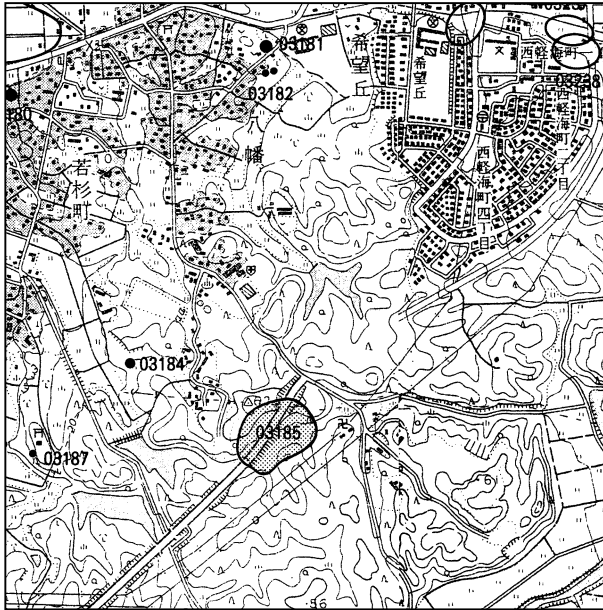


装飾木製品

きよみずであと
浄水寺跡

所在地 小松市八幡地内
調査面積 約1,700m²

調査期間 平成12年8月17日～平成13年1月9日
調査担当 三浦ゆかり 湯川善一



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

浄水寺跡は、小松丘陵の北端にある通称キヨミズ山（標高63.5m）南東緩斜面に広がる。キヨミズ山とそれから派生した小尾根に三方を取り囲まれ、周辺に広がっていたであろう当時の集落からは、見えない位置に営まれている。

昭和59（1984）年度に、石川県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。この調査により、斜面に複数の平坦面を造成し、掘立柱建物を主とする寺院関連施設が営まれていたことがわかった。出土遺物中には、平安京以東で最もまとまった初期貿易陶磁器や、県内随一の出土量（1,221点）を誇る墨書土器など特筆すべき物も多い。その墨書土器中には「浄水寺」と記されたものがあり、この地を「キヨミズデラ」の跡とする伝承と一致することで知ら

れている。これらの調査結果から本遺跡は、平安時代から室町時代にかけて営まれた大規模な山林寺院であり、その営続期間は ～ 期の4時期に分けられることが判明している。

今回の調査は、前回の調査と同様建設省（現国土交通省）の施行する一般国道8号線（小松バイパス）の改築工事に係るものである。1984年の調査でみつかった本遺跡中最大の平坦面（約26×24m）の下層を中心に調査をおこなった。この平坦面上には、礎石建物とその背後にキヨミズの池が配されている。この建物は、寺院中最大であり、礎石の使用や、背後に池を計画的に配する点などから、浄水寺の中心的な施設であったと推定されている。以下、前回の調査の時期区分にあわせ、今回の調査結果を概観してみたい。

期（9世紀後半～11世紀前半）

南側の緩斜面上に土坑3基と多数のピットを検出している。東西の土坑は、期大型建物の中心軸をはさみ、相対する形で配置されている。西側の土坑は中央部を掘り残すことにより南北に区切られ、東側の土坑は西辺に小段を持つ。その形態や位置、湧水が観察されることから、何らかの水に関わる宗教儀礼に伴う可能性がある。平坦面の造成は削平のため不明であるが、当該期の検出面を覆う層位中には10世紀後半～11世紀前半の遺物が多く含まれており、何らかの施設があったと考えられる。

期（11世紀前半～12世紀後半）

当該期における平坦面の造成は、11世紀前半に行われている。北側斜面を削り、南側を埋めて造成され、最上面には、黄褐色粘質土が亀腹状に厚く貼られていた。それと同時に桁行5間（12m）・梁行4間（10.5m）の礎石建物が建立されている。この建物は内部に2×3間の内陣を、南側に1間の縁、さらにその西側に階段をもつ。北端の礎石と縁部分の礎石とでは1.5m以上の高低差があり、懸け造り風の建物であったことが想定できる。西辺の中央近くには土器埋納孔があり、地鎮に伴うと考えられる。この建物は、礎石が焼けていることなどから、12世紀後半に火災に遭い焼失したと考えられる。

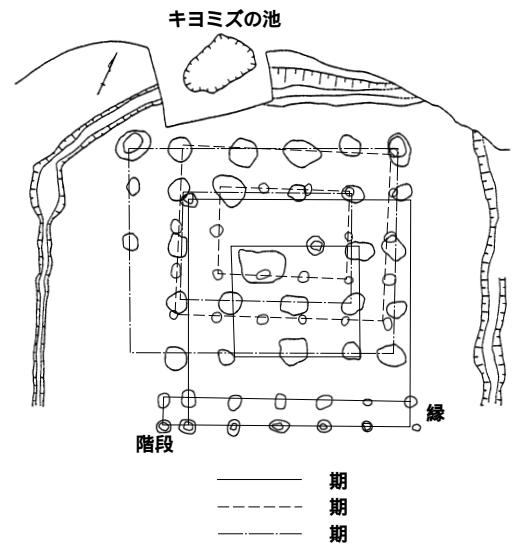
期（12世紀後半～13世紀）

当該期の平坦面造成は、12世紀後半に行われている。さらに北側へと拡張し、嵩上げも行われている。これに伴い、大型建物も掘立柱建物として再建されている。規模は前期の建物と桁行は同じであるが、梁行きを短くしており、縁及び階段部分もない。その後、14世紀（期）にさらに造成が行われ、建物もその規模をまし礎石建物へと作り替えられていることが前回の調査で明らかとなっている。

本遺跡は、加賀地方における有数の山林寺院であり、全国的に見ても、寺院名を含め全体像の分かる数少ない貴重な遺跡である。今回の調査で中心施設の構造とその変遷がより明らかとなった。これにより今後は、本遺跡との関連が想定されている加賀国府推定地を中心とした周辺の遺跡や、他の山林寺院との比較検討を深めてゆきたい。（湯川）



今年度及び1984年度調査区合成図（S = 1 / 400）
（枠線内が今年度調査区）



大型建物変遷図（S = 1 / 400）



期大型建物縁礎石列（南より）

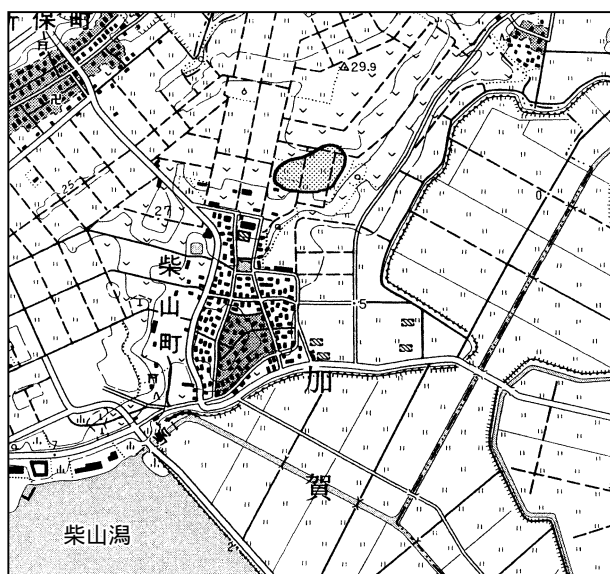


期大型建物（西より）

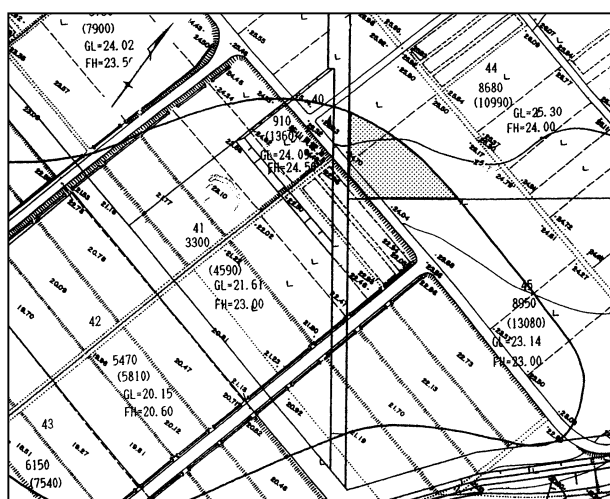
柴山貝塚

所在地 加賀市柴山町地内
調査面積 512m²

調査期間 平成12年9月26日～平成12年11月15日
調査担当 岩瀬由美 西田昌弘



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 2,500)

本遺跡は柴山台地段丘面の南端、標高20～25mに立地する。今年度調査区は、遺跡の北端部にあたる。旧地形は北西 - 南東方向に傾斜しており、その比高差は調査区内で約1.8mに及んだ。

今年度調査では、竪穴状遺構や大型土坑、小穴を検出している。竪穴状遺構は3基確認された。内2基(SI 2・3)は、一辺約2mと約4.5mの隅丸方形を呈する。もう1基(SK02)は長軸2.5m、短軸2mの楕円形を呈する。遺物の出土は少量であったものの、いずれも8世紀代に比定される。前二者は当初竪穴住居かと思われたが、小規模であること、立ち上がりが丸みを帯びること、柱穴や竈痕跡等が確認されなかったことなどからそれとは考えにくく、類似した遺構をもつ松任市末松ダイカン遺跡や末松A遺跡などの調査成果を踏まえ、今後検討していきたい。

これら竪穴状遺構と共に調査区北東部において、大型土坑を検出している。位置関係・土層観察等からほぼ同時期の遺構と考えられ、関連性を窺わせる。

一方、小穴群は集中区をもつことなく、散在して検出された。柱穴と考えられるものが数基確認できたものの、建物跡としてプランをおさえるまでには至っていない。

今年度調査区は、縄文土器の出土も極少量で貝塚も確認されなかったことなどから、柴山貝塚の縁辺部として位置づけられよう。(西田)



竪穴状遺構 (SI 2) 完掘状況 (南から)



竪穴状遺構 (SI 3) 完掘状況 (北から)



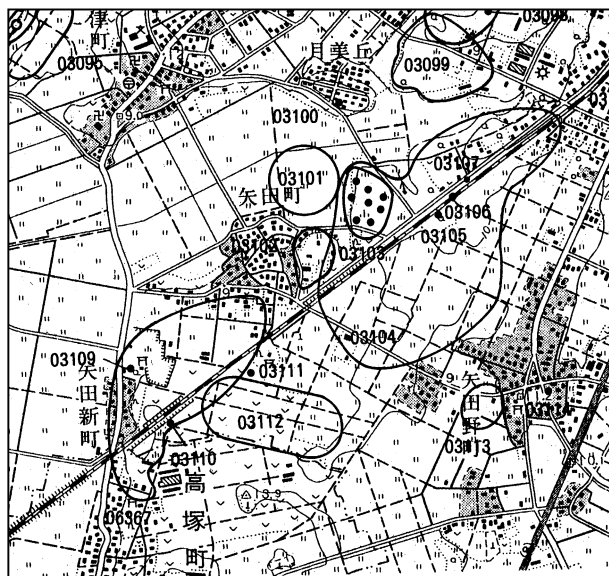
調査区全景



調査区遺構図 (S = 1 / 300)

刀何理遺跡・狐森塚古墳

所在地 小松市矢田町・矢田新町地内 調査期間 平成12年9月25日～平成12年11月15日
調査面積 1. 刀何理遺跡 300m² 調査担当 久田正弘 荒木麻理子 谷内明央
2. 狐森塚古墳 230m²



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



刀何理遺跡 8区 掘立柱建物



刀何理遺跡 10区 掘立柱建物

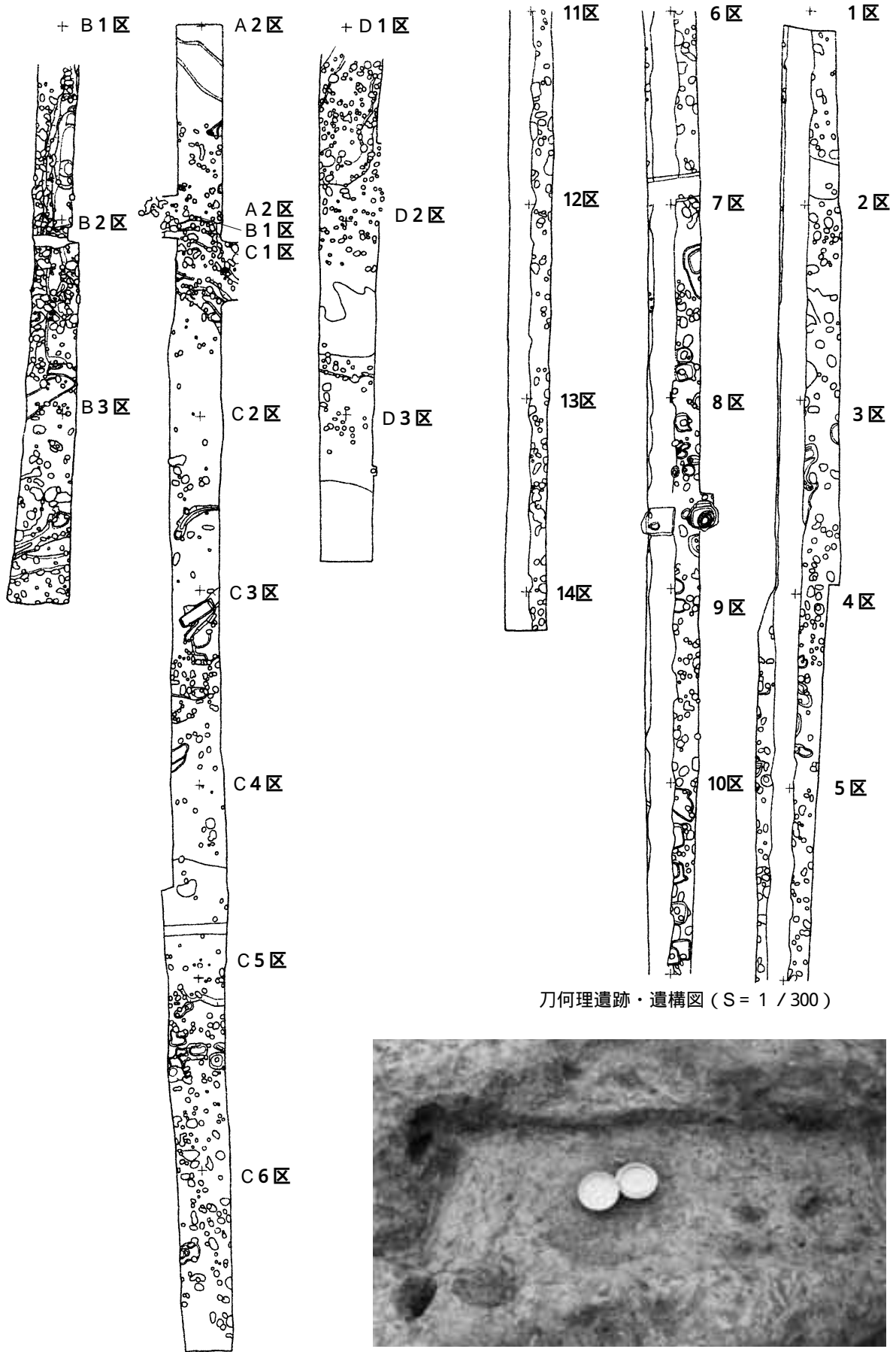
小松市南部に位置する月津町地内と矢田野町地内を分断して柴山瀧に通じる馬渡川の開析谷の周囲には、6世紀前葉から中葉に属する古墳が群集していた。刀何理遺跡・狐森塚古墳は、その開析谷の左岸に所在する遺跡であるが、古墳群は開発により消滅した。なお、両遺跡とも県営ほ場整備にかかる調査である。

1. 刀何理遺跡

本遺跡では、古代に属する遺物を確認している。また、遺構は多数のピットを確認したが、伴う遺物が少なかったため、時期の特定はできない。8区と10区には柱穴の直径1mを越す大型の掘り方を持った掘立柱建物2棟を検出した。ただし、調査区の範囲外に続いているため、全体的な規模は確認できなかった。

2. 狐森塚古墳

以前に凝灰岩製の家型石棺のほか、金環・須恵器が確認されている。今回の調査では、古墳時代後期に属する遺物が出土した。C3区では土壌墓が1基確認され、そこから組み合わせ式の木棺の痕跡を検出した。その床面の中央部から須恵器の坏身と坏蓋が1組出土した。坏蓋は逆位で坏身に接して置かれていた。また、B1～2区にかけて幅4m程度の方形で巡ると思われる溝が検出されたが、かつて周辺に古墳群が存在していたことから、古墳の周溝の可能性はある。(荒木)



刀何理遺跡・遺構図 (S = 1 / 300)

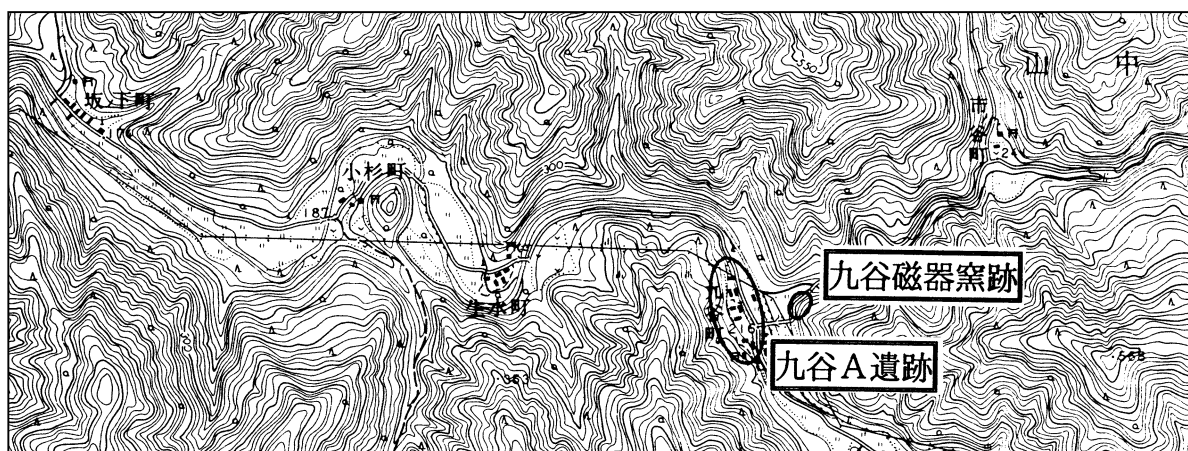
狐森塚古墳・遺構図 (S = 1 / 300)

狐森塚古墳 C3 区土抗墓

九谷 A 遺跡

所在地 江沼郡山中町大字九谷町地内
調査面積 2,700㎡

調査期間 平成12年5月17日～平成12年12月20日
調査担当 松山和彦 田中和彦 金山哲哉



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

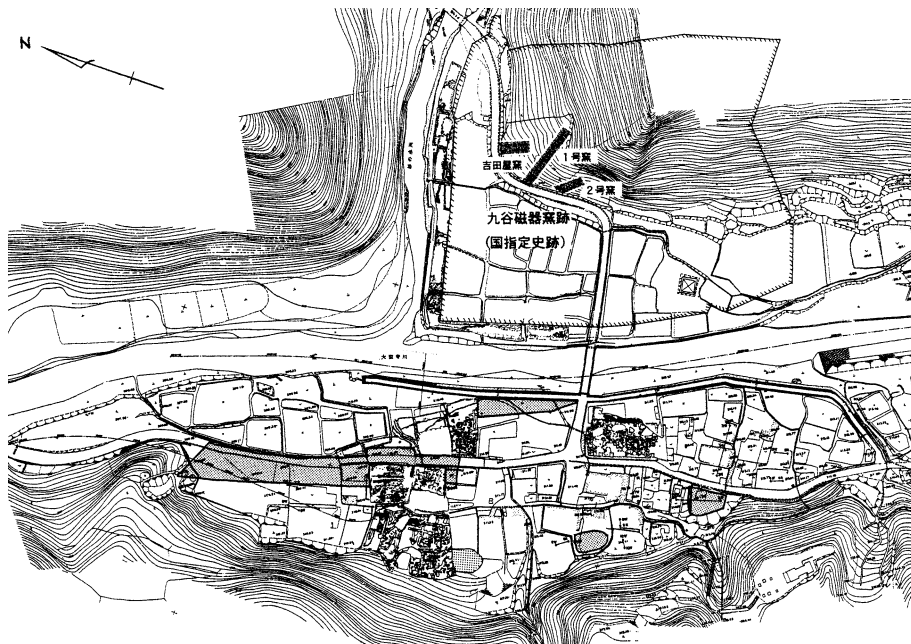
九谷 A 遺跡は大聖寺川の上流部に位置する戦国時代から江戸時代にかけての集落遺跡で、遺跡の規模は南北約340m、東西は最大約100m、平面積約20,800㎡と見込まれている。大聖寺川総合開発事業九谷ダム建設工事に係る発掘調査には平成6年度より着手し、11年度までに約7,250㎡の調査を終えているが、12年度は大聖寺川左岸の約2,700㎡について発掘調査を実施した。調査区は盛土造成された山側を A1～A3 区、県道付替え部分を B 区、大聖寺川護岸沿いを C 区とした。対岸には国指定史跡である「九谷磁器窯跡」が所在する。

山裾の A1～A3 区では江戸時代前期(17世紀中頃)に大規模な造成が行われ、その整地土上で建物跡などの遺構を検出した。A1 区では盛土造成に伴う石垣と礎石建物1棟、掘立柱建物3棟が確認された。石垣は江戸時代に2度改築されている。A2 区では造成とほぼ同時期と推定される焼土遺構が7基検出された。この焼土遺構群は、もっとも残存状態の良い焼土1の特徴から色絵磁器の生産に関連した絵付窯の遺構である可能性がきわめて高い。このことからここに「九谷磁器」生産に関する工房があったと推定される。A3 区では、部分的に江戸時代の整地がみられるが、それ以前の整地面から戦国・江戸時代の掘立柱建物を検出した。

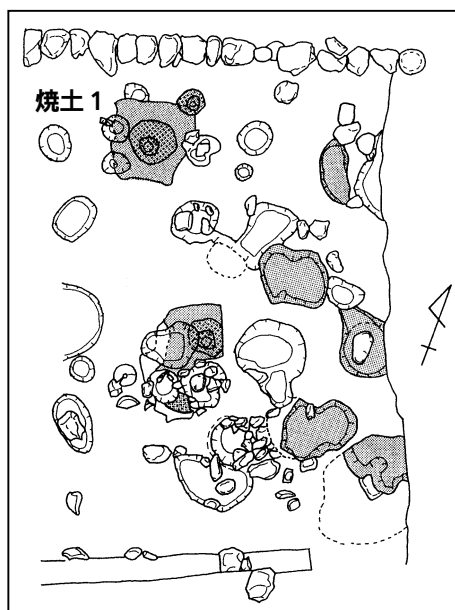
B 区からは3棟以上の掘立柱建物や17基の石組井戸、トイレ跡など日常生活に関連した遺構が検出され、戦国・江戸時代を通じて屋敷地として利用されている状況が明らかになった。また屋敷地の北側は、江戸時代を通じて水田として利用されており、水田との段差に沿って築かれた3列の石垣や江戸時代前期に埋め立てられた河跡を検出した。

C 区では、大聖寺川の護岸に伴う江戸時代の石垣3列に加え、石垣の下に埋められた先行する時期の室状の土坑を検出した。その他にも石組井戸1基を検出している。

本年度の調査では遺跡の北部に展開する屋敷地の実態を明らかにするとともに、山側に広がる江戸時代前期の盛土造成地で絵付窯跡と考えられる遺構を発見することができた。このことから九谷地内における江戸時代前期の磁器生産は、登窯が築かれた大聖寺川右岸に収斂せず、左岸にも展開していたことが確実となった。本年度をはじめとする一連の発掘調査の成果から、「九谷磁器」生産の工房やその管理施設とみられる建物遺構群が確認されている A 区は、九谷地内において磁器を一貫して生産した可能性を示す資料としてきわめて重要なものであると評価できよう。(田中)



調査区位置図 (S = 1 / 4,000)



A2区焼土遺構群 (S = 1 / 100)



A2区焼土遺構群 (南から)



B区全景 (北から)



B区石組み井戸 (SE08) (西から)

平成12(2000)年度下半期の遺物整理作業

企画部整理課

1班 小松市八幡遺跡(1993年度調査)では、近世陶器の花瓶、植木鉢、拳骨茶碗、腰折茶碗、染付鉢等400点の実測・トレースを行い、その後、羽咋市四柳白山下遺跡(1994・1995年度調査)では、墨書須恵器、全面赤彩を施した土師器、製塩土器、中世陶器を含む土器類の分類・接合と、120点の実測・トレース、多数の柱根と板材、木履、漆椀、曲物、櫛等の木器・木製品90点の実測・トレース、遺構平面図・遺構断面図等のトレースを行った。(博多友子)

2班 松任市乾町遺跡B地区(1990・1991年度調査)、津幡町加茂遺跡(1992・1999年度調査)の整理を行った。乾町遺跡は、縄文時代晩期から江戸時代の複合遺跡で、上層(平安～江戸時代)は整理済みであり、今回は、中・下層(縄文時代晩期～弥生時代)の記名・分類・接合を行った。加茂遺跡は、92年度分は実測・トレース、99年度分は、記名を行った。多量の遺物の中には、墨書・転用硯・円面硯・軒丸瓦・井戸枠等があり、勝示札出土の背景を窺い知ることができた。(横山そのみ)

3班 河北郡宇ノ気町指江遺跡・指江B遺跡(1998年度調査)は、古代・古墳・中世の遺跡で、円筒埴輪の破片や紡錘車の漆付、琥珀未製品、漆器椀、墨書土器も多く見られた。加賀市弓波遺跡(1995年度調査)は弥生～中世の遺物があり、特筆すべきは弥生の台付き壺が数点、石器では扁平石斧が1点あった。緑色凝灰岩が多く見られたが、未成品しかなかった。木器では柱根が多く、箸や曲物側板も数点あった。これらの遺跡を整理し多くの遺物と接することで目を肥やすことができた。(宮本巳恵)

4班 金沢市金沢城跡本丸附段(1998年度調査)を11月いっぱいに関え、12月から3月までは津幡町倉見オウラント遺跡(1998・99年度調査)金沢市梅田B遺跡・観法寺遺跡(1998・99年度調査)の遺物整理を行ないました。4月から11月までは金沢城跡の近世の遺物ばかり扱っていたので、目も手も堅いものに慣れてしまっていたようです。12月からは古代や中世の土器がほとんどで、そのやわらかな感触になんとか懐かしさととまどいを感じてしまいました。(河村裕子)

5班 田鶴浜町三引遺跡(1998年～99年度調査)の出土品整理作業を行った。上半期から続いた記名・分類・接合作業は12月で終了、翌年1月から300点の実測・トレースを行った。食物を煮る時に使った土器が多く、こびりついた煤を落としてからの実測・拓本作業となった。サルボウやハイガイを使ったと思われる貝殻紋、その他多くの文様、縄文土器の調整痕や形成方法など、この遺跡から出土した豊富な遺物を観察できたことは、貴重な経験であった。(中條倫子)

6班 金沢市近岡遺跡(1998・99年度調査)の記名・分類・接合及び金属器の実測・トレース作業、戸水C遺跡・戸水C古墳群(1996年度調査)の古墳時代を主とする土器・石器の実測・トレース作業を行なった。近岡遺跡は、弥生時代末～古墳時代初頭の遺跡であり、甕・壺・鉢・高坏・器台・小型土器など多量の遺物が大量に出土しており、珍しいものでは銅鍔や赤彩の台付壺、接合によって完形となった装飾器台などにもふれられ大変貴重な経験となった。(明田奈々)

7班 小松市八日市地方遺跡(1997・1999年度調査)幸町遺跡(1999年度調査)は弥生時代の遺跡で、整理作業は記名・分類・接合及び実測・トレースを行った。約420点あった土器は器面全体に刷毛調整や櫛などで様々に施文された甕や壺が殆どを占め、実測・トレースには時間を要した。その他鋤や鍬の未成品や衣笠・弓などの木製遺物、古銭や文字の書かれた煙管などの金属遺物も実測・トレースをした。私自身、観察の重要さという点で初心に返ることのできた遺跡であった。(北寿栄)

8班 金沢市畝田・寺中遺跡(1999年度調査)は主に弥生時代中期～中世までの複合遺跡である。作業内容は当遺跡から出土した土師器、須恵器の記名・分類・接合である。土師器では甕・壺・高坏・

甌をはじめ多数の手づくね土器やミニチュア土器が見られた。須恵器では古墳時代の高坏・蓋・身や古代の坏が多く見られ、特に古墳時代中期の高坏においては坏部に丁寧な波状文が施された特徴的な物も存在した。当時の人々の繊細な技術に大変驚かされた。
(加藤博美)

洗浄班 新センターに移ってから、始めて洗浄室の洗い場10台全部を使って、職員2名、アルバイト8名で、洗浄をおこなった。総数17遺跡 指江・指江B遺跡、柏原ミツハシ・柏原ジッチン遺跡、加茂遺跡 99、吉田C遺跡、一針BC遺跡、柴山貝塚、額谷遺跡、梅田B遺跡、観法寺遺跡、那谷B遺跡、鶴島遺跡、観法寺古墳群、畝田B遺跡、畝田C遺跡、畝田ナベタ遺跡、浄水寺跡、加茂遺跡 00を洗浄した。3遺跡を同時進行しながら洗い、洗い終わった土器の乾燥場所の確保がたいへんであった。
(中村真弓)

復元班 八幡遺跡、加茂遺跡、指江遺跡、弓波遺跡、金沢城跡、倉見オウラント遺跡、三引遺跡、近岡遺跡、八日市地方遺跡、畝田寺中遺跡など土器復元を行なった遺跡である。3月中頃には大きな壺を手掛けました。日数があまりなかったので破片の大きさから想像して期日までに出来るかが心配でした。完成品の大きさに周囲もびっくりしていました。小さな物から大きな物まで何でも出来る事が楽しみのひとつである。
(前田すみ子)

H12年度下半期 出土品整理状況

遺跡名	担当者	10月	11月	12月	1月	2月	3月
八幡遺跡	浜崎						
四柳白山下遺跡	川畑						
乾遺跡	中島						
加茂遺跡	安						
指江遺跡	久田						
弓波遺跡	立原						
金沢城跡本附	滝川						
指江遺跡	久田						
倉見オウラント遺跡	中西						
梅田遺跡	松山						
岩出遺跡	湯尻						
三引遺跡	金山・湊屋						
近岡遺跡	菅野・土屋						
八日市地方	浜崎・林						
畝田・寺中遺跡	和田						



木器実測風景



土器復元風景

北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について

久田 正弘

1. はじめに

木目沈線文とは、「薄い割板の端を土器の器面に押しつけて作った沈線紋」であり、遠賀川系土器製作技術の特色の1つ（佐原真1987）とされた。痕跡は木目に直行（a類：柁目板）と斜行（b類：板目板）があるという。ハケを用いているので、刷毛目沈線文（久々ほか1984）と呼ぶ例もある。佐原氏は北陸地方には富山県に2例と石川県に1例があり、富山県の2例は遠賀川式土器（佐原真1987）とされた。しかし、その2例は中期（小松式）に訂正（久々ほか1984）されたが、依然として遠賀川系土器との認識（久々ほか1984・東日本埋蔵文化財研究会1991）は残ったままである。90年代になり、類例が増加しており、その所属時期などを検討する必要がある、本稿を纏めた。

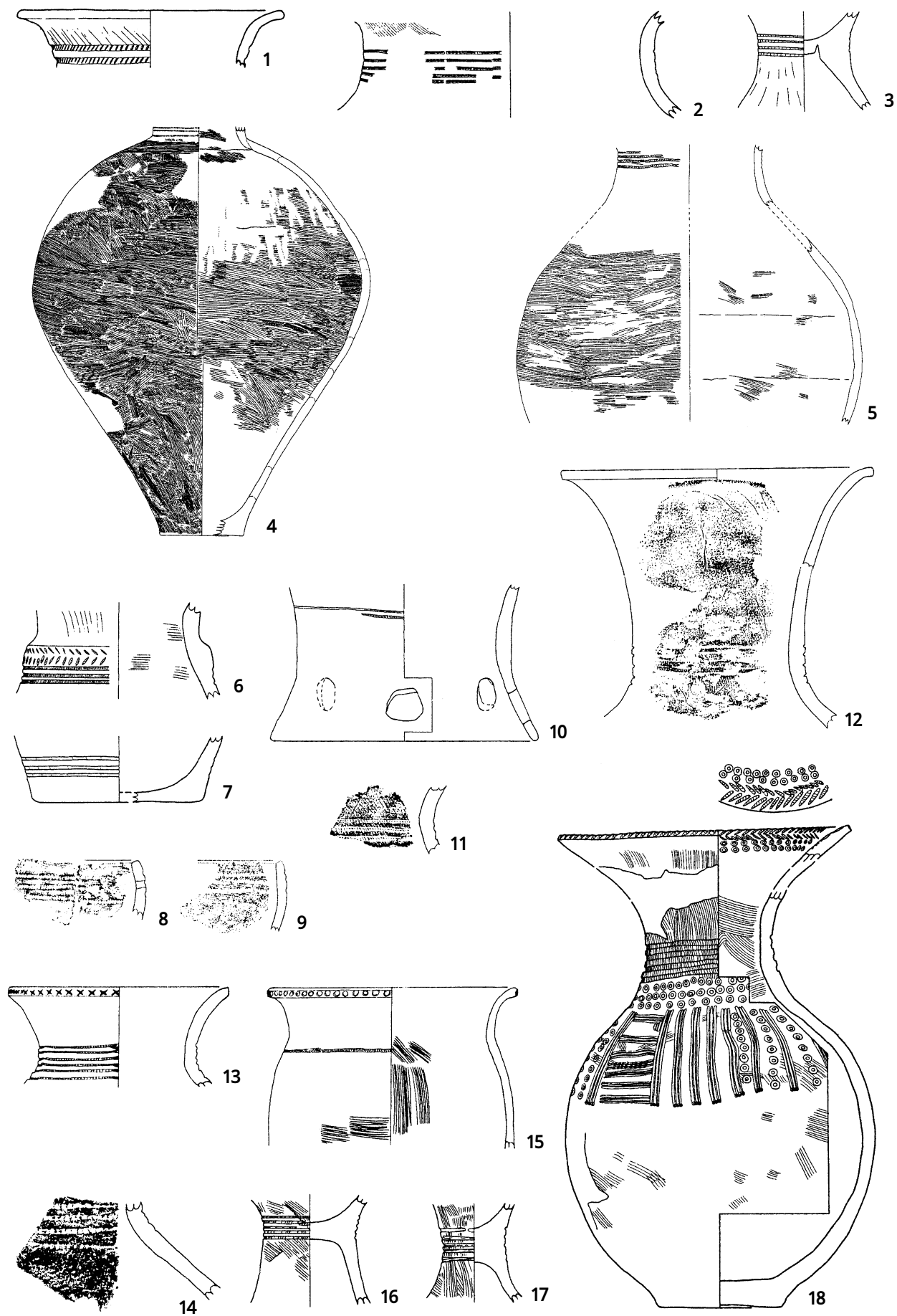
2. 石川県内の資料

加賀地方では5例確認され、南加賀地方には1例、北加賀地方では4例が確認された。第1図1は加賀市永町ガマノマガリ遺跡130号土坑出土であり、中期後半（凹線文出現以降）の土器と出土（山本ほか1987）した。壺の頸部に2条の木目沈線文（b類）を持つ。冬材の間隔は幅2～3mmと広く、この工具でハケ調整を行っている。2は金沢市専光寺養魚場遺跡SK06出土であり、凹線文を持つ壺と共に出土（増山1992）した。広頸壺の頸部に5条の刷毛目沈線文（a類か）を持つようである。3は金沢市二ツ屋遺跡河道出土であり、中期前葉と後半の土器が出土（松浦ほか1998）した。高坏と思われ、4条の木目沈線文（a類：限りなく柁目に近いもの）を持つ。受部にはソケットを充填しており、時期は中期後半である。4・5は金沢市西念・南新保遺跡出土である。4はK区SG01（土器溜り）出土（楠ほか1989）であり、SK14の10～20cm上面で検出された。中期後半であり、3本の凹線文を持つ甕と出土した。大型の壺であり、頸部に3条の木目沈線文（b類か）を持つようである。5は14号方形周溝墓の主体部の可能性があるSD09から出土（楠ほか1996）した。中期後半であり、壺の頸部に4条の木目沈線文（b類か）を持つようである。

能登地方では、6例が確認された。6・7は羽咋市吉崎・次場遺跡J・W区包含層出土（福島ほか1987）である。6は壺の頸部であり、幅広の突帯上に綾杉文を持ち、3条の木目沈線文（a類か）を持つようである。佐原氏が指摘された土器と思われるが、突帯の形状から見て、中期後半である。7は底部であり、観察表によると木目沈線文となっているが、定かではない。8・9は鹿島郡鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡A地区出土（栃木ほか1995）である。第12号竪穴式建物（8）、第1号環濠N区（9）出土である。中期後半であり、同一個体の可能性が指摘されている。無頸壺か鉢と思われ、3条（a類か）持つようである。10は羽咋郡富来町八幡バケモンザカ遺跡SD06出土（松田ほか2000）である。凹線文系の台付鉢（在地）であり、2条（a類か）を持つ。11・12は富来町山王丸山遺跡包含層出土であり、中期前半～後半の土器が出土（的場ほか1994）した。共に壺の頸部に施文され、時期は中期後半と思われる。11は3条（b類）、12は5条（b類）を持つ。

3. 富山・新潟県内の資料

富山県内では4例が確認された。第1図13～15は中新川郡上市町正印新遺跡出土（酒井ほか1982）である。7・8層出土であり、前期の土器が少量出土し、中期の土器が主体であり、中期後半の土器が多く報告されている。13は遠賀川式土器とされ、木目沈線文（a類か、佐原1987）とされたが、口



第1図 木目沈線文集成

縁部と頸部の文様は貝殻腹縁（酒井ほか1982）という。14は壺の肩部破片であるが、櫛状工具による刺突文か木目沈線文（a類か）なのか記述がない。15は頸部に木目沈線文（b類か）を持つ甕と思われる。共に中期後半の可能性が高いと思われる。16・17は中小泉遺跡 SD33出土であり、遠賀川式土器（酒井・狩野ほか1982）とされた。共に高坏であり、16は木目沈線文（a類か）、17はヘラ描き沈線文を持つという。SD33は中期後半の土器が出土した。

新潟県内では、1例が確認された。18は佐渡郡新穂村平田遺跡 SD08出土である（坂上ほか2000）。上層で検出され、河原口式と栗林式が出土した。壺であり、頸部に4条の木目沈線文（a類か）を持つようである。時期は中期後半である。

4．北陸地方の木目沈線文の特徴

福井県内では、まだ確認していないが、調査などが少ないことに起因していると思われる。以下、北陸地方の木目沈線文の特徴をあげる。

特徴1：中期後半の土器群と伴う。前期・中期前葉の土器群と共に出土する例もあるが、遺構出土例は全て中期後半の土器と共伴した。

特徴2：壺の頸部に数条を持つものが多い。

特徴3：出土例は少ないが、貯蔵・煮沸・供膳形態に認められるから、その技法は特異な技法では無いようである。

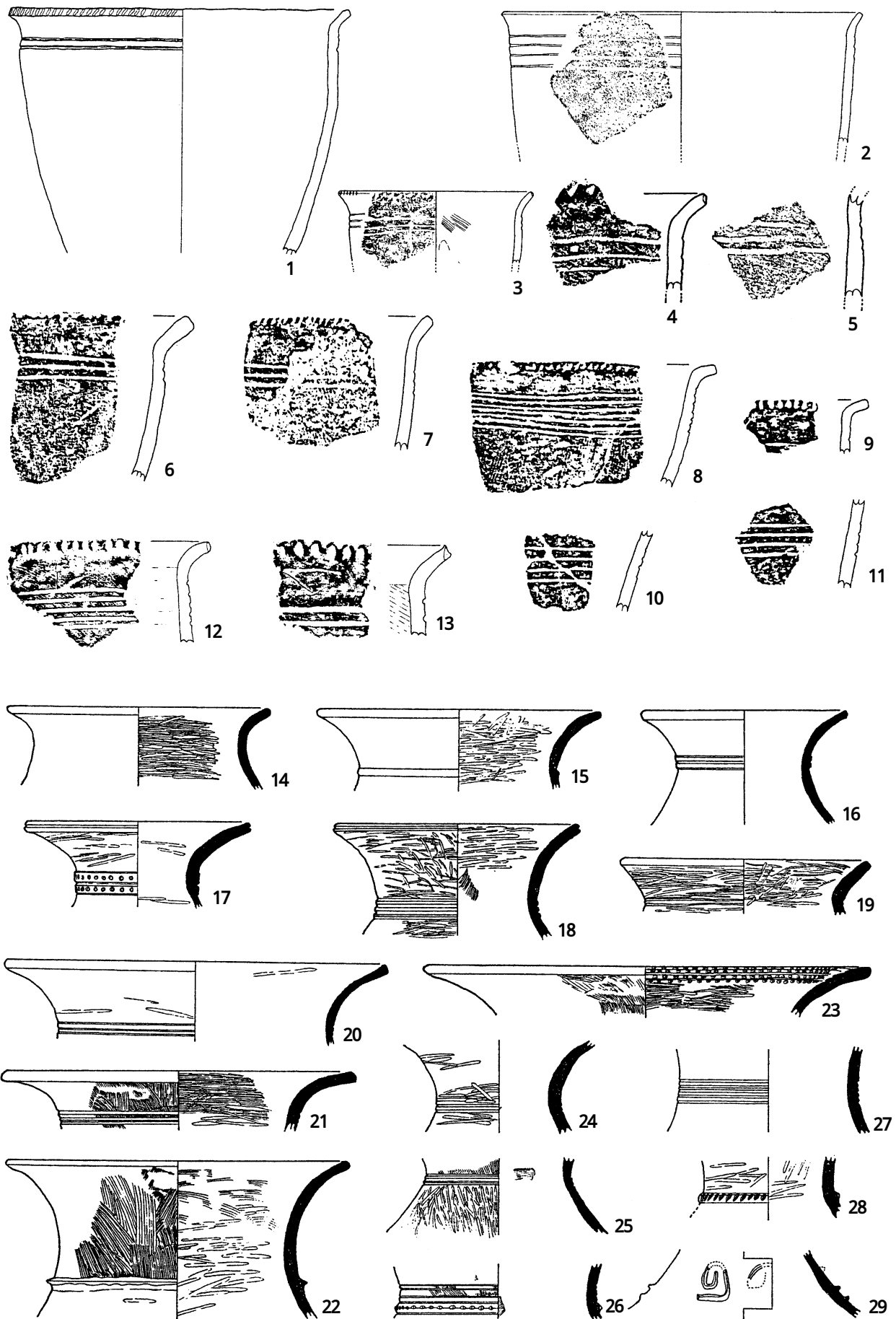
特徴4：木目沈線文を持つ土器は、遠賀川式土器では無く、遠賀川式土器には確認できない。

木目沈線文の工具は、ハケである。ハケによる文様は、刻みが 期前半に甕に確認され、壺の口縁部文様は 期前半に存在する。ハケによる櫛描文は、富山県では小松式（久々ほか1984）、石川県では中期後半（久田1993）で確認された。よって、 期（後半）以降にハケによる施文（調整具と施文具の同一化）が主体になった結果、ハケによる刺突直線文（木目沈線文）が出現したものと思われるが、出現時期は凹線文が存在しており、凹線文を木目沈線で表現した可能性が高い。

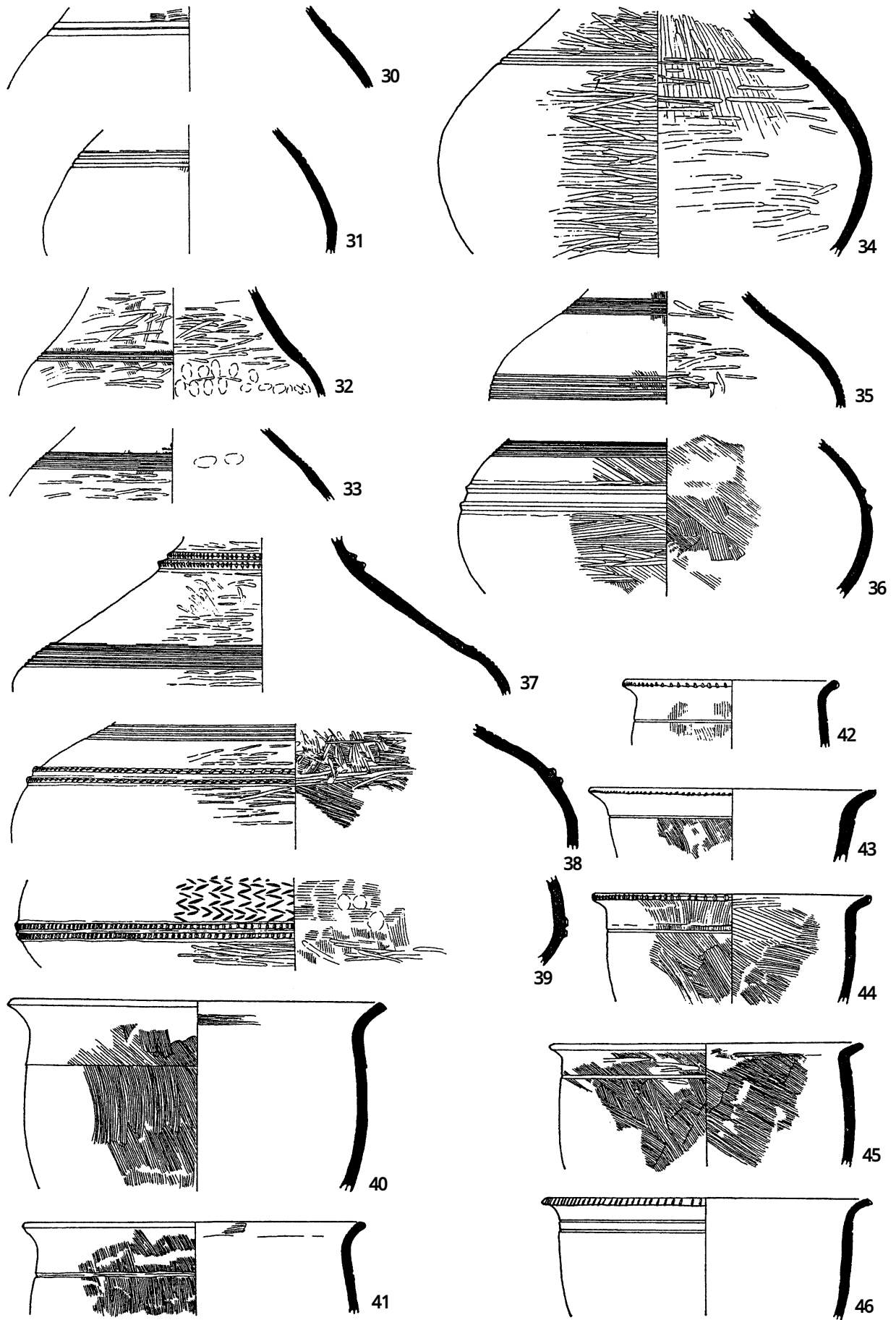
5．福井県内の遠賀川式土器

では、北陸地方における遠賀川式土器はどのような状況なのであろうか。出土例は21世紀になってもあまり増えていないのが現状である。福井県若狭地方では、大飯郡大飯町大島宮留遺跡で甕5点（第2図1～5、3～5は同一個体）、吉見浜遺跡で甕4点（8～11）、小浜市阿納塩浜遺跡で甕2点（6・7）が出土（入江1986・入江ほか1986）した。小浜市丸山河床遺跡では壺・甕などの破片が約1200点出土（第2図14～第4図53、森川1992）し、三方郡三方町田名遺跡では甕2点（12・13、田辺ほか1988）、三方町海山五十八遺跡では壺1点（若狭歴史民俗資料館1999）、敦賀市吉河遺跡で壺1点（第4図55、中司ほか1986）が出土した。若狭地方では、数遺跡で甕のみの出土が確認されたが、調査面積の少なさに起因しているのではあろう。写真によると、石英・長石類より流紋岩と思われる砂粒が目立つ（2・6・7・46・海山五十八遺跡）が、確認はしていない。丸山河床遺跡では壺・甕・鉢・蓋のセットが確認され、出土量や時期幅からも集落が存在したようである。列点文（17・23）から丹後、貝殻施文（39）から山陰～九州北東部の影響が想定（森川1992）されるが、比率は多くない。55は櫛描文による文様であり、第 様式とされるが、詳細な報告がなされていない。

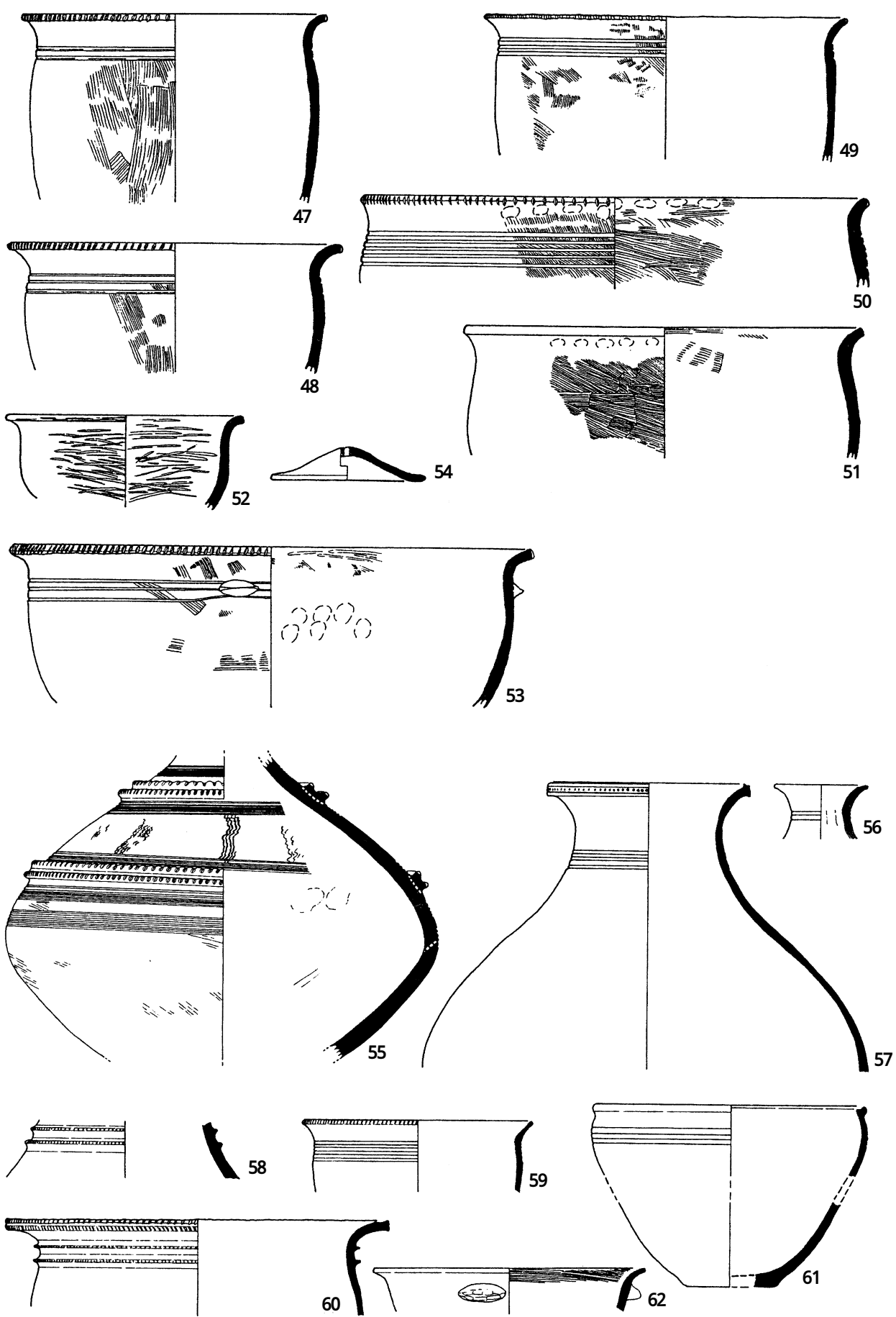
越前地方では、福井市糞置遺跡で、壺・甕・鉢など（第4図56～61、田辺ほか1986）と丹生郡清水町飯谷在田遺跡（古川2001）でも壺・甕のセットが確認されたことから、越前地方でも遠賀川式土器を使う集落が存在した可能性が高くなった。両遺跡とも、詳細な報告が望まれる。



第2図 遠賀川式土器集成 1



第3図 遠賀川式土器集成 2



第4図 遠賀川式土器集成 3

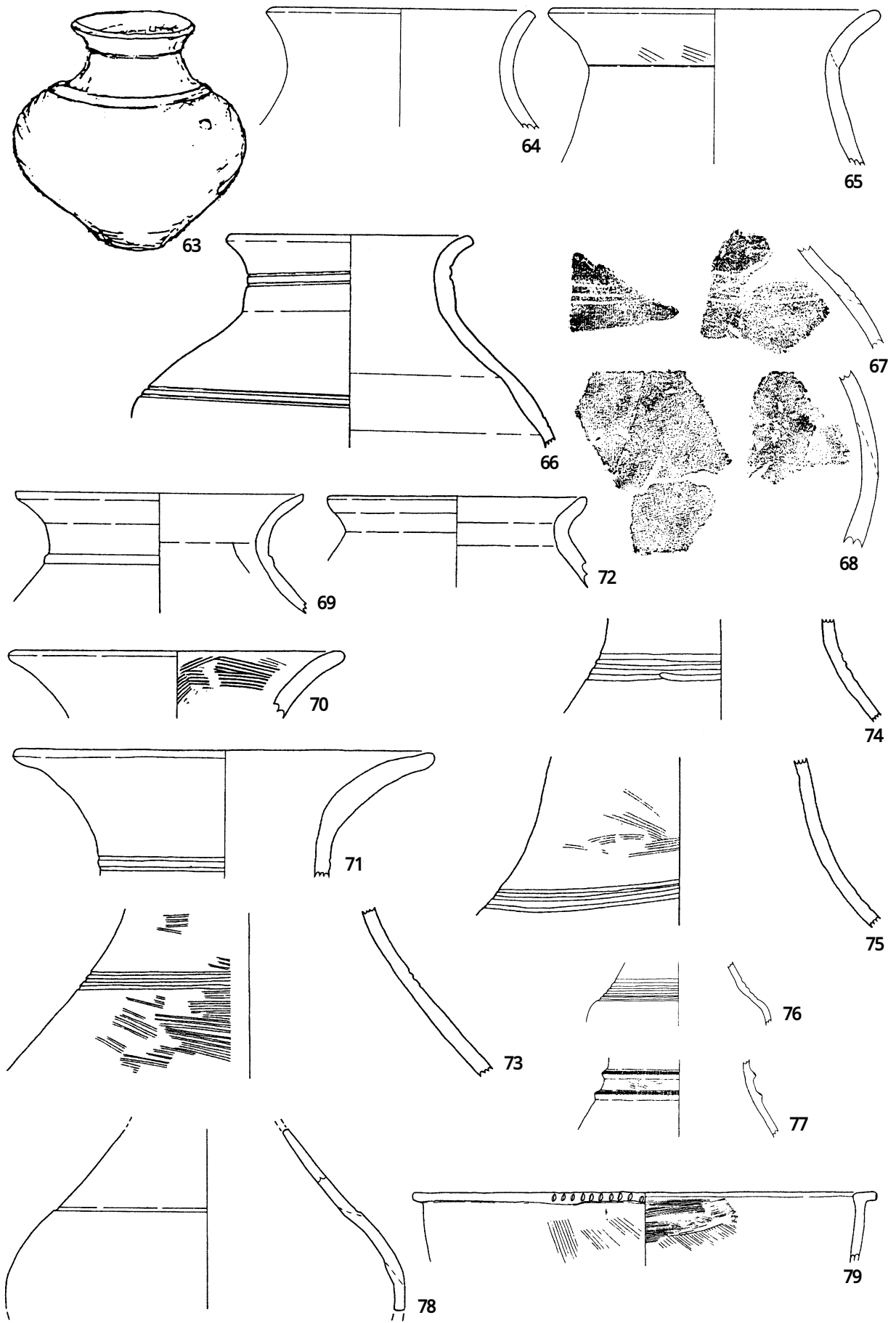
6. 石川県内の遠賀川式土器

加賀地方では、小松市八日市地方遺跡で壺1点(第5図63、樫田1999)、能美郡寺井町牛島ウハシ遺跡で壺2点(64・65、井上1999)、石川郡鳥越村下吉谷遺跡で壺1点(66、橋本1981)が出土した。松任市八田中遺跡で壺3点(67・68他に底部、久田1988)、乾遺跡で数点(69~77、岡本2001)、石川郡野々市町粟田遺跡で壺2点(78他に底部、久田ほか1991)が出土した。金沢市南新保三枚田遺跡で壺1点(80、楠ほか1984)、戸水C遺跡で甕1点(79、戸潤ほか1986)、観法寺遺跡で壺1点(99年度県センター調査)が出土した。しかし、単独ないし少数出土であり、セットが確認できないことにより、搬入ないし摸倣土器と思われる。

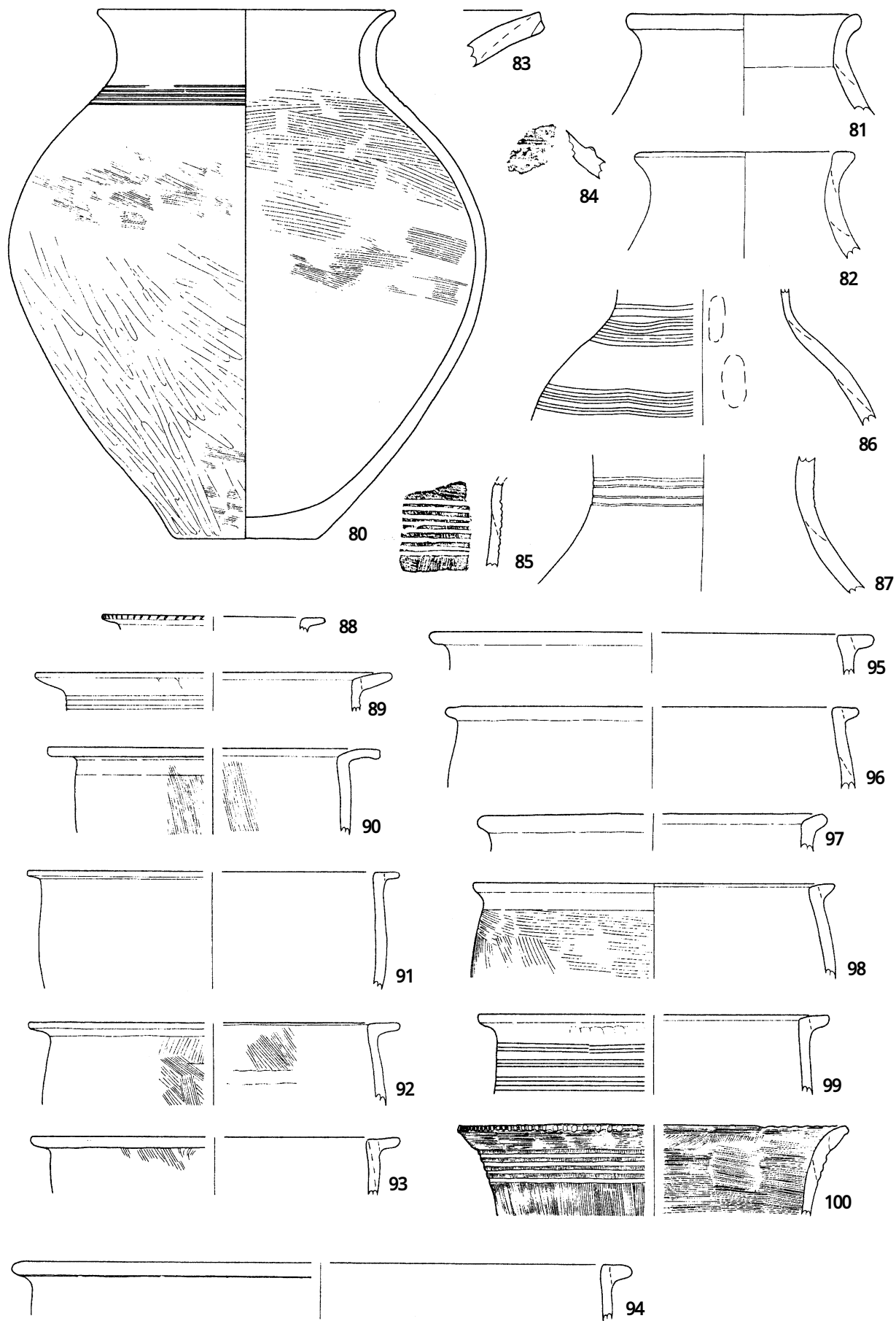
63は外傾接合であり、長石と石英を少量含むが、主体は流紋岩であり、黒色・灰色が主体を占める。64・65は河跡出土であり、縄文時代中期中葉から弥生時代後期後半の土器と出土した。67・68は同一個体と思われる、長石主体であり、石英(クリスタルとにごり)を含む。角閃石を微量含む。乾遺跡A区下層から長竹式後半~柴山出村式(大洞A式後半~前期末)の土器とややまとまった量が出土した。69は石英(にごりが主体、クリスタル)と長石と黒色・赤色流紋岩を含む。70も流紋岩が主体であった。71は石英と長石を少々含み、流紋岩が主体であり、黒色・赤色・茶色が主体である。69~71は外傾接合である。73の沈線は断面が丸い工具による1本引きである。内傾接合であり、貝殻条痕を持つので条痕系の壺である。沈線文を持つ壺(74~76)は接合方法を確認してから後日報告したい。77は貼付突帯を持つので新段階と思われる。78は1本沈線のみを文様に持ち、やや古相を呈する。胎土には、石英(にごり)・長石類と流紋岩が半々を占める。79は逆L字口縁を持つ甕である。80は1mm以下の砂粒を若干含み、胴部上半はハケ調整が残るが、表面は風化し、表面に所々赤彩痕が残る。楠氏は前期であることを躊躇されたが、前期新段階(吉岡1991)とされた。胴部上半にハケ調整痕の上にミガキが認められないのは、ミガキ調整が存在しなかったのであろう。胴部上半に5条の沈線を持つが、頸部が短く外反するのも違和感を持つ。よって、80は中期後半ではなかろうか。金沢市観法寺遺跡の壺は、洗浄中に筆者が存在を確認し、赤色流紋岩を多量に含んでいた。

能登地方では、羽咋市吉崎次場遺跡N2土坑(81~85)とN区包含層(86)J・W区包含層(87~100)でややまとまって出土(福島ほか1987)した。N2号土坑は中期初頭の櫛描文土器と出土、一部(安1990)と全て(吉岡1991)を中期初頭とする案がある。83は壺の口縁部でヘラによる刻みを持つ。84は壺の貼付突帯であり、ハケによる刻みを持つ。85の沈線はヘラによる。他に鉢が存在する。81~85は外傾接合であり、櫛描文土器も全て外傾接合(的場・久田ほか1994)である。遠賀川式・櫛描文系は石英・長石を主体とし、一部に流紋岩を微量含む土器があるが、砂粒が大きい。条痕系も同じであるが、砂粒は小さく、一部に海綿骨針を持つ土器がある。また、条痕系は内傾接合であり、色調や器壁が薄いなどの点が異なる。

86以下の胎土も石英・長石を主体とする。100は他に少量の流紋岩と海綿骨針を多く含み、遺跡ないし周辺で製作されたものである。89は黒色流紋岩主体であり、搬入の可能性が高い。86は頸部径がもう少し広くなり、浅い4条の櫛描文を持つ。石英・長石主体であるが、黒色流紋岩を少し含む。87は半截竹管による直線文であり、95・99・100はクシによる。90・91・93の胴部はもっと張るようである。90は 期前半の西日本系甕であり、他に東部瀬戸内系甕の搬入が確認(宮下1998)された。95と99は同一個体であり、95にも4条の浅い櫛描文が存在する。95は石英・長石以外に花崗岩を微量、96は花崗岩を多く含む。88~99は、逆L字口縁であり、外側に粘土を貼り付けている。口縁部は、指で上下から押さえており、口縁上面はナデているが、丁寧ではない。胴部の接合は確認できるのは外傾接合であり、内傾接合はない。逆L字口縁の甕は、山陰・山陽地方の前期末~中期初頭に存在



第5図 遠賀川式土器集成4



第6図 遠賀川式土器集成 5

(正岡ほか1992)し、この地方からの影響が考えられる。

7. 富山県内の遠賀川式土器

富山県内では、2遺跡で確認された。高岡市石塚遺跡の壺(第7図101)は、遠賀川系土器(上野1972)とされる。ヘラ描施文を基調とした6種類の文様を持ち、土器は厚く、粗い砂粒を含み、器面はヘラミガキが全面に施されるようである。イ溝内ピット(周溝を持つ建物、久田1992、 期末～期前半)と5m離れた1号溝から出土しており、遠賀川系土器ではないようであり、詳細な報告が望まれる。射水郡下村加茂遺跡では壺の破片が3点出土しており、2点(102・103、久々ほか1999)が報告された。前期古段階とされているが、細片であることや条痕文系土器も文様を持たないことから時期は特定できず、下がる可能性が高い。

8. 新潟県内の遠賀川式土器

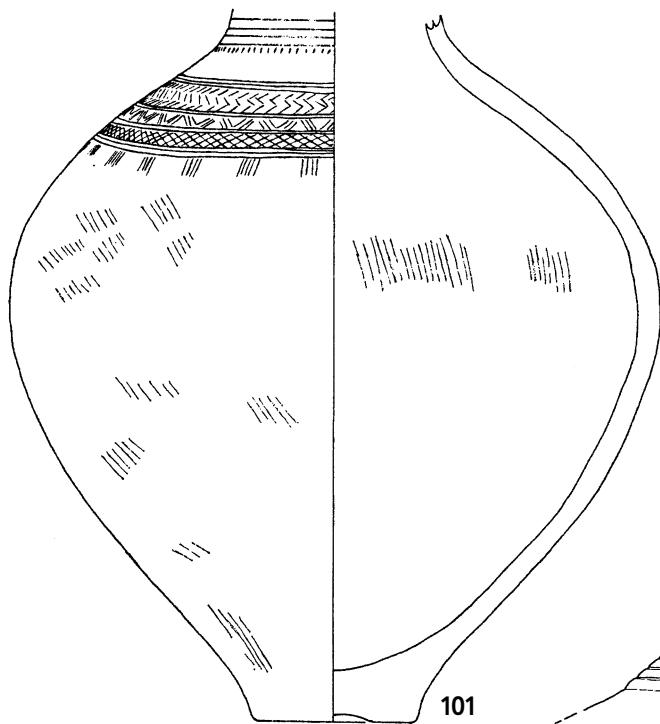
新潟県内では、上越市大塚遺跡で壺2点(104・105田中ほか1988)、中頸城郡中郷村和泉A遺跡で壺・甕1点(106・107荒川1999)が出土した。104は胎土から信州系(田中ほか1988)とされたが、胎土には石英(クリスタルと濁りの2種類)と黒色流紋岩が主体であり、長石は少量で花崗岩も少々入る。角閃石や赤色流紋岩も入る。105は花崗岩と黒色流紋岩が主体であり、白色流紋岩も入る。黒色が入ることは島根県の遠賀川式土器に近く(久田2001)、赤色は近江地方の遠賀川式土器に認められる。また長野県内の石英はクリスタルであり、濁りは確認されない。よって、信州系というよりは山陰系ないし近江系の可能性が高いと思われる。和泉A遺跡の106は花崗岩主体であり、金雲母も入っており、亜流遠賀川式土器(荒川ほか1999)とされた。107は甕と思われ、八ヶ調整と思われた。石英がクリスタルと濁りのあるもの両者が確認され、金雲母と白濁石が認められた。胎土的には、両者とも東海地方西部と思われる。

9. 遠賀川式土器の胎土

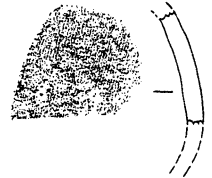
遠賀川式土器は、胎土から長石・石英を主体とするグループ(A類)と流紋岩を主体とするグループ(B類)が存在し、後者は黒色が主体(a類)と黒・赤色が主体(b類)がある。流紋岩(チャートの可能性もあるが筆者の裸眼では識別不能)のBa類は島根県の遠賀川式土器に、Bb類は近江地方の遠賀川式壺と粟津湖底貝塚の北陸系土器に確認した。また、若狭地方の土器にも流紋岩(B類)が存在する可能性があるようである。胎土から見た遠賀川式土器の系譜は、A類の106・107は、東海地方西部からの搬入の可能性が強い。新潟県内では条痕文土器(櫻王・水神平式)と共に長野県経由で搬入されたようである。羽咋市吉崎次場遺跡の土器は殆どA類であるが、搬入か摸倣かは判断がつかない。しかし、逆L字口縁の甕が殆どであるので、山陽・山陰地方の影響が想定される。

黒色流紋岩のBa類は、63、78、105で確認された。黒・赤色流紋岩のBb類は、69～71、104、金沢市観法寺遺跡、長野県松本市エリ穴遺跡(未報告竹田学氏教示)で確認された。石川県内では、B類は小松市梯川流域で確認され、Bb類の赤色砂粒(鉄石英か)は羽咋市柴垣海岸以北の遺跡(羽咋市北部～富来町)でも確認されるが、両地域では遠賀川系集落の存在を考えるのは難しく、西日本に系譜を求めざるを得ない。Bb類の遠賀川式土器は、滋賀県内に存在し、また福井県若狭地方にもB類の遠賀川式土器が存在する可能性があり、この地域からの搬入の可能性を指摘しておく(第9図)。

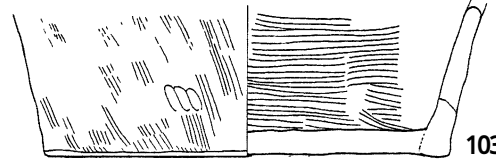
北陸地方の突帯文深鉢は、福井県大野市佐開遺跡(第8図1・2、南1986)と大島田遺跡(3、宝珍ほか1991)、石川県加賀市横北遺跡(4～6、湯尻1977)と石川郡鶴来町白山町遺跡(7～10、西



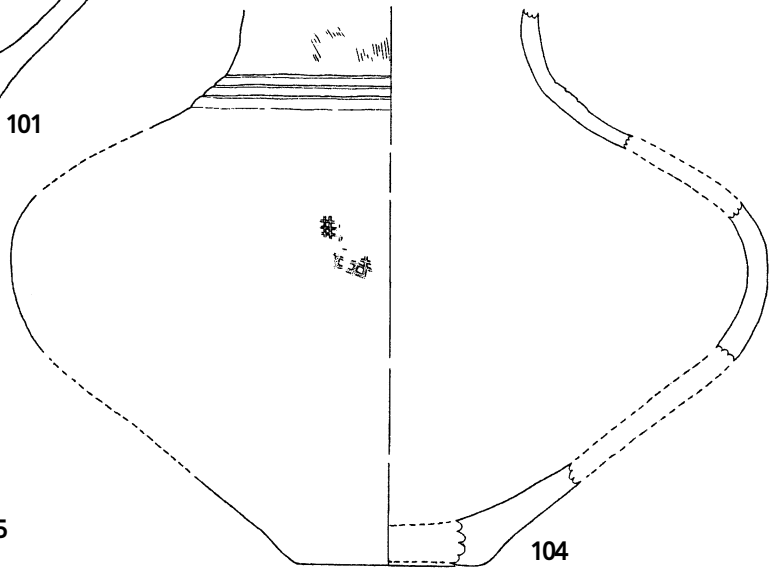
101



102



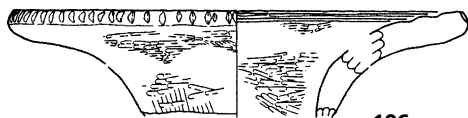
103



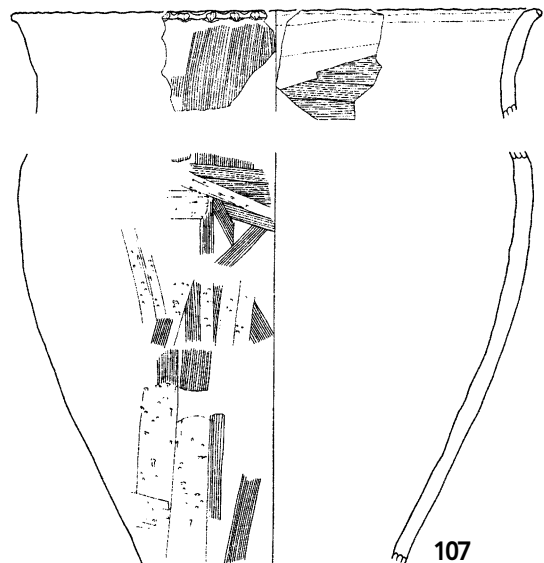
104



105



106



107

第7図 遠賀川式土器集成6

野ほか1985)と松任市長竹遺跡(11~21、中島1977)と野々市町御経塚遺跡(22~25、高堀ほか1983)と金沢市近岡遺跡(26・27、楠ほか1998)、富山県高岡市下老子笹川遺跡(29、富山県文化振興財団1999)と朝日町境A遺跡(28、酒井ほか1991)で確認された。22・26は東海地方西部の西之山式と思われ、2・27~29の2条刻目突帯文深鉢は船橋・長原式の影響と思われる。29の時期を酒井重洋氏は尖底から大洞C2式併行、家根祥多氏は船橋式、私は長原式とみている。10はくの字口縁を持つので違う可能性が高い。また在地化した11~20や口唇部に刻みを持つものが多い。滋賀県内では、大津市滋賀里遺跡では滋賀里式に北陸系土器が伴う(田辺編1973第3表)ことや、長竹式(後半)の浅鉢(服部遺跡)と柴山出村式壺(上寺地遺跡)の搬入(久田1998)が確認された。よって、晩期後半~弥生時代前期にかけて、北陸地方(新潟県も含む)・飛騨・信州地方からは浅鉢・壺類の精製土器を中心に一部深鉢が近畿地方に搬入され、この交流に乗って遠賀川式壺が北陸地方などに搬入されたものと思われる。

10. おわりに

本稿を纏めるにあたり、以下の方々の教示を得たが、旨く生かせなかったことをお詫びする。また特に、家根氏は今後教示を得ることが出来ず、心残りである。家根氏のご冥福をお祈りいたし、筆を終えることとする。敬称省略、赤澤徳明、石川日出志、石黒立人、伊庭 功、酒井重洋、佐藤由紀男、竹田 学、田村昌宏、福海貴子、林大智、家根祥多

使用図版縮尺

1 / 2 = 第1図14、第2図4・5

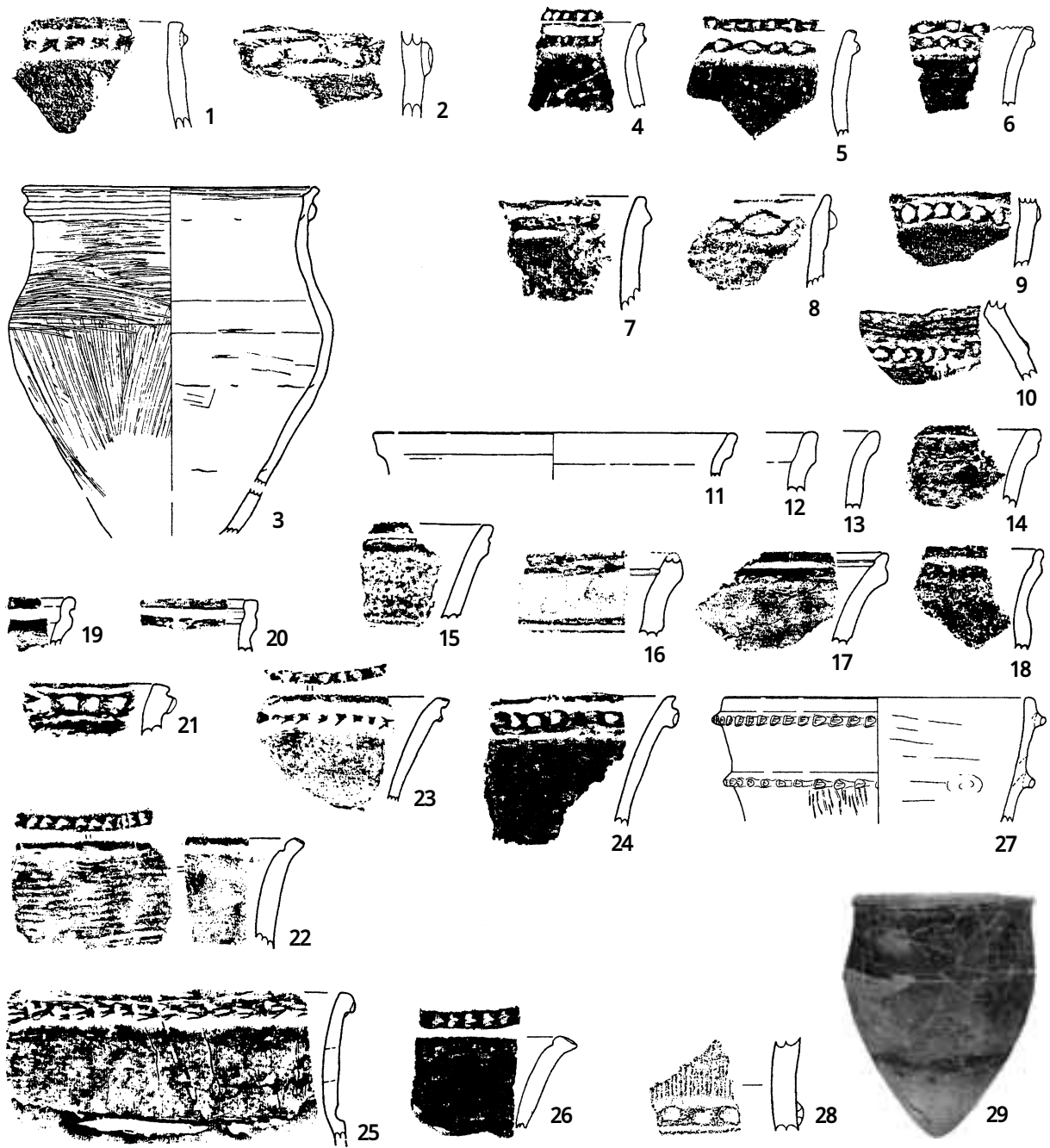
1 / 3 = 第1図1~3・6~12・18、第2図1・6~13、第5図64~68・78~100、第7図102~106、第8図1・2・7~10・12~28

1 / 4 = 第1図13・15・16・17、第2図2・3・14~55、第5図69~77、第7図101・107、第8図3~6・11

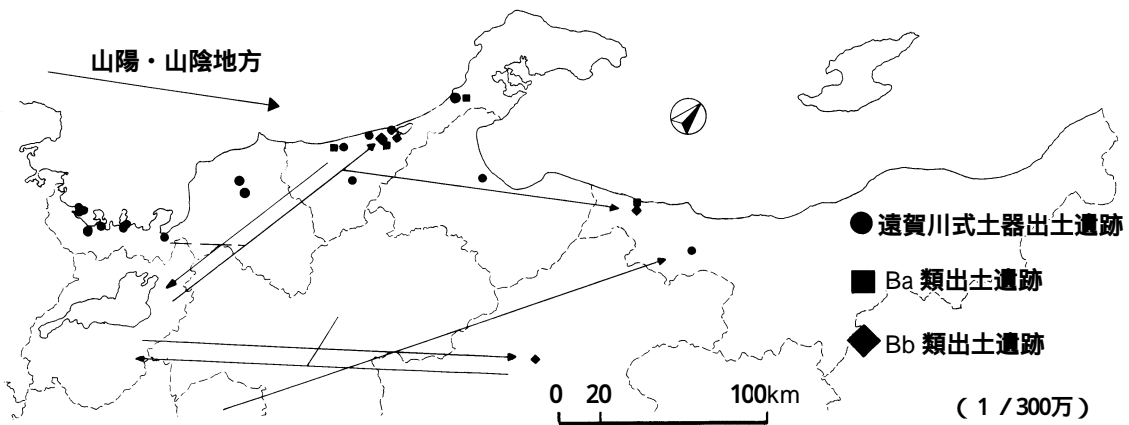
1 / 6 = 第1図4・5、第4図56~62

参考文献

- 荒川隆史ほか 1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会
 井上誠一 1999 『牛島ウハシ遺跡』 石川県寺井町教育委員会
 入江文敏ほか 1986 『大島浜福宮留遺跡 大島宮留遺跡』 若狭考古学研究会
 入江文敏 1986 『宮留他遺跡』『福井県史』考古編 福井県
 上野 章 1972 『弥生時代附、古式土師器』『富山県史』 富山県
 岡本恭一 2001 『松任市乾遺跡発掘調査報告書 A・C区下層編』(財)石川県埋蔵文化財センター
 櫻田 誠 1999 『弥生時代のムラー八日市地方遺跡』古代学協会講演会資料
 久々忠義ほか 1984 『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』 富山県上市町教育委員会
 久々忠義ほか 1999 『下村加茂遺跡発掘調査報告』 富山県下村教育委員会
 楠 正勝ほか 1984 『金沢市南新保三枚田遺跡』 金沢市教育委員会
 楠 正勝ほか 1989 『西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
 楠 正勝ほか 1996 『西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
 楠 正勝ほか 1998 『金沢市近岡遺跡』金沢市教育委員会
 坂上有紀ほか 2000 『県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書 平田遺跡』 新潟県教育委員会
 酒井重洋・狩野 睦ほか 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町土器・石器編』 上市町教育委員会



第8図 突帯文深鉢集成



第9図 遠賀川式土器出土遺跡分布図

- 酒井重洋ほか 1991 『北陸自動車道遺跡調査報告 境 A 遺跡土器編』 富山県教育委員会
- 佐原 真 1987 「みちのくの遠賀川」『東アジアの考古と歴史』中 同朋舎
- 高堀勝喜ほか 1983 『野々市町御経塚遺跡』 石川県野々市町教育委員会
- 田中 靖ほか 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書 原山遺跡・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 田辺昭三編 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』 湖西線関係遺跡調査団
- 田辺昭三ほか 1986 「糞置遺跡」『福井県史』資料編13考古 福井県
- 田辺常博ほか 1988 『田名遺跡』 福井県三方町教育委員会
- 栃木英道ほか 1995 『谷内・杉谷遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター
- 戸潤幹夫ほか 1986 『金沢市戸水 C 遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 富山県文化振興財団 2000 『大規模発掘十年の出土品展』
- 中島俊一 1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』 石川県教育委員会
- 中司照世ほか 1986 『吉河遺跡発掘調査概報』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 西野秀和ほか 1985 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡()』 石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本澄夫 1981 「鳥越村下吉谷遺跡出土の前期弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第24号 石川考古学研究会
- 東日本埋蔵文化財研究会 1991 「富山県」『東日本における稲作の受容』 東日本埋蔵文化財研究会
- 久田正弘 1988 『八田中遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘ほか 1991 『粟田遺跡発掘調査報告書』 (社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 久田正弘 1992 「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」『石川県埋蔵文化財保存協会年報 3』
(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 久田正弘 1993 「能登における弥生時代中期の一樣相(2)」『石川考古学研究会々誌』第36号 石川考古学研究会
- 久田正弘 1998 「北陸西部系土器の動き」『氷遺跡発掘調査資料図譜』 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
- 久田正弘 2001 「縄文晩期後半における条痕の系譜」『北越考古学』第12号 北越考古学会
- 宝珍伸一郎ほか 1991 『大島田遺跡』 勝山市教育委員会
- 福島正実ほか 1987 『吉崎・次場遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 古川 登 2001 「甌谷在田遺跡」『第16回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 正岡睦夫・松本岩雄編 1992 『弥生土器の様式と編年』 木耳社
- 増山 仁 1992 『金沢市専光寺養魚場遺跡』 金沢市教育委員会
- 松浦郁乃ほか 1998 『金沢市二ッ屋遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 的場勝俊・久田正弘ほか 1994 『山王丸山遺跡』 石川県富来町教育委員会
- 松田睦夫ほか 2000 『富来城跡』 石川県富来町教育委員会
- 南 洋一郎 1986 「佐開遺跡」『福井県史』考古編 福井県
- 宮下栄仁 1998 『吉崎・次場遺跡第16次』 羽咋市教育委員会
- 森川昌和 1992 「米の文化」『小浜市史』通史編上巻 小浜市役所
- 吉岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・磁器 古代編』 六興出版
- 安 英樹 1990 「北陸における第 様式の弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会
- 山本直人ほか 1987 『永町ガマノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 湯尻修平 1977 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』 石川県教育委員会
- 若狭歴史民俗資料館 1999 『若狭の古代遺跡』

北陸における弥生時代の拠点集落について

安 英樹

1. 序 論

「拠点集落」という言葉をご存知だろうか。考古学においては主に弥生時代の遺跡に対して使われる用語であり、遺構や遺物の質・量が優れた遺跡に対して形容詞的に付与されていることが多い。では、「拠点集落」とは具体的にどのような内容のものを指すのだろうか。

「拠点集落」の内容については、1980年代に二つの論考で明記されており、引用することができる。一つは、田中義昭^{*1}によるものであり、関東地方の集落において、竪穴建物の数や遺跡の規模が卓越する拠点(的)集落とそれ以外の周辺(的)集落に分類し、長期・短期・継続・断続といった消長と組み合わせた集落類型を設定した。さらに近年は、集落分岐の母体、生産・交易の拠点、首長の居在といった性格が拠点集落に付帯することを指摘している。もう一つは、酒井龍一^{*2}によるものであり、近畿地方中央部及び瀬戸内海北岸地域において、多数の拠点集落が社会を構成する基本要素とした上で、その規模・構造をモデル化した。さらに、拠点集落の面・線的な分布状況から、地域の物流や情報伝達に機能しかつ集落の結合を強めるネットワークの存在を想定している。

田中と酒井の論考は、それぞれの地域で社会構造の分析に大きく寄与しているが、両者の概念は必ずしも一致するものではない。これは見解の相違とするよりは、地域によって集落の立地から消長、構造、さらには社会に至るまで異なる様相に起因しており、それぞれの地域像が端的に描き出されていることに注目すべきと考える。地域によって弥生文化が伝播するプロセスが様々な要因で異なることが想定される以上、ひとくちに拠点集落といっても、画一的な姿となる必然性はなからう。

では、これら以外の地域で拠点集落の様相はどうかといえば、意外にもほとんど検討されておらず、明確な定義もないまま漠然と言葉だけが使用されている観があり、それは北陸地方も例外ではない。今後は、集落研究の混乱を防ぎつつ、深化させるためにも、地域の実情に即して集落を検討する必要性が強く感じられよう。本論は、この視点に立って、北陸地方の代表的な弥生時代の集落とその周辺の様相を検討し、当地域の社会とその構造、その変遷について考えてみたものである。

2. 事例紹介

以下、本論で用いる時期区分は、前期を、中期を、後期をとする弥生時代～期(様式)とする。中期については、凹線文出現の前後で二分するものとし、その前半を、後半とする。後期については、前半と後半に大別する。なお、これ以降の時期については時代の枠を超えていくが、庄内式並行期を、布留式並行期をとして参照することにした。

さて、北陸地方、中でも旧国の加賀・能登で構成される石川県下において、弥生土器の様相に見るような西日本系統の情報を核として構成される弥生文化が波及・定着するのは、弥生時代前期から中期の前半にかけての時期と想定される^{*3}。この時期に西日本各地との活発な交流がうかがえる事例としては、2つの遺跡を選択できる。一つは南加賀の八日市地方遺跡、もう一つは南能登の吉崎・次場遺跡であり(第1図)、どちらも石川県を代表する弥生時代の集落遺跡である。まずは、その内容について紹介したい。

(1) 八日市地方遺跡^{*4}

調査の沿革 昭和5年に発見され、昭和25年・昭和36年の発掘調査で櫛形文系土器の標識的な遺跡として周知されるようになった。近年は平成5年度から現在まで継続して大規模な発掘調査が行わ

れ、多くの成果が得られている。現在までに判明している遺跡の範囲はいくつかの情報を総合すると100,000㎡を超える面積が想定される*5。

地形と立地 小松市街地の東端部に位置し、梯川の下流部と、木場潟から日本海へ注ぐ前川に挟まれた平野部の微高地に立地する。かつては旧今江潟・柴山潟も含めた旧加賀三湖と梯川が合流して日本海へ連絡していたという(第2図1)。

遺跡の消長 遺跡そのものは縄文時代後期から弥生時代後期まで存続するが、遺構・遺物量から見て弥生時代～期が集落としてのピークで、期は墓域のみとなり、期に至ると完全に廃絶する(第1表)。

主要遺構 遺跡の中央に大規模な自然河川が存在し、平地式建物・掘立柱建物・方形周溝墓・井戸・溝・土坑等、現在までに確認されている多くの遺構はその両岸に高い密度で展開する。溝については遺構の集中域を囲んで画するように検出されたものがあり、環濠と推定されている(第3図)。

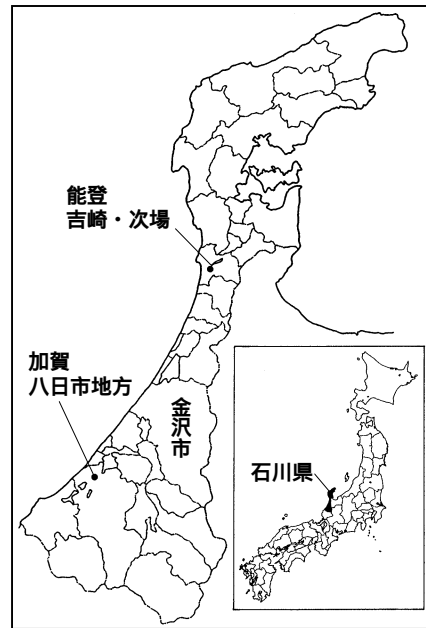
主要遺物 膨大な量が出土している。土器は期に遠賀川系土器、～期に櫛描文系土器といった、西日本系の弥生土器が波及・定着する過程を見ることができ、搬入品も確認できる。木器・木製品は農具から容器まで多種多様なものが出土しているが、未製品も同様に確認されており、盛んに生産されている(写真1・2)。玉についても、多くの製品・未製品(第4図)、工具等の出土から緑色凝灰岩製*6の管玉、翡翠製の勾玉が生産されている。また、銅鐸形土製品(第5図54)、分銅形土製品(同55～59)、鳥形土器、絵画土器(同53)、鳥形木製品・魚形木製品など、祭祀具については素材を問わず多く出土している。

周辺の遺跡 八日市地方遺跡に関係する水系は、同遺跡を中心として半径10km前後の範囲に及び、周辺の遺跡は至近の梯川流域、その支流の八丁川流域、同じく鍋谷川流域、旧加賀三湖の沿岸域*7の各群に分布を大別できる(第2図A～D)。～期の遺跡は、至近の梯川鉄橋遺跡(2)や、梯川流域では白江梯川遺跡(4)、鍋谷川流域では千代オオキダ遺跡(12)や牛島ウハシ遺跡(17)、旧加賀三湖沿岸域では柴山出村遺跡(28)がある。八日市地方遺跡に比べるとときわめて小規模で、遺構・遺物が少ないのが特徴的である。期には八丁川流域で銭畑遺跡(20)、鍋谷川流域で大長野A遺跡(15)、旧加賀三湖沿岸域で猫橋遺跡(30)などが確認され、期には八丁川流域で松梨遺跡(21)、鍋谷川流域で一針B遺跡(14)、梯川流域で平面梯川遺跡(3)、旧加賀三湖沿岸域で弓波遺跡(31)が確認される。

～期に至ると八丁川水系で高堂遺跡(22)、鍋谷川流域で千代・能美遺跡(13)、梯川流域で漆町遺跡(5)などが確認される(第1表)。期以降の遺跡は複数の建物を含む定量の遺構・遺物を伴っている。また、複数の水系に分かれたブロックを形成して分布し、新しい時期ほど水系のより上流に位置する傾向が顕著である*8。

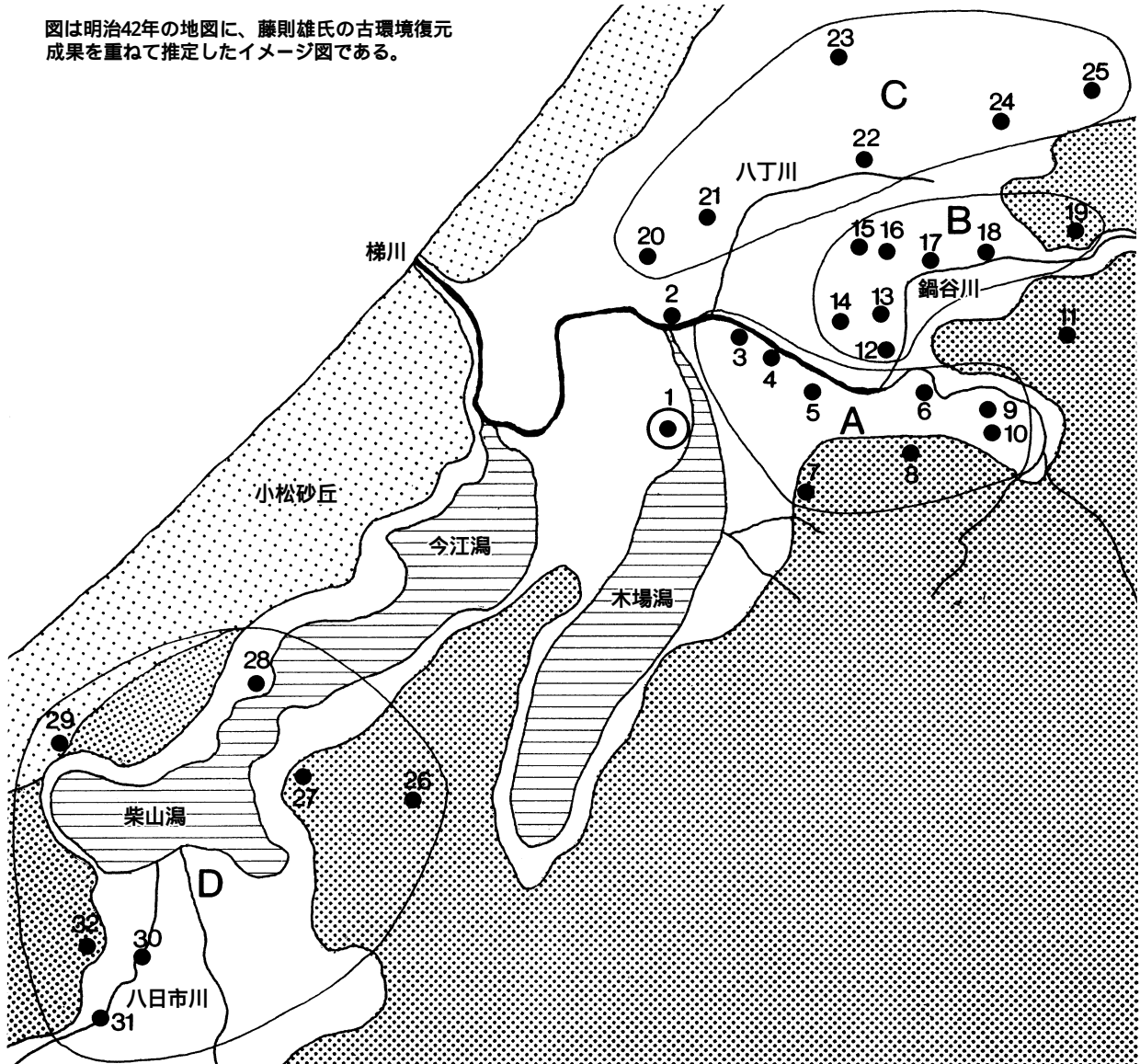
(2) 吉崎・次場遺跡*9

調査の沿革 昭和27年の発見以降、様々な原因で現在までに18次に及ぶ発掘調査が実施され(第7図) 県下の弥生文化研究に多くの資料を提供してきた。その間、昭和58年には国指定史跡となり、平成11年には復元家屋を含む吉崎・次場弥生公園としての史跡整備が完成している。遺跡の範囲は200,000㎡近くの面積が推定されている。



第1図 遺跡の位置
(S = 1 / 2,000,000)

図は明治42年の地図に、藤則雄氏の古環境復元成果を重ねて推定したイメージ図である。

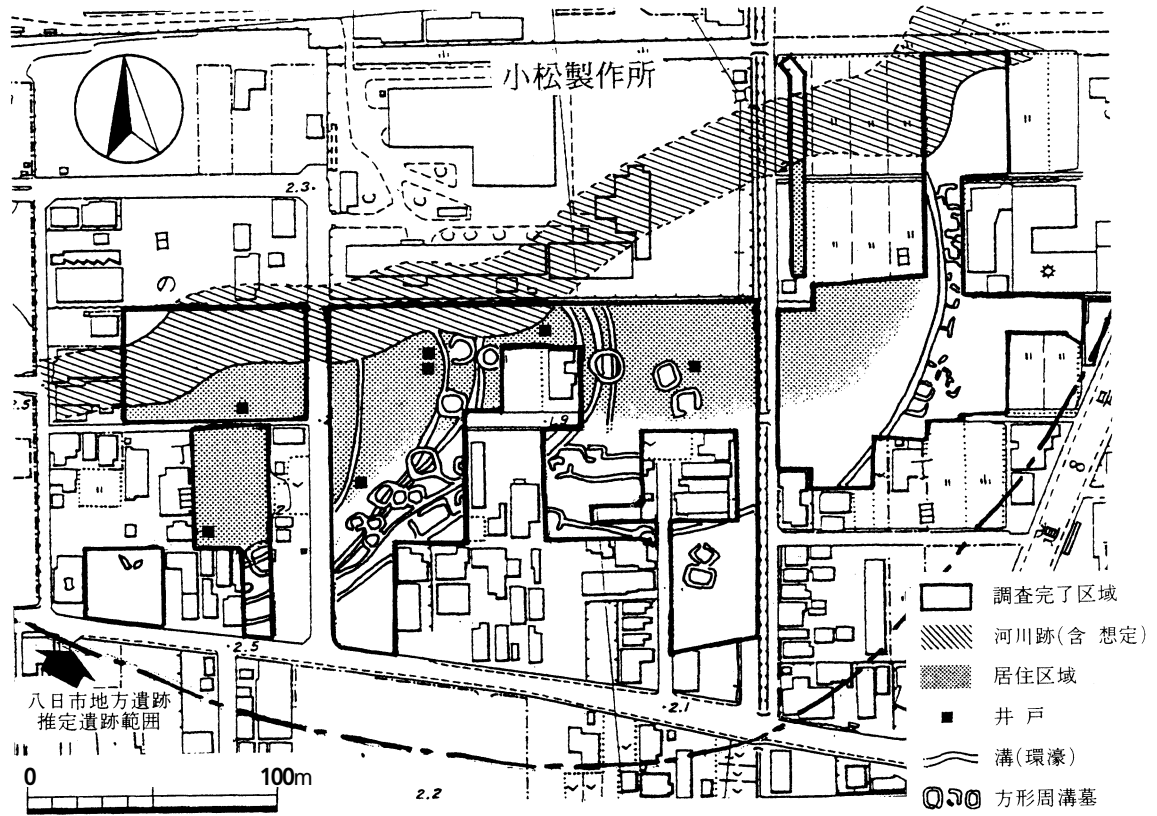


第2図 南加賀 八日市地方遺跡とその周辺 (S = 1 / 100,000)

群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
—	1	八日市地方	—	—	—	—	—	—	—
—	2	梯川鉄橋	—	—	—	—	—	—	—
A 梯 川	3	平面梯川	—	—	—	—	—	—	—
	4	白江梯川	—	—	—	—	—	—	—
	5	漆町 (群)	—	—	—	—	—	—	—
	6	佐々木アサバタケ	—	—	—	—	—	—	—
	7	吉竹	—	—	—	—	—	—	—
	8	八幡	—	—	—	—	—	—	—
	9	荒木田	—	—	—	—	—	—	—
	10	軽海西芳寺	—	—	—	—	—	—	—
	—	11	河田山	—	—	—	—	—	—
	B 鍋 谷 川	12	千代オオキダ	—	—	—	—	—	—
13		千代・能美	—	—	—	—	—	—	—
14		一針B	—	—	—	—	—	—	—
15		大長野A	—	—	—	—	—	—	—
16		千代デジロA	—	—	—	—	—	—	—
C 八 丁 川 D 旧 加 賀 三 湖	17	牛島ウハシ	—	—	—	—	—	—	—
	18	佐野A	—	—	—	—	—	—	—
	19	八里向山 (群)	—	—	—	—	—	—	—
	20	銭畑	—	—	—	—	—	—	—
	21	松梨	—	—	—	—	—	—	—
	22	高堂	—	—	—	—	—	—	—
	23	中庄	—	—	—	—	—	—	—
	24	和田山下	—	—	—	—	—	—	—
	25	高座	—	—	—	—	—	—	—
	26	念仏林南	—	—	—	—	—	—	—
	27	額見町西	—	—	—	—	—	—	—
	28	柴山出村	—	—	—	—	—	—	—
	29	新堀川	—	—	—	—	—	—	—
	30	猫橋	—	—	—	—	—	—	—
	31	弓波	—	—	—	—	—	—	—
	32	片山津玉造	—	—	—	—	—	—	—

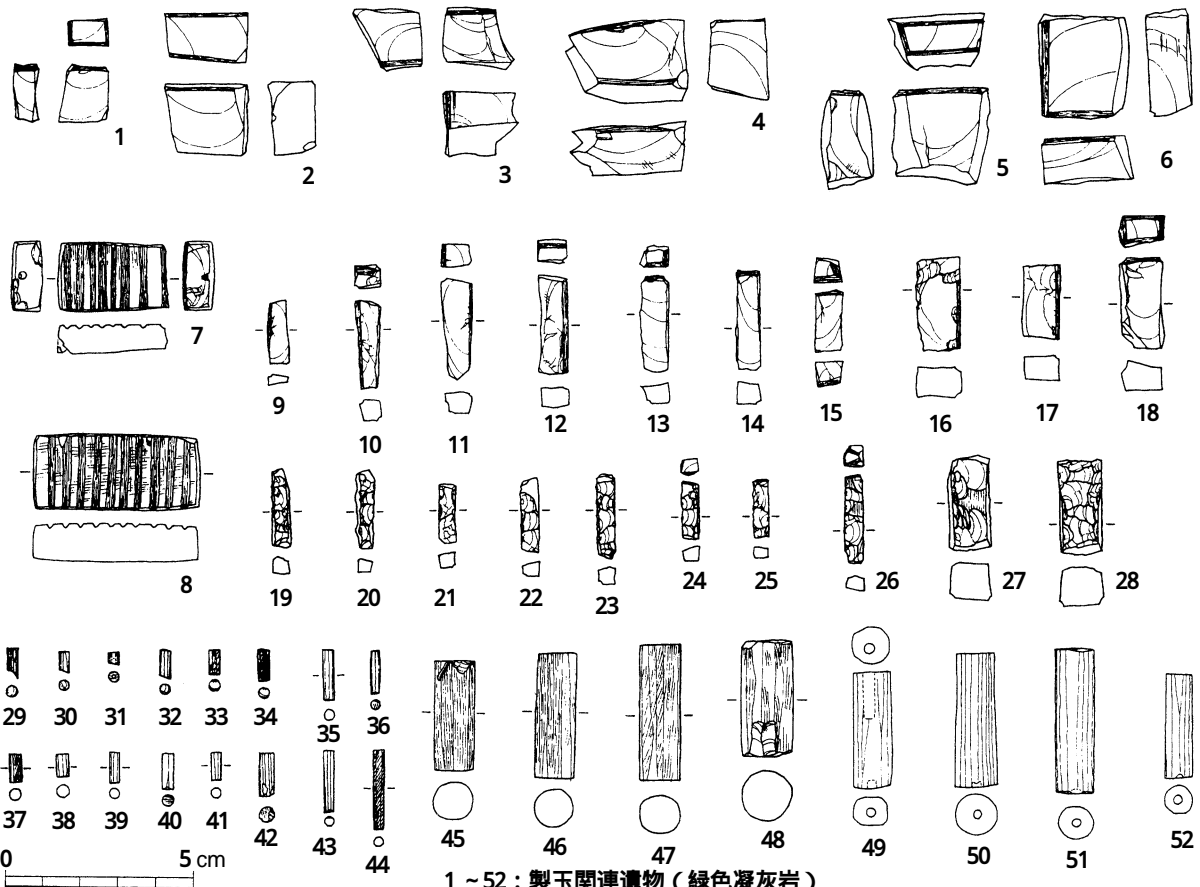
第1表 南加賀 主要遺跡消長表

太線：遺構 or 遺物多 細線：少



第3図 八日市地方遺跡の発掘調査状況 (S = 1 / 3,000)

小松市教委調査分のみ



1 ~ 52 : 製玉関連遺物 (綠色凝灰岩)

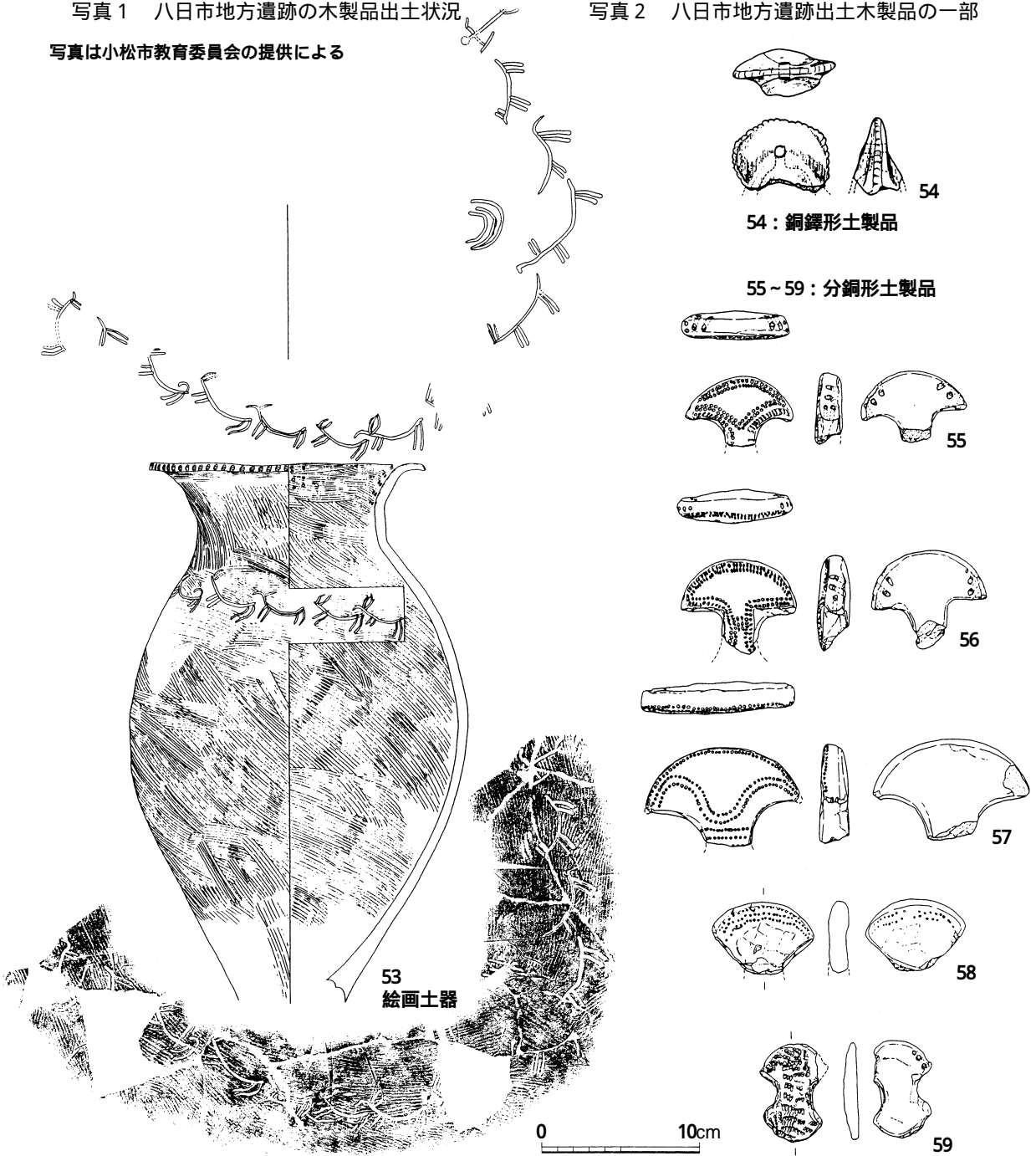
第4図 八日市地方遺跡出土遺物 (S = 1 / 2)



写真1 八日市地方遺跡の木製品出土状況
写真は小松市教育委員会の提供による



写真2 八日市地方遺跡出土木製品の一部



第5図 八日市地方遺跡出土遺物 (S=1/4)

地形と立地 羽咋市街地から北東に約2 km離れた平野部に位置する。子浦川と、邑知潟から日本海へ流れる羽咋川に挟まれた平野部の微高地に立地する。かつての邑知潟は広大な潟湖であり、眉丈台地裾部から日本海へ連絡していたという(第6図1)。

遺跡の消長 遺跡そのものは弥生時代前期から古墳時代前期まで存続するが、中心となるのは ~ 期であり最も広域に遺物が分布する。遺構・遺物は 期には不明確になり、 期以降また見られるが、 期後半以降は中心地点を南へ変えており、規模も小さくなっているようである(第2表)。

主要遺構 平地式建物・掘立柱建物・溝・土坑等が現在までに確認されており、土坑には木棺墓と推定できる木質が遺存する遺構が含まれる。溝については建物等の遺構が集中するエリアを直線的に区画するように走る大溝が検出されている(第8図)。

主要遺物 多量に出土している。土器は 期に遠賀川系土器、 ~ 期に櫛描文系土器といった、西日本系の弥生土器が波及・定着する過程を見ることができ、搬入品も確認できる。石器では太形蛤刃石斧の未製品(第10図39~43)が多量に出土している。加えて柱状片刃石斧未製品の出土例(同44)^{*10}もあり、大陸系石器の生産が確認できる。玉についても緑色凝灰岩製の管玉、翡翠製の勾玉の生産が確認できる(第9図)。また、金属器については ~ 期に鉄斧(第9図38)^{*11}、 期以降には銅鐸の鑄型外枠と推定される土製品(第11図54・55)^{*12}や銅鏡が出土している。祭祀具については銅鐸形土製品(第11図64)、分銅形土製品(同65~67)、絵画土器などが出土している。

周辺の遺跡 吉崎・次場遺跡に関する水系は、同遺跡を中心として半径10km前後の範囲に及び、周辺の遺跡は子浦川流域、眉丈台地(羽咋砂丘北部も含む)、邑知地溝帯^{*13}の各群に分布を大別できる(第6図A~C)。 ~ 期はきわめて希薄な分布を示すが、 ~ 期は、眉丈台地で柴垣須田遺跡(10)、邑知地溝帯で杉谷チャノバタケ遺跡(13)や徳丸遺跡(14)、久江ツカノコシ遺跡(19)などが確認される。 期には子浦川流域で太田ニシカワダ遺跡(2)、二口かみあれた遺跡(3)、荻市遺跡(5)、眉丈台地で寺家遺跡(8)、柳田うわの遺跡(9)、邑知地溝帯で藤井サンジョガリ遺跡(17)、久江ツカノコシ遺跡などが確認される。 ~ 期に至ると子浦川流域で太田ニシカワダ遺跡、二口かみあれた遺跡、眉丈台地で滝谷八幡社遺跡(11)、邑知地溝帯で谷内ブンガヤチ遺跡(12)、小田中おばたけ遺跡(18)、羽咋砂丘南部で粟生シモデ遺跡(6)などが確認される(第2表)。遺跡は 期以降増加し、水系の及ぶ範囲に複数のブロックを形成して展開する^{*14}。

3. 比較・検討

では、事例とした2つの遺跡について、集落を構成する上で重要と思われる要素を比較してみたい。ここで列記する要素は、前節で紹介した順に、地形と立地、遺跡の消長、主要遺構、主要遺物、周辺の遺跡である。ただし、両遺跡とも調査条件や整理・報告書の刊行状況等の諸制約から、必要な情報の全てを得ることが難しいので、現在判明している限りの状況をもとにした大まかな対比とする。

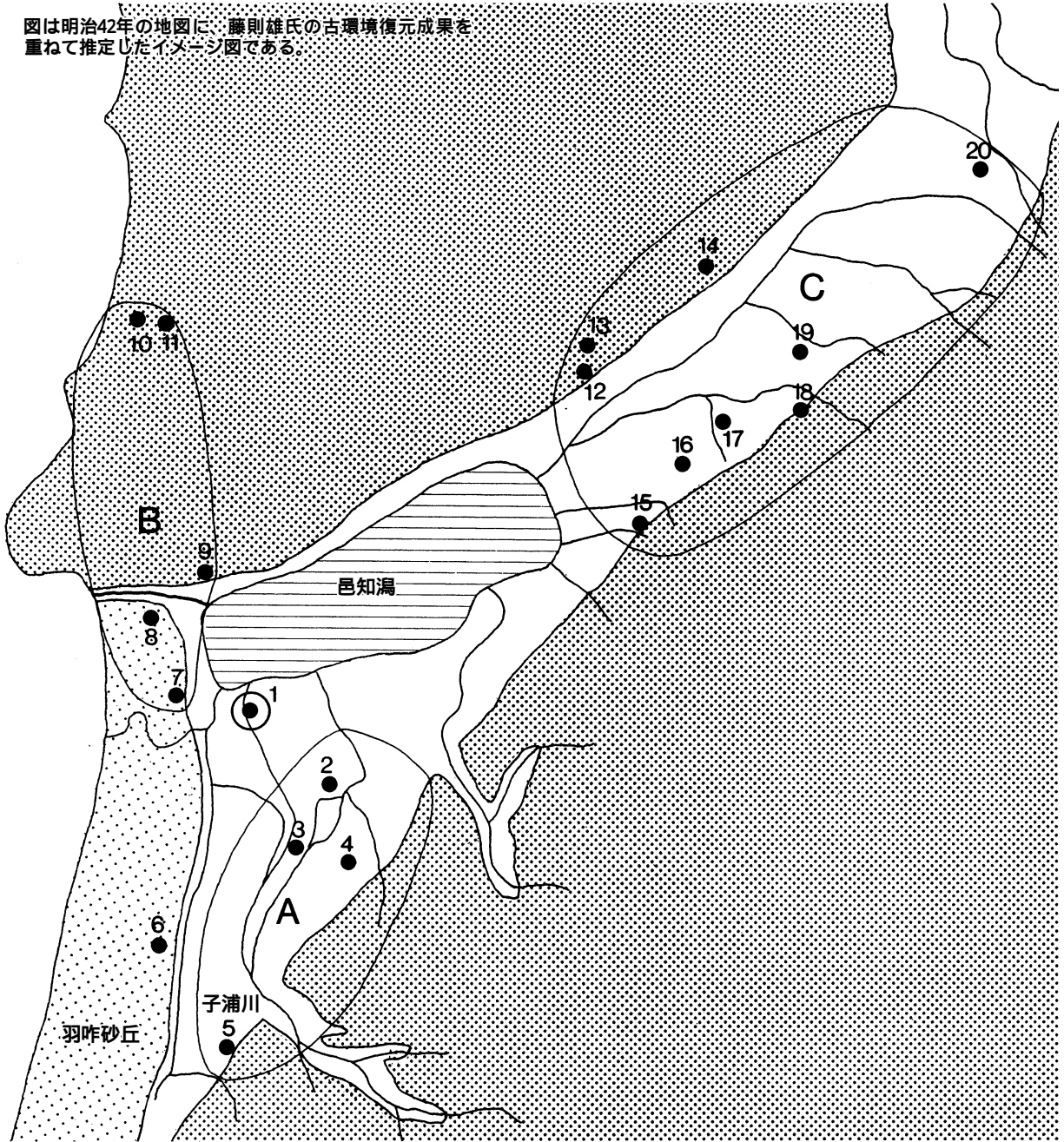
(1) 地形と立地

2つの遺跡は、水田に適した低湿地に位置しながら、その中で安定した微高地を選択して遺跡が営まれていることは、弥生時代の集落に必要な条件を満たしている。そしてさらに重要なことは、潟湖と主要河川の合流点に近接する平野部の微高地に立地し、その下流はすぐに河口となり日本海に面するという環境において、全く共通する点である。この位置は日本海、河口、潟湖、河川諸水系といった水上交通網の結節する地点であり、地域の内外を問わず交通の要衝と言えよう^{*15}。

(2) 遺跡の消長

期は2遺跡とも遠賀川系土器の出土に見るように、西日本から弥生文化の情報が伝わってきてお

図は明治42年の地図に、藤則雄氏の古環境復元成果を重ねて推定したイメージ図である。



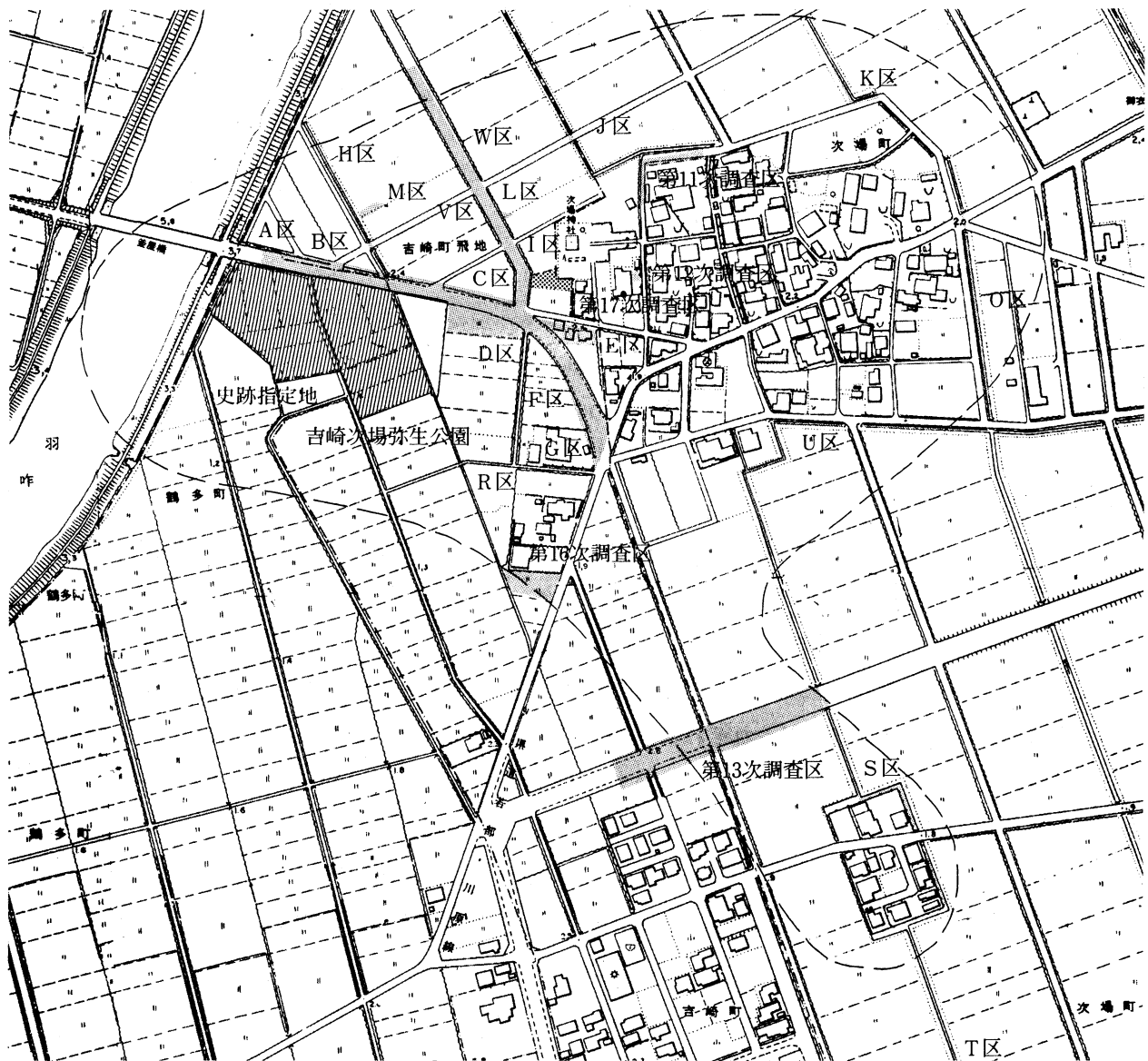
第6図 南能登 吉崎・次場遺跡とその周辺 (S = 1 / 100,000)

群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
—	1	吉崎・次場	—	—	—	—	—	—	—
A	2	太田ニシカワダ					—	—	—
子	3	二口かみあれた					—	—	—
浦	4	杉野屋ろくばわり					—	—	—
川	5	菰市					—	—	—
—	6	粟生シモデ					—	—	—
B	7	釜屋					—	—	—
眉	8	寺家					—	—	—
丈	9	柳田うわの					—	—	—
台	10	柴垣須田					—	—	—

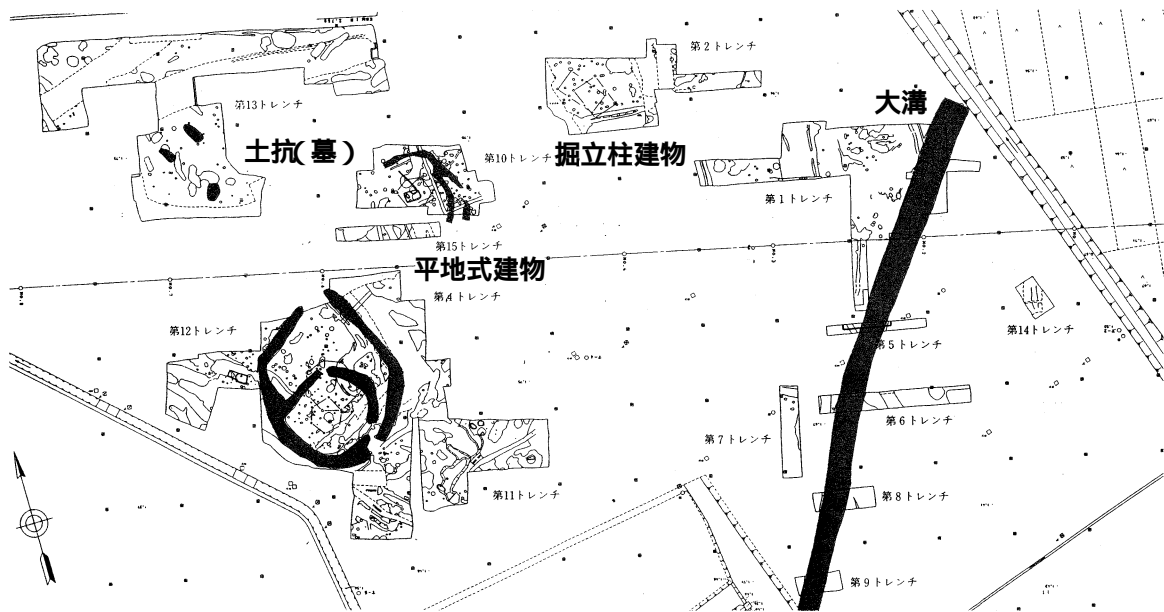
群	No.	遺跡名	I	II	III	IV	V	VI	VII
B	11	滝谷八幡社							
	12	谷内ブンガヤチ					—	—	—
C	13	杉谷チャノバタケ				—	—	—	—
邑	14	徳丸				—	—	—	—
知	15	四柳白山下					—	—	—
地	16	曾祢C					—	—	—
溝	17	藤井サンジョガリ					—	—	—
帯	18	小田中おぼたけ					—	—	—
	19	久江ツカノコシ			—	—	—	—	—
	20	徳前C					—	—	—

第2表 南能登 主要遺跡消長表

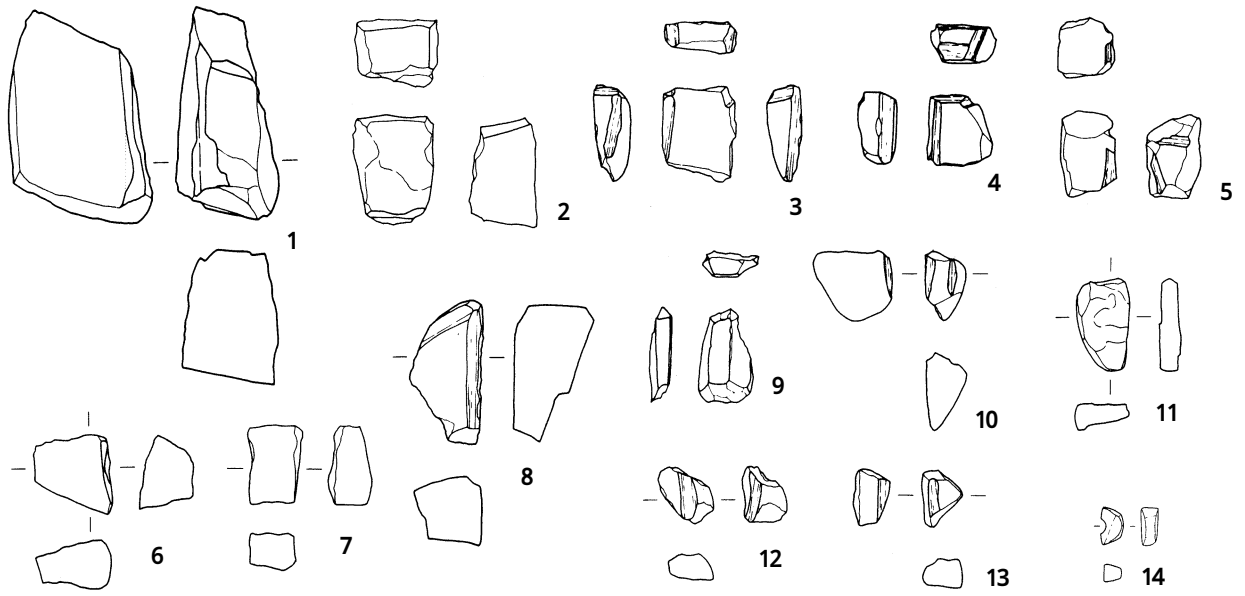
太線：遺構 or 遺物多 細線：少



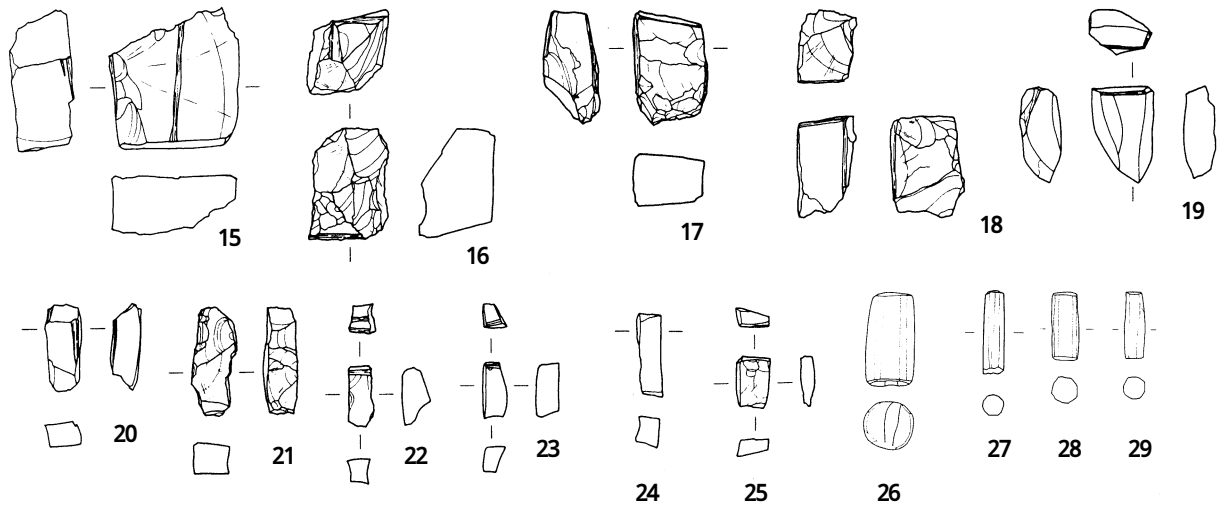
第7図 吉崎・次場遺跡の発掘調査状況 (S = 1 / 5,000)



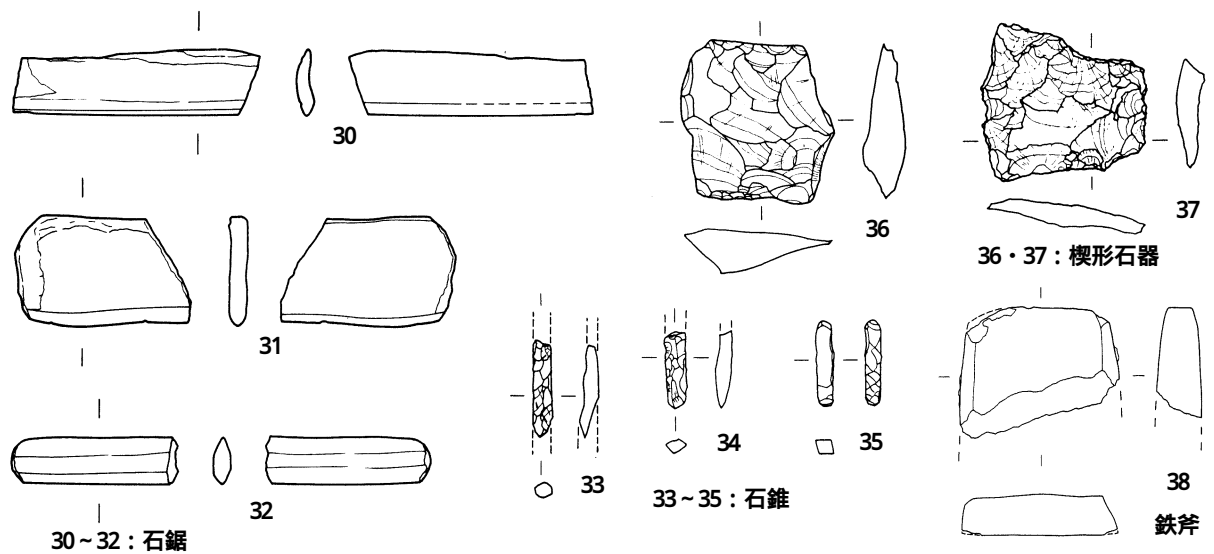
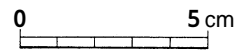
第8図 史跡指定地の発掘調査状況 (S = 1 / 1,000)



1 ~ 14 : 製玉関連遺物 (翡翠)



15 ~ 29 : 製玉関連遺物 (綠色凝灰岩)



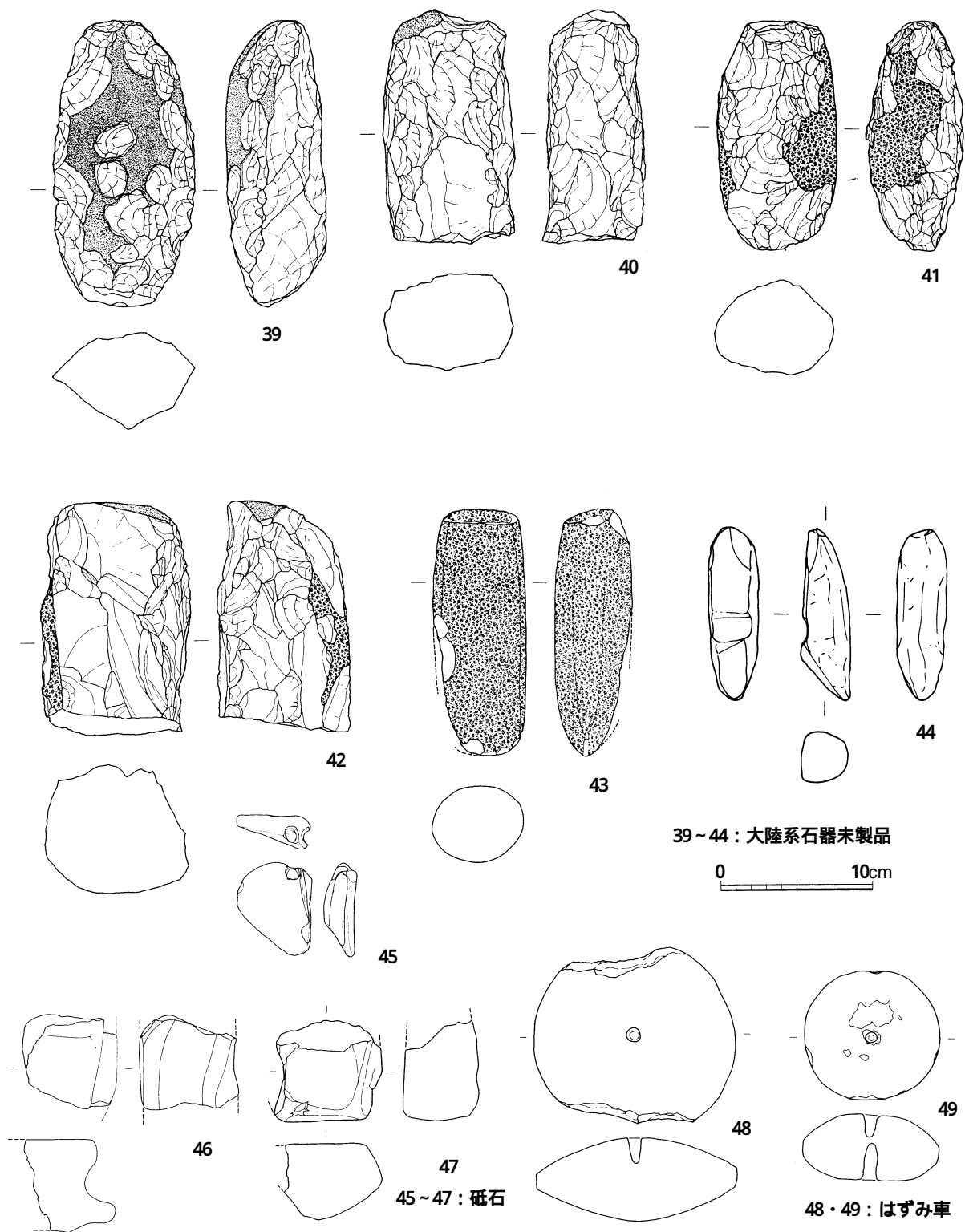
30 ~ 32 : 石鋸

33 ~ 35 : 石錐

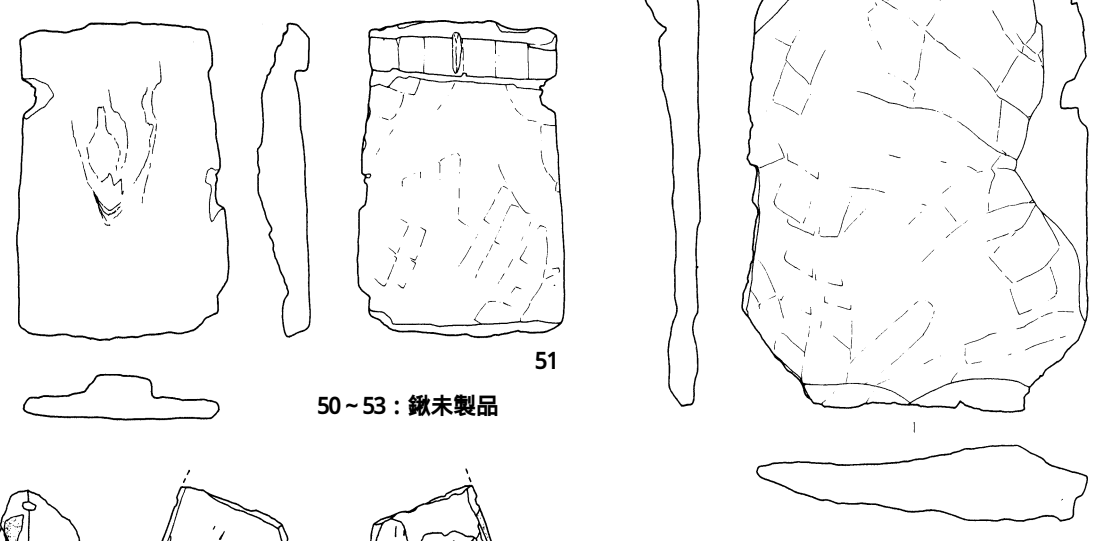
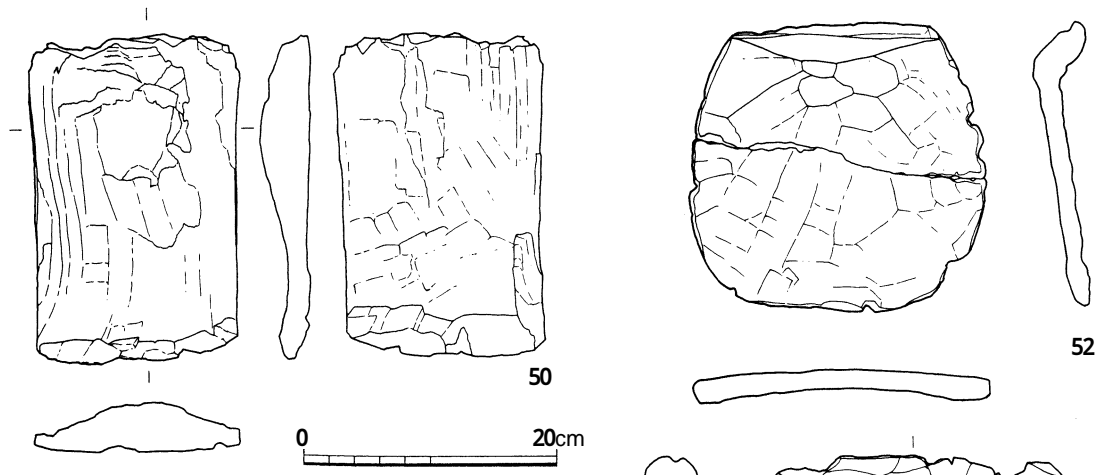
36 · 37 : 楔形石器

38
鉄斧

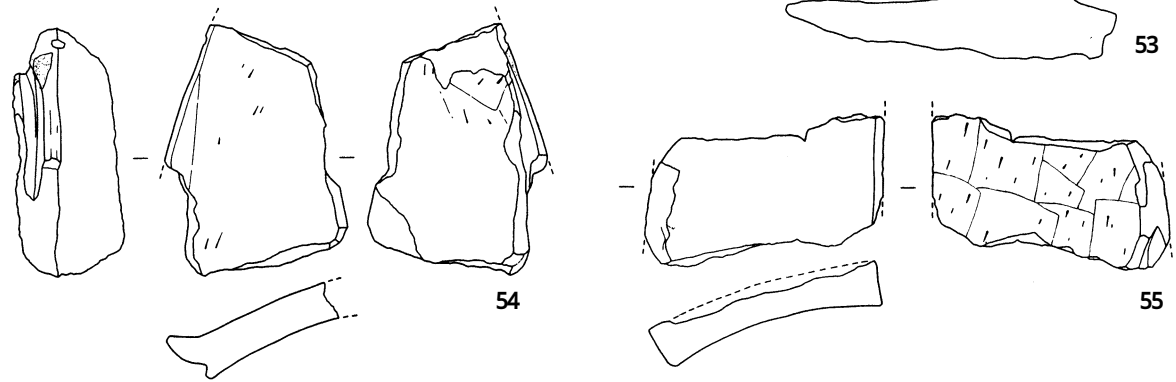
第9図 吉崎・次場遺跡出土遺物 (S=1/2)



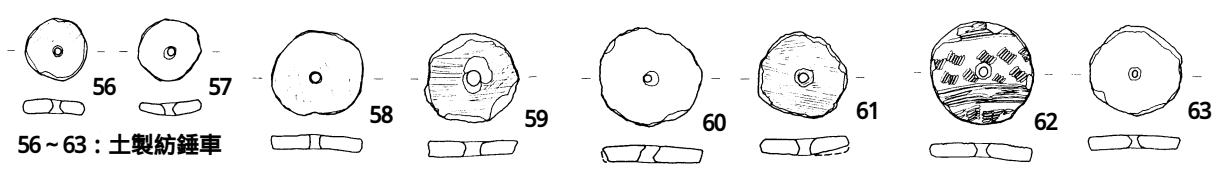
第10図 吉崎・次場遺跡出土遺物 (S=1/4)



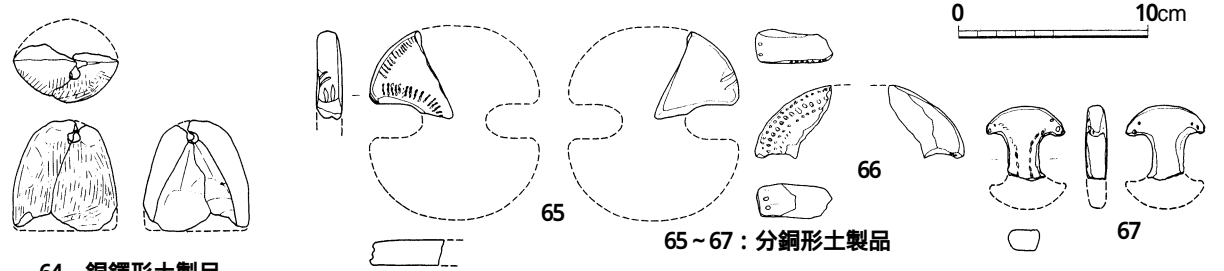
50~53 : 鐵末製品



54・55 : 土製鑄型外枠



56~63 : 土製紡錘車



65~67 : 分銅形土製品

64 銅鐸形土製品

第11図 吉崎・次場遺跡出土遺物 (木製 : S = 1 / 6、土製 : S = 1 / 4)

り、集落の成立が予想されるが、遺構の形成は顕著ではない。～期は、2つの遺跡ともに集落のピーク期となる。期以降は一見すると異なった営みが見られる。すなわち八日市地方遺跡は方形周溝墓群の活発な造営や居住域の消失が起き、期を迎えるとすぐに廃絶する。吉崎・次場遺跡では遺構・遺物が希薄化するが、後期にはまた遺構・遺物が確認され、古墳時代前期の期まで存続するが、規模が小さくなり、中心となる地点を南へ変化させている。また、(5)でふれるが、2遺跡ともに周辺に新たな集落が出現している。このように一方は廃絶、もう一方は移動・縮小と、様相は異なるが、視点を変えるならば集落構造の変化、中心的な居住域の廃絶・移動という点では一致した動向と考えている。

(3) 主要遺構

八日市地方遺跡では報告されていない遺構が多く、吉崎・次場遺跡では未調査部分が多いことから、詳しい時期や配置を明らかにすることはできない。ただし、2遺跡ともに～期には居住域と墓域、そして区画を意図した幅広の溝を見ることができる。建物遺構では居住域に平地式建物や掘立柱建物が作られ、墓は方形周溝墓ないし木棺を用いた土坑墓が採用されて遺跡内に墓域を形成していることもほぼ共通しよう。

(4) 主要遺物

2遺跡とも多量・多様である。弥生土器については、遠賀川系土器と櫛描文系土器といった西日本系の土器が確実に波及・定着し、さらに搬入品も見られるなど、活発な交流がうかがわれる^{*16}。祭祀具については、分銅形土製品、銅鐸形土製品など西日本に多い^{*17}形態のものが複数出土することに特徴がある。また、生産が認められる遺物は、八日市地方遺跡は木製品と玉製品、吉崎・次場遺跡は大陸系石器と玉製品が代表的なものであり、方向性はやや異なるが、物資の生産力が高い遺跡として評価できる。同時に、原料等を遺跡外から遠隔地・近郊地^{*18}を問わず確保し集積する機能も高かったものと予想される。また、1遺跡で消費されるであろう製品の量を遙かに超える多量の未製品が出土することから、周辺の集落あるいは地域外への供給も想定できる。

(5) 周辺の遺跡

2つの遺跡とも、集落のピーク期である～期では周辺に遺跡は少なくかつ小規模で、水系が及ぶエリア内に点在する状況である。そして期以降、2つの遺跡の衰微に呼応するように、新たに遺跡が出現する。新たに出現した遺跡は、規模で2つの遺跡を超えることは希であるが、水系を単位とするような複数の小地域でほぼ同時期に出現し、それぞれが遺跡群を形成する。遺跡の中には生産や祭祀、他地域との交流といった面で卓越した集落を見ることができる^{*19}。以降はこの群構成が基本となった消長が期まで繰り返されるようである。2つの地域において、中心的な集落の変質・解体と周辺への移動・分散がやや異なったプロセスで進行することが想定される様相と言えよう。

4. 拠点集落の素描

(1) 共通する特徴

前節での比較から、2つの遺跡には種々の様相差があるが、共通する特徴も多く認めることができる。それらは以下の～のようにまとめることができよう。

地域の低地・平野部において、潟湖と主要河川が結節し、日本海へと流出する地点という交通の要衝において、安定した地勢を選択して立地する。

弥生時代の前期から中期にかけてきわめて継続性が高く、中期前半に遺構・遺物の質・量がピークに達するが、中期後半に変質し、縮小・廃絶に向かい、周辺へ移動・分散する。

遺跡の範囲は100,000m²を超えており、周辺の遺跡よりも格段に大規模である。

遺構は居住域・墓域の構成が認められ、集中域を区画する機能が付与された溝を有する。

遺物の量はきわめて多く、中でも弥生土器は遠賀川系土器の波及以降、西日本からの情報を強く受容し、櫛形文系土器を定着させている。

多量・多様な祭祀具が出土し、西日本的な祭式が卓越する状況を示す。

遺跡内で土・石・木などを素材とする製品の生産力が高い。おそらくは原材料を遺跡外から獲得・集積し、完成品は遺跡外へ供給するといった生産・流通機能が備わっていたと想定される。

(2) 成立・発展・変質・解体のモデル

前掲した特徴は密接に関連しあって、地域に独特の存在感を放つ遺跡を形成している。ここでは遺跡の成立から解体までのプロセスに、周辺遺跡の動向を絡めて地域のモデルを提示してみたい。

～ 期(成立・発展)

まず、～ 期に遠賀川系土器を含む西日本からの情報が伝播し、海・川が結節する交通の要衝で、低地の農耕・居住適地に集落が成立する。

次いで、～ 期に集落は発展して規模を拡大し、遺跡内に居住域・墓域を備え、区画目的を持つ溝を設ける。そして物資を大量に生産・消費し、祭祀を執行する。この間も西日本からの情報は間断なく伝わっている。集落には地域内・地域外の情報を受信し、発信する機能も備わっており、地域内へは水系で結ばれたネットワークを介して伝達され、地域外へはやはり同様な機能を有する集落を介して伝達される。このように実に多くの機能が集約された集落は、地域において周辺の集落に対して強い影響力を誇り^{*20}、技術から祭祀に至るまでの文化要素を主導したことが考えられ、集落そのものが地域の首長的な存在となっている(第12図)。

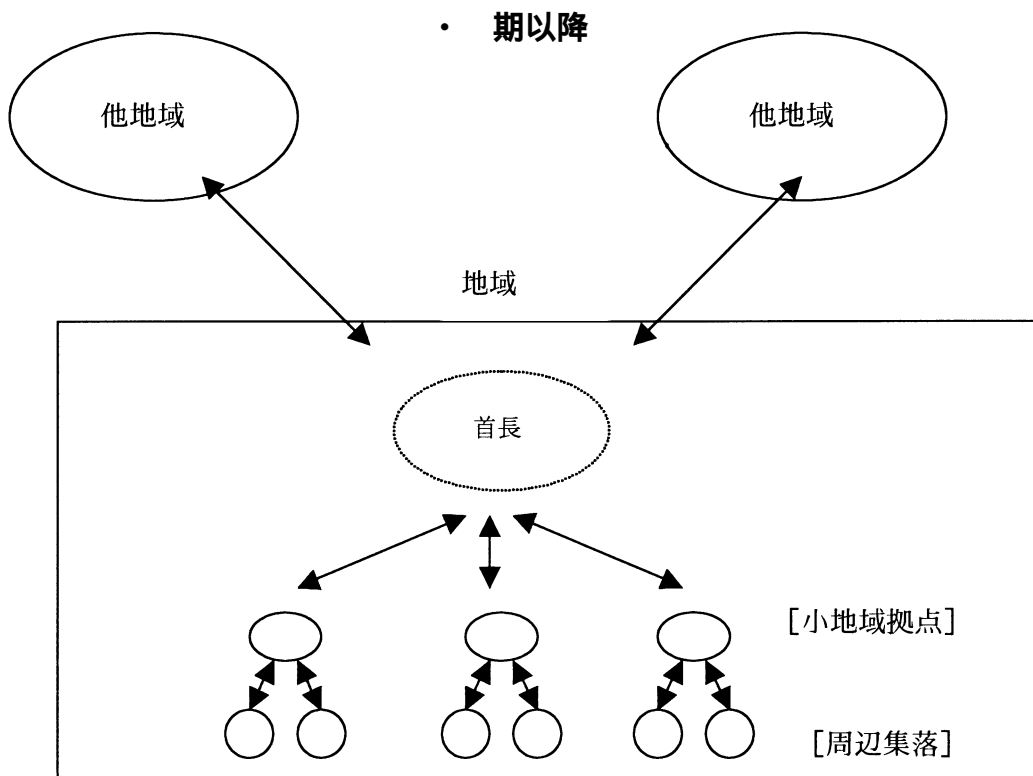
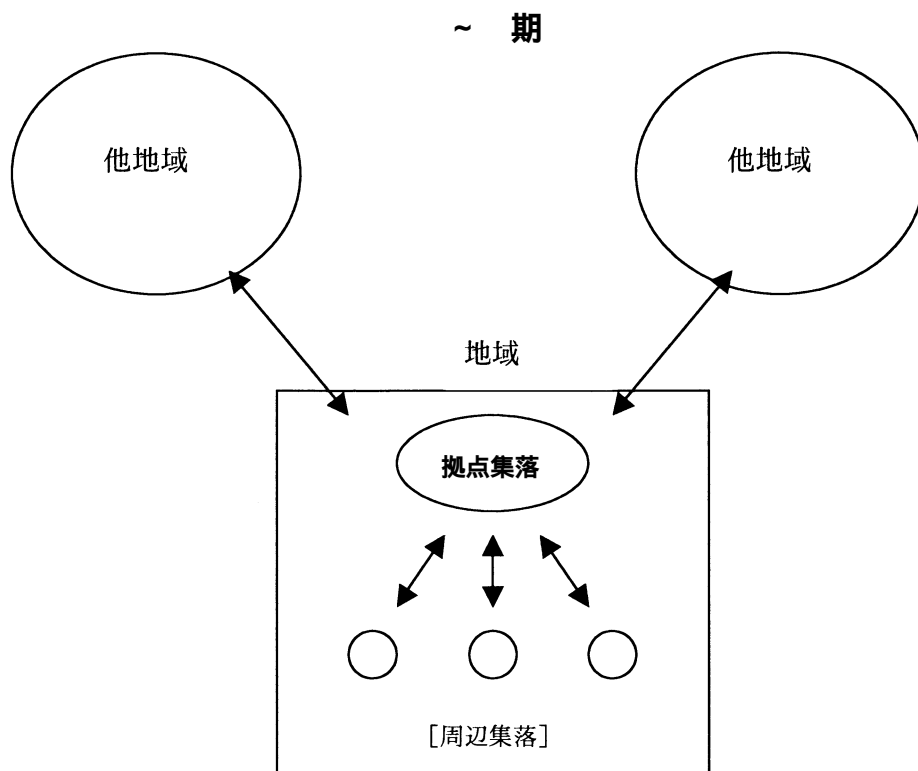
・ 期以降(変質・解体)

～ 期に集落は衰微し解体に向かうが、呼応するように近隣に新しく集落が出現し、水系の上流側へ向かって移動・分散する。この段階以降、集落数は増加に転じ、水系を基盤とする小地域毎の集落群が本格的に成立し^{*21}、～ 期まで基本的な群構成が保持される。移動・分散した集落の様相を見る限り、小地域の拠点的存在感を有するものがあり、解体した集落の機能は分化しつつもある程度は継承されているようである。地域全体としては、～ 期に形成されたネットワークを骨格としつつ、新たな集落群によって再構成された社会が展開していくのであろう^{*22}。この段階においては多数の集落群を統べる階層の存在が想定され、それが地域首長と考えられる。本論でその実像を提示することは難しいが、母体は～ 期に発展した集落内部に求められよう(第12図)。

以上のように、2つの遺跡が北陸への弥生文化の定着に果たした役割と、それ以降の社会へ及ぼした影響はきわめて大きい。ここにあらためて八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡を北陸における弥生時代の「拠点」として評価し、「拠点集落」という名称を冠することを提唱したいのである。

5. 結 語

本論では「拠点集落」の意味するものに端を発して、北陸地方の代表的な弥生時代の遺跡である八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡の対比から、あらためて当地域の拠点集落像を素描し、成立から解体までのプロセスを地域社会の中で位置付ける試みを行った。その結果、弥生時代の前半期にきわめて多くの機能を集約した集落が地域を主導し、後半期には解体・分散することによって複数の小地域で以降に展開する集落群の核を形成する、という北陸における地域社会の重要な動態を抽出し得た。そして、既に検討が進んでいる東西日本のいくつかの地域と対比した際に、共通する点、相違する点が



第12図 加賀・能登における弥生時代の地域モデル 矢印はヒト・モノ・情報の動き

認識できる程度には地域像を把握できるようになり^{*23}、冒頭で述べた目的に対しては一応の帰結を見たものと感じている。しかし、未公表資料も含めて不確定な要素が多く、今後に多くの課題を残していることから、ここに整理して記すことで結びとしたい。

まず、2つの遺跡それぞれの様相がより具体的に明らかにされることを前提として、本論で対比した各要素の再検討が必要である。次いで、遺跡間で一致しなかった特徴にも注目したい。たとえば集落構造や墓制、生産物、周辺の集落も絡めた消長などの違い等は拠点集落間でも性格差が存在する可能性が高いことを示唆し、それぞれの方向性を特定していく鍵を握る重要な様相と感じている^{*24}。その上で、拠点集落の領域、周辺集落との関係、拠点集落間との関係、他地域との交流、成立から解体に至るまでの社会的背景等についてあらためて追求する必要がある。

以上のように、本論の内容は不完全なものであるが、結果として北陸における弥生時代の集落・地域・社会の構造論的研究に踏み込んだものとなっている。この内容が適切であるかどうかについては識者の評価を待ちたいが、「拠点集落」という視点は、弥生時代の地域・社会の実態を明らかにするためには欠かせないものと考えている。曖昧な定義の用語を使用し、集落規模・構造・遺構・遺物を単純に比較するだけの研究では、地域の動態を把握することは至難であろう。もちろん、本論で抽出した様相が、列島各地で普遍的である必然性はないし、北陸地方においてさえ一様ではない可能性もある。おそらく、拠点集落の有無も含めて各地で異なった様相が存在し、多様な拠点集落を介して弥生文化が地域にレベル差をもって受容される在り方こそが普遍的なのであって、それが弥生時代の地域社会に強く反映されているのではないだろうか。今後もこの視座に立ちつつ、弥生文化の本質とは何かを問いかけていきたい。その答えを得ることが、本論も含めた私の研究で、究極の目標である。

本論は1998年6月21日に石川考古学研究会の総会で発表した内容を骨子として、最新の調査成果を加えて構成し直したものである。起草から成稿に至るまでには櫻田 誠、林 大智の視点に強く啓発され^{*25}、多くの教示も得ている。また、羽咋市教育委員会からは調査事例について情報の提供を受け、小松市教育委員会からは掲載写真の提供を受けた。文末となったが、記して深く感謝したい。

注

- * 1 田中義昭1984「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会
同1996「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護 甘粕 健先生退官記念論集』甘粕 健先生退官記念論集刊行会
- * 2 酒井龍一1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財學報』第三集 奈良大学文学部文化財学科
同1987「瀬戸内海北岸における弥生セトルメントシステム」『文化財學報』第五集 奈良大学文学部文化財学科
- * 3 安 英樹1990「北陸における第 Ⅰ 様式の弥生土器」『石川考古学研究会々誌』第33号
- * 4 八日市地方遺跡の内容については、主に下記の文献による。
橋本正博・宮田 明・福海貴子1999「石川県八日市地方遺跡」『邪馬台国時代の国々』（『季刊考古学』別冊9）雄山閣
石川県立埋蔵文化財センター「2（1）発掘調査事業 八日市地方遺跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』第19号
財団法人石川県埋蔵文化財センター「八日市地方遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号

藤 則雄1997「小松市八日市地方遺跡の花粉分析に基づく古環境解析」『金沢大学教育学部紀要(自然科学編)』
第46号

- * 5 * 4で小松市教育委員会が把握している自然河川左岸域の面積約80,000㎡に、石川県立埋蔵文化財センター及び財団法人石川県埋蔵文化財センターが調査した右岸域の潜在的な面積を加えると、おおよそ100,000㎡を超えるものと推定できる。
 - * 6 玉のうち、緑色系管玉の素材については緑色凝灰岩と碧玉という二つの名称があり、あたかも別の種類のようなものであるが、その定義は曖昧で、岩石学上も大差ない。よって、本論では緑色凝灰岩に名称を統一する。
 - * 7 今回は詳しくふれないが、旧加賀三湖沿岸の遺跡群については、北西岸(柴山台地～小松砂丘)、東岸(月津台地)、南岸(八日市川流域)など、さらに細別が可能と考えている。
 - * 8 八日市地方遺跡周辺の遺跡については、下記の文献による。
 - 石川県教育委員会1978『辰口町・高座遺跡発掘調査報告』
 - 同1992『石川県遺跡地図』
 - 石川県立埋蔵文化財センター1986『漆町遺跡』
 - 同1988a『漆町遺跡』
 - 同1988b『白江梯川遺跡』
 - 同1989『白江梯川遺跡』
 - 同1990『小松市高堂遺跡』
 - 同1992『千代』
 - 同1995a『荒木田遺跡』
 - 同1995b『寺井町千代デジロA遺跡・大長野A遺跡』
 - 同1995c『寺井町佐野A遺跡』
 - 同1997『猫橋遺跡』
 - 同1998a『軽海西芳寺遺跡』
 - 同1998b『猫橋遺跡』
 - 加賀市教育委員会1993『猫橋遺跡』
 - 小松市教育委員会1965『小松市史』(4)風土・民俗篇
 - 同1992『銭畑遺跡』
 - 同1993『銭畑遺跡』
 - 同1994『松梨遺跡』
 - 同1995『念仏林南遺跡』
 - 同1996『荒木田遺跡』
 - 財団法人石川県埋蔵文化財センター2000a『小松市平面梯川遺跡 第2・3次発掘調査報告書』
 - 同2000b『小松市額見町西遺跡』
 - 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1995『平面梯川遺跡』
 - 同1998『八幡遺跡』
 - 寺井町教育委員会1987『和田山下遺跡』
 - 同1999a『佐野A遺跡』
 - 同1999b『牛島ウハシ遺跡』
 - 根上町教育委員会1984『根上町中庄遺跡』
- なお、一針B遺跡、千代・能美遺跡は2000年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した遺跡である。一針B遺跡では 期前半の大型竪穴建物から青銅器鋳型が出土しており、青銅器の生産機能を持つ集落であることが確認されている。千代・能美遺跡では ～ 期の建物群が溝や川によって居住・祭祀・生産といった機能が異なるエリアに区画されて検出されており、多量の木製品を出土した川や、川に設けられた橋梁状遺構・導水状遺構等の存在と併せて首長居館を含む集落遺跡の可能性が指摘されている(現地説明会資料から)。
- * 9 吉崎・次場遺跡の内容については、主に下記の文献による。
 - 今井淳一2000『石川県羽咋市吉崎・次場遺跡』『月刊考古学ジャーナル』 458 ニュー・サイエンス社
 - 羽咋市教育委員会1999『史跡 吉崎・次場遺跡整備事業報告書』

石川県立埋蔵文化財センター1987『吉崎・次場遺跡』資料編(1)

同1988『吉崎・次場遺跡』資料編(2)

*10 羽咋市教育委員会2000『羽咋市内遺跡発掘調査報告 - 住宅建設にともなう吉崎・次場遺跡第17次発掘調査報告書 - 』

*11 今井淳一・林 大智1999「吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 財団法人石川県埋蔵文化財センター

*12 林 大智2000「羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について」『石川県埋蔵文化財情報』第3号 財団法人石川県埋蔵文化財センター

*13 ここでいう邑知地溝帯は、邑知地溝帯全体の南西半部分に相当する。今回は詳しくふれないが、遺跡の分布は邑知潟の北西岸となる眉丈山系の山麓、南東岸となる石動山系の山麓に明瞭に区分できる。また、羽咋砂丘については、寺家遺跡などが立地する砂丘北部が眉丈台地の群から分離される可能性があり、粟生シモデ遺跡が立地する砂丘南部(長者川流域)も、発見されている遺跡数は少ないが、一つの群をなす可能性が高い。

*14 吉崎・次場遺跡周辺の遺跡については、下記の文献による。

石川県教育委員会1992『石川県遺跡地図』

石川県立埋蔵文化財センター1986『鹿島町徳前C遺跡(・)』

同1988『寺家遺跡発掘調査報告』

同1993『徳前C遺跡』

同1995『谷内・杉谷遺跡群』

財団法人石川県埋蔵文化財センター1999「小田中おばたけ遺跡」『鹿島町御祖遺跡群』

同2000a「久江ツカノコシ遺跡」『鹿島町久江遺跡群』

同2000b「徳丸遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号

志雄町教育委員会1988『杉野屋口クバワリ遺跡』

同1995『二口かみあれた遺跡』

同1999『二口かみあれた遺跡第2次』

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1994『藤井サンジョガリ遺跡 高畠テラダ遺跡 高畠カンジダ遺跡』

同1995『石川県鹿島郡鹿島町曾祿C遺跡』

同1998『石川県羽咋郡志雄町荻市遺跡』

羽咋市史編さん委員会1973『羽咋市史』原始・古代編

羽咋市教育委員会1986『柴垣須田遺跡』

同1991『太田遺跡』

同1993『寺家遺跡第10次調査報告書』

同1994『三ツ屋遺跡』

同1999『太田ニシカワダ遺跡』

なお、滝谷八幡社遺跡は1999・2000年度に羽咋市教育委員会が発掘調査を実施し、～期の竪穴建物22軒を検出した集落遺跡である。粟生シモデ遺跡は2000年度に羽咋市教育委員会が発掘調査を実施し、～期の円筒形土坑や周溝状遺構を検出し、翡翠原石等の製玉関係遺物や銅鏃が出土した集落遺跡である(現地説明会資料から)。

*15 ただし、全ての水系で水上交通が主流であったことを意味するものではない。水系沿いには河川の作用で形成される自然堤防、解析谷、河岸段丘等の地形が必然的に多くなることから、陸上交通も必然的に水系沿いに発達していく可能性も考えている。

*16 ただし、遠賀川系土器については、現状では吉崎・次場遺跡がより多量に見受けられることから、～期の段階ではやや情報量が多かったように感じられる。

*17 分銅形土製品と銅鐸形土製品の全国的な分布、および石川県下での分銅形土製品の評価については、下記の文献を参考にした。

角南聡一郎1993「祭祀土製品小考 - 亀井遺跡出土の分銅形土製品・新例 - 」『大阪文化財研究』第5号 財団法人大阪文化財センター

安 英樹・福海貴子2001「第4章第1節2 分銅形土製品」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 補遺編』石川県考古学研究会

- *18 例えば石器や玉の原材料については遺跡外からの入手が必要である。石鏝の原材料である紅麻石片岩や、勾玉の原材料となる翡翠原石などはかなり遠隔地からでないと入手できない。(藤 則雄1987「遺構・遺物 12 石器、玉類の石質とその分布地」『吉崎・次場遺跡』資料編(1) 石川県立埋蔵文化財センター)
- *19 例えば、南加賀では一針B遺跡、千代・能美遺跡、白江梯川遺跡など、南能登では滝谷八幡社遺跡、太田ニシカワダ遺跡などをあげることができよう。
- *20 こうした様相については、母村と分村という関係で捉えられるかもしれないが、厳密な意味では各遺跡を営んだ集団の出自まで検証が必要であり、現状では難しい。しかし、二つの遺跡が衰微する 期以降の様相は、よほど極端な人口の変化がない限り、明らかに分村化を示している。ただし、八日市地方遺跡のように分村化と同時に母村となる遺跡が消滅するパターンと、吉崎・次場遺跡のように母村と分村が地域に並立して展開するパターンが考えられる。なお、八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡を除いた ~ 期の遺跡については、小規模で遺構も明確でないことから、集落であるのかどうかという疑問も残る。本論では、時期を判別しうる遺物がある程度の量で出土している遺跡については、詳しい性格は不明ながら、人々が集った場所と見なし、集落として扱った。
- *21 北加賀では 期以降の特徴として明瞭であった(安 英樹1993「北陸南西部 1 集落の消長」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会)が、南加賀、南能登でもほぼ同様であることが今回確認されたと言えよう。ただし、北加賀では 期以前の集落、特に八日市地方遺跡や吉崎・次場遺跡に匹敵する集落が不明確であり、基本的に欠落している可能性もある。一方で金沢市西念・南新保遺跡のように、 期に成立して継続する集落が存在する点にも注意したい。
- *22 期の南加賀と南能登における地域の情報は、外来系土器で見える限り、拠点から周辺へ一元的に伝達されるという流れで一致している(安 英樹1999「北陸に於ける土器交流拠点」『庄内式土器研究会』庄内式土器研究会)。一方、北加賀では遺跡数は多いものの、拠点を特定しにくい様相が見られ、*19で指摘した点とも関連して、ここにも八日市地方遺跡と吉崎・次場遺跡の存在意義を見出すことができよう。
- *23 共通する点を抽出するならば、生産・交易が傑出する点は山陰地方と類似し、集落が水系を遡上して分岐する様相は近畿地方でも大和地域で特徴的である(寺沢薫「大和弥生社会の展開とその特質 - 初期ヤマト政権成立史の再検討 - 」『橿原考古学研究所論集』第四)。
- *24 例えば環濠については、環状に巡ることや、断面がV字型を呈するといった概説的な特徴は必ずしも備わっておらず、そうした防御性を重視するよりもむしろ区画内に意識的に機能・遺構を集積することに意義が求められる可能性がある。また、方形周溝墓については、今後、吉崎・次場遺跡で発見される可能性もあるが、八日市地方遺跡ではかなり先行的に導入されていた可能性もあろう。ちなみに、北加賀における ~ 期の集落では、金沢市矢木ジワリ遺跡、磯部運動公園遺跡、上荒屋遺跡等で見られるように平地式建物と土坑墓という、吉崎・次場遺跡の様相に近似した構成の方が普遍的なようであり(楠 正勝・栃木英道1999「第2章 弥生時代」『金沢市史』資料編19考古 金沢市史編さん委員会) この段階における墓域の形成や集落との配置に多様性を感じさせる。生産物については方向性の差異を示すとともに、相互の補完的關係も考慮する必要がある。消長については、八日市地方遺跡におけるピーク期の遺構密度の高さとその後の急速な廃絶は、吉崎・次場遺跡における高い継続性と好対照をなしており、前者に地域の都市的集落、後者に伝統的集落としての側面を兼ね併せる視点も必要と考えている。
- *25 両氏の著した文献を以下に掲げる。どちらも正式に刊行されたものではないが、理論的かつ示唆に富んだ視点で北陸の拠点集落を考えた内容である。
- 林 大智1998「北陸における弥生時代集落の体系的理解に向けて」石川考古学研究会新年例会資料集
- 櫻田 誠1999「弥生時代のムラ - 八日市地方遺跡 - 」古代学協会公開講演会資料集

墳丘構築技術から見た秋常山 1 号墳築造の思惟

伊藤 雅文

問題の所在

本県で100m 超の前方後円墳の存在が知られるようになったのはごく最近である。金沢大学考古学研究会の分布調査によってこの大形古墳である秋常山 1 号墳が発見され（金大考古研1986）、平成 4 年から始まった墳丘確認調査によって古墳の様子的一端が明らかとなったものである。本墳は能美郡寺井町字秋常に所在する。和田山古墳群や末寺山古墳群等からなる能美古墳群の一角を占め、かつ最大規模を有する。刊行された報告書によると、三段築成の前方後円墳で、全長140m、後円部径110m、前方部長30m を測るといふ。1 号墳の西に前方後方墳と考えられる 2 号墳が隣接し、中期前半の円筒埴輪片が出土している。（寺井町1996、1997）。二古墳が作られた前後関係はよく分からないが、1 号墳から 2 号墳と考えられており、前方後円墳から前方後方墳を作り、北陸にあっては、特異な状況といえる。1 号墳の葺石は、上・下段（中段 - 報告書による - ）に置かれ、最下段（下段 - 報告書による - ）は東側くびれ部に想定されている造り出しに葺石状の配石が検出されているものの、築造時のものか不明である。

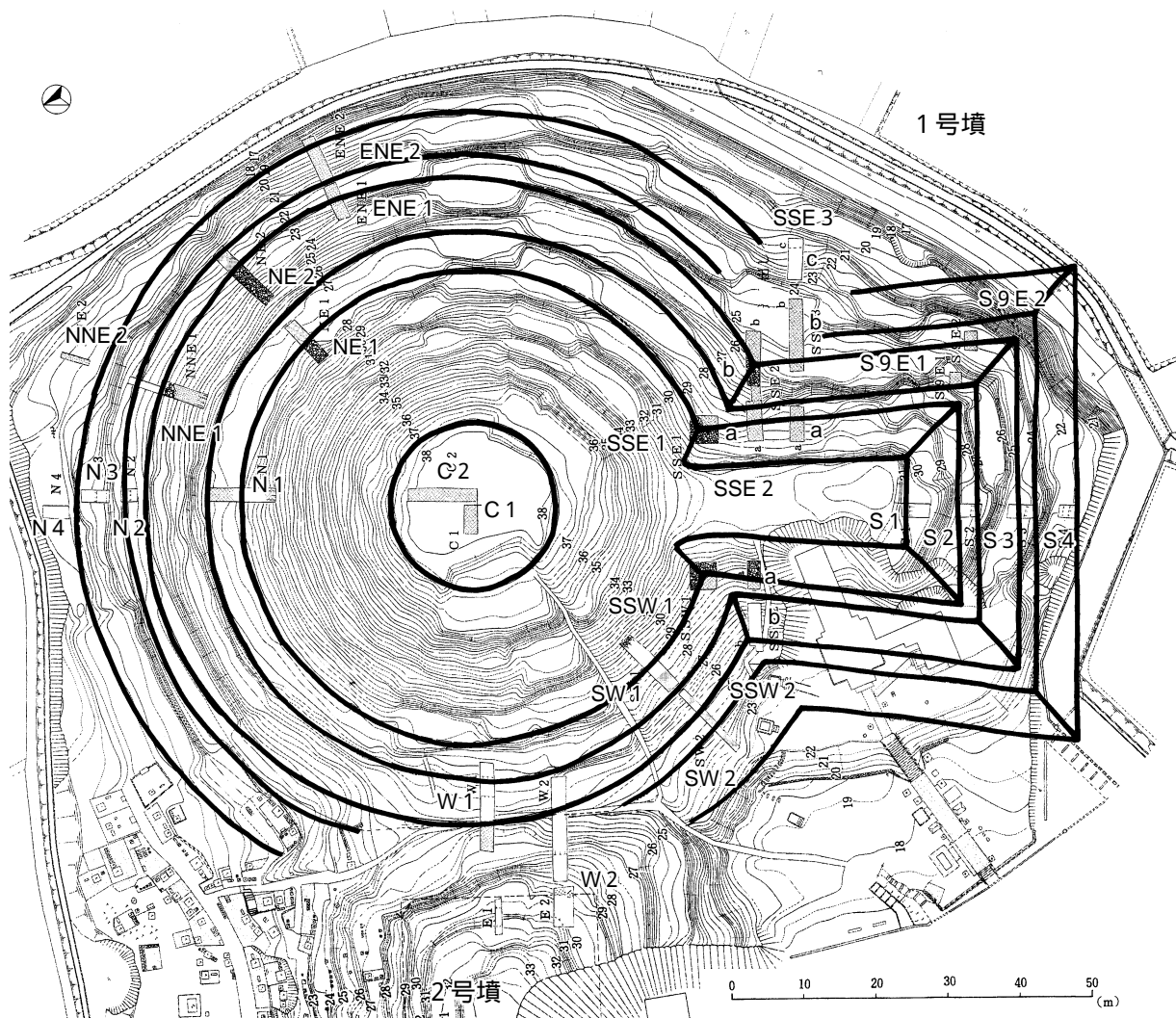


Fig. 1 三段築成による墳丘復元とトレンチ配置図

筆者は発掘調査段階の初期から現在に至るまで調査団員の一人としていろいろ関わっているが、今もって本墳の墳丘をどう理解するかということについて何か模糊として釈然としないものをもっている。それは、この古墳があるいは古墳群がどのように作られたのかということについて、自分なりの明確な答えが出ていないためではないかと考えるのである。

たとえば最下段についてみると、本墳のようなタイプの場合墳丘の一部と見るのか、それとも墳丘とは区別されるものとするか、研究視点によって論の分かれるところであろう。本墳では後円部を中心に墳丘の遺存状況が良いように見えるようだが、実は前方部端が大きく削平されて段状になっていることや葺石の欠失等後世の改変が著しいことから、自分なりの明確な答が得られないのであろう。また、本墳の最下段の理解によって報告書に記載されたような規模と考えるのか、それともそれより小さなものとするのか、という違いが生じるが、これによって京都府蛭子山古墳や福島県会津大塚山古墳のような最下段を構成する部分が墳丘を全周しないような古墳との関連において少なからず影響を及ぼし、築造企画論においてもつながっていくものである。

したがって、本稿では発掘調査成果から秋常山1号墳がどのような技術で構築されたのか検討し、どのような古墳を作ろうとしたのかを考察することにしたい。もちろん、築造に際しその設計図たる企画が存在したはずでありその検討も必須なことであるが、本稿ではそこまで論を及ぼすには未だ力量不足を痛感している。しかも、史跡整備事業に着手したばかりでありこれから墳丘などに関するより多くの情報を得ることができると考えられるので、それから検討した方がより充実した研究を行うことができよう。発掘調査は学術調査ということもあってごく狭い面積しか実施されていないので、限られた情報から類推することとなる。

なお本稿では、上段・下段・最下段の段築とし、上段と下段の間の平坦面を上段テラス、下段と最下段の間の平坦面を下段テラスと称することとする。

秋常山1号墳の築造方法

旧地形と築造面

1号墳の29箇所に設けられたトレンチの土層状況を検討することによって、どのような地形に古墳が作られたのか、ある程度の推測が可能である。それは、墳丘斜面に地山が露呈していたり葺石直下に地山が観察される部分は元の地形を削りこんだ部分であり、古墳築造前の表土層が観察される部分は旧の地形の面影を残した部分であることを示していることによる。

旧表土が検出されたのは、NE1トレンチ(標高27.0m以下の部分)NE2トレンチ、ENE1・2トレンチ、S9E1トレンチ、S9E2トレンチ、SW2トレンチである。これらのトレンチでは、厚いところでは1m以上の盛土が確認されている。つまり表土を残した状態で古墳の盛土が施工されたことを示している。また、NNE2トレンチ、くびれ部に位置するSSE2トレンチとSSE3トレンチでは、旧表土系土層は確認されないものの、厚いところで1mの盛土下には地山が傾斜をもって検出され、古墳築造前の地表面に近い部分であったことが推測される。これらのトレンチは共通して墳丘東側に位置し、東に向かって下がる傾斜地形に土盛りすることによって墳丘を作ったことがわかる。

次にNE1トレンチを仔細に観察する。墳丘上段と下段との間のテラスでは一部盛土がかかっているが、上段テラスの水平を調節するような盛土であり、葺石裾から50cm離れてはじまっている。旧表土は標高約26.8mまで検出され、その盛土層に見かけ上切られている関係にあり、まさに地山削り出しと盛土の接点にあたる。確認された位置が上段テラスということから考えれば、この面が墳丘築造の基準となったことを示している。検出された墳丘上段の葺石基底石の標高がほとんど水平で

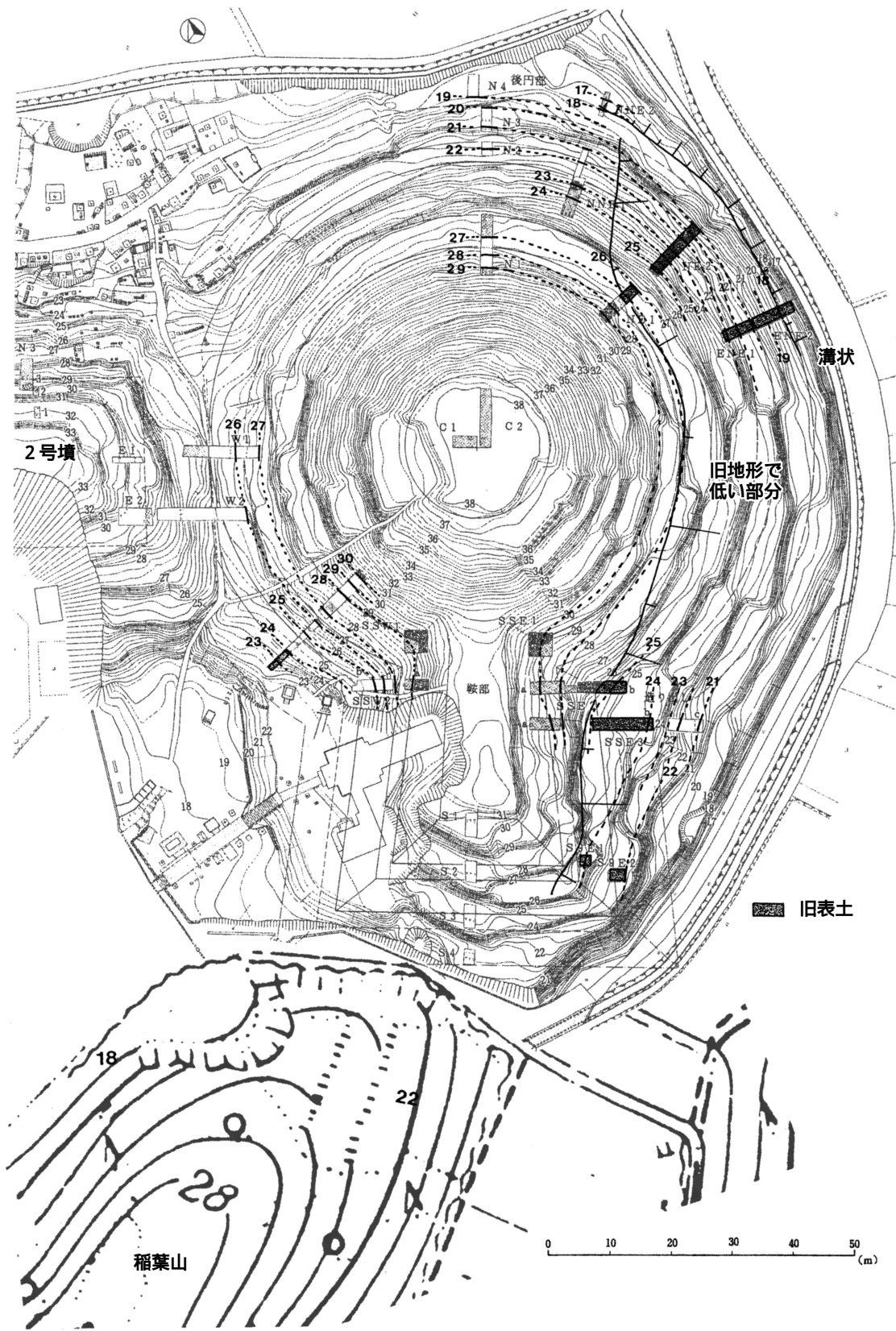


Fig. 2 秋常山1号墳旧地形と確認された地山の高さ (1 / 1,000)

あるが、下段の葦石基底石の標高が後円部北東よりも東側くびれ部が約2m高く前方部と後円部でかなりの高低差が生じていることからもうなずけるところである。

一方、これら以外のトレンチで地山が確認された。その部分が築造当初に盛土が施されたとしても地山が傾斜をもっていることから、厚い土盛りを想定することはできない。つまり、墳丘の西側は尾根を削ることによって作られたものであり、葦石裏込め土としての盛土あるいは墳形を整形するための盛土を想定するのが妥当であろう。

N1トレンチでは標高28mまで地山を確認しており、SW1トレンチやS1トレンチでは標高30.5mまで地山である。また、秋常山2号墳の旧表土は南東崖面で標高30m付近にある。1号墳で確認された地山確認地点はそれよりも高い位置に旧地表面が存在し、1号墳から2号墳に傾斜する旧地形の想定が可能である。他の大型前方後円墳や前方後方墳がそうであるように、本墳も後円部が旧地形の最高所に選定されたことがわかる。そして、1、2号墳間が深い谷状を呈するのは、墳丘構築による開削によるものであり、極端な鞍部を想定しない限り、1号墳から2号墳にかけてなだらかな尾根が続き約6mも削り込んでいる可能性もある。一種の丘尾切断による技術であろう。

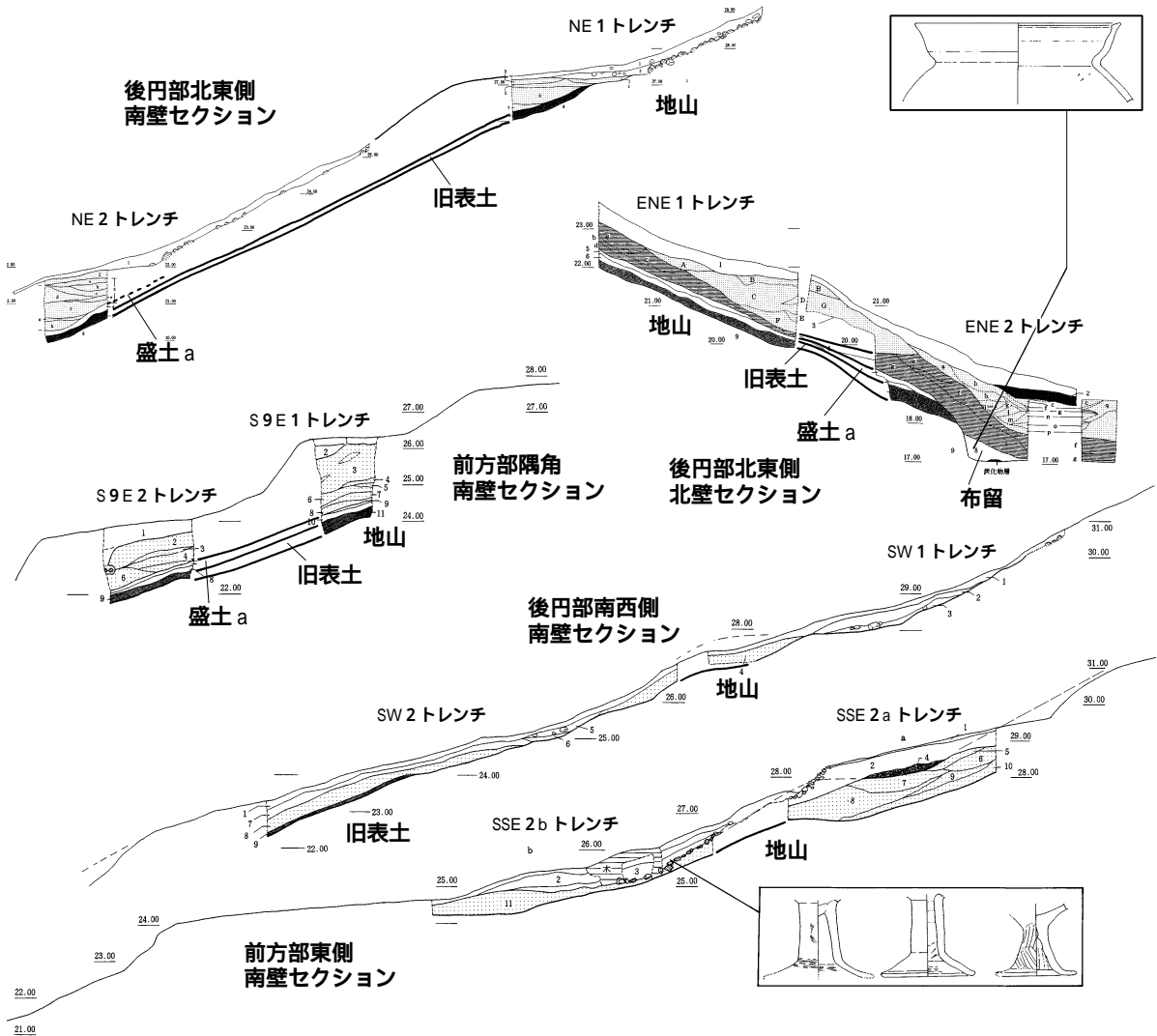


Fig. 3 1号墳検出盛土を中心とした土層セクション(1/200)と出土土器(1/6)

さらに前方部はどうであろうか。かつて前方部南に伸びていた丘陵（通称稲葉山）との続きを、それが記載されている1959年に作られた都市計画地図をもとに考える。本墳と南に続く尾根とは掘り割りの道路で分断されており、標高20mの等高線がその崖面に入っているようである。掘り割りは約4mの高さであることが地図から読み取ることができる。そうすると当時の崖面が現在とあまり変わらないことから現状の道路面が当時とほぼ同じ高さであったと推測でき、道幅を広くする等多少改変された程度と判断できよう。標高20mの等高線は当時であってもそれぞれの尾根で収束していたと考えられ、1・2号墳間のように丘尾切断によって作られたものである。ただし、報告書中で前方部端で標高30.5mより高い旧地表面が想定されるので、おそらく、尾根が南に下がる地形を利用して前方部を削り出したものといえる。

また、前方部前面を通る現道路が古墳主軸と斜交するのは興味深い。前方部端は主軸に直交して作られることが基本であり、周掘りも墳丘平面の相似形を呈することを常としているからである。報告書で示されている前方部端では、道路建設のときに周堀を利用せずに前方部西隅角をわざわざ削ることとなるので、若干の不合理性を感じる。

なお根拠となるデータは無いが、標高32m以上の後円部の大部分が盛土によって作られている可能性を考えている。

盛土施工

本墳で確認された盛土は、葦石施工あるいはその補助のためのもの（類）と、斜め堆積を基本とするもの（類）、水平堆積を基本とするもの（類）の概ね三種類に区別される。

盛土 類は葦石を断ち割っていないので確認していないものの、N1トレンチで葦石の抜き取りによって地山が露呈しているなど、地山に直接葦石を設置できないことから裏込め土の存在が不可欠である。盛土 類葦石施工に際し必要不可欠なものである。

盛土 類は、NE2トレンチやENE1トレンチ等で確認され、旧表土あるいは地山の傾斜に沿うように置かれている。ENEトレンチで、「砂質土を主体とする盛土」が一気に尾根の最下部まで施工されており、比較的均質な土が大きな単位で動かされている。SSE2トレンチやSWトレンチでも同じ状況である。各種の土を小さい単位で用いる盛土技法とは大きく異なり、傾斜した地山にこのような技法による土盛り作業が困難であったので、土を貼り付けて押さえつけるような盛土 類によって構築されたものである。したがって、これは粗成形の一つの方法として存在するものであり、墳丘整備の方法ともいえよう。

このように見ると、古墳の大規模さに比べて葦石の遺存状態が極端に悪く、ほとんどが抜かれていたり葦石石材が緩んでいる部分があるなどの遺存状況の悪さは、このような盛土方法に原因の一端を求めることができる。

一方、NE2トレンチでは20cm程度の厚みの粘質土が旧表土直上に盛られ、盛土 類の範疇に含まれると考えられる。さらに大きな単位の盛土が上から下に向かってみられる。そして、地表近くになるにしたがって水平堆積に近く盛土 類のようになる。外側を高くする盛土を意識しているようで、「周辺部から順じ内方に傾斜させつつ積み上げる技法」（櫃本1978）とある面で共通するものと考えられるものの、周辺部としての外側で明確な内方に傾斜する盛土ないしは壇状の盛土の存在は不明確であるので、そのような特別な工夫をする意識とは異なる。すなわち、このような盛り方をした部位がテラスあるいは墳丘裾を明確にする平坦面にあたり、水平面を作り出すための方法であったとわかるのである。ここで注意しなければならないのは、このような重要な部位であっても、細かい単位の土の水平盛土を採用していないことである。

築造方法の諸例

地山削り出しを主体とする前方後円墳・前方後方墳は丘陵尾根に立地する例が多いと思われるが、尾根上に位置しながら墳丘下段のみ地山を削り出しそれより上部を盛土によって構築したり、地山成形でも平地に古墳を作るように地山の削平をおこなうなど、その方法はさまざまである。ここでは尾根に位置し主に地山を削り出して作られた古墳について観察したい。

a 大阪府弁天山 D 2 号墳 (大阪府教委1967)

大阪府高槻市に所在し、古墳時代前期後半に作られた前方後方墳である。墳丘のほとんどが地山削り出しによって作られ、盛土は後方部北側(背後)と前方部で見られるほかは、全て地山である。また、秋常山 1 号墳と同じように葦石設置に盛土を用いている。細かな盛土単位は分からないが地山の傾斜にあわせた土盛りとなっている。後方部三段、前方部二段の築成で、後方部は前方部頂平坦面に対するテラスや葦石基底列が見られず省略されており、後方部のみ一段高い状態である。葦石は各段に見られる。

下段前方部前面には、尾根筋にあたり周溝や葦石基底石列などの区画が見られないようであるが、そこよりも低い部分に葦石が遺存しているのはその高さが水平ではなくて傾斜する地形に合わせて葦石が構築されたからであろう。後方部背後は尾根が急激に痩せて細くなることから、段の築成が不可能であったと考える。つまり、下段は葦石を伴いつつも構築可能な部分、別な観点からすると必要な部分しか作っていないのである。

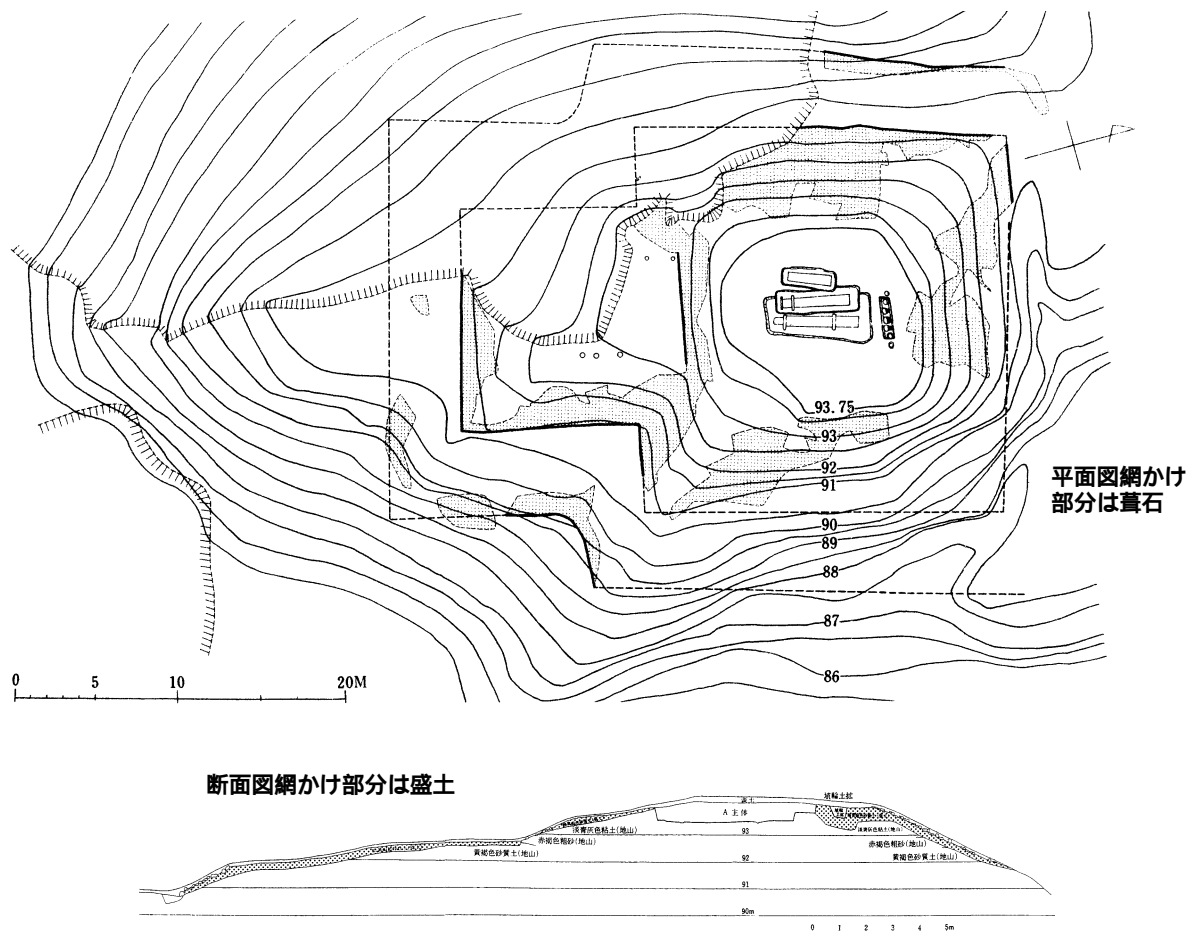


Fig. 4 弁天山 D 2 号墳 墳丘盛土状況

b 京都府鳥居前古墳（大阪大学1990）

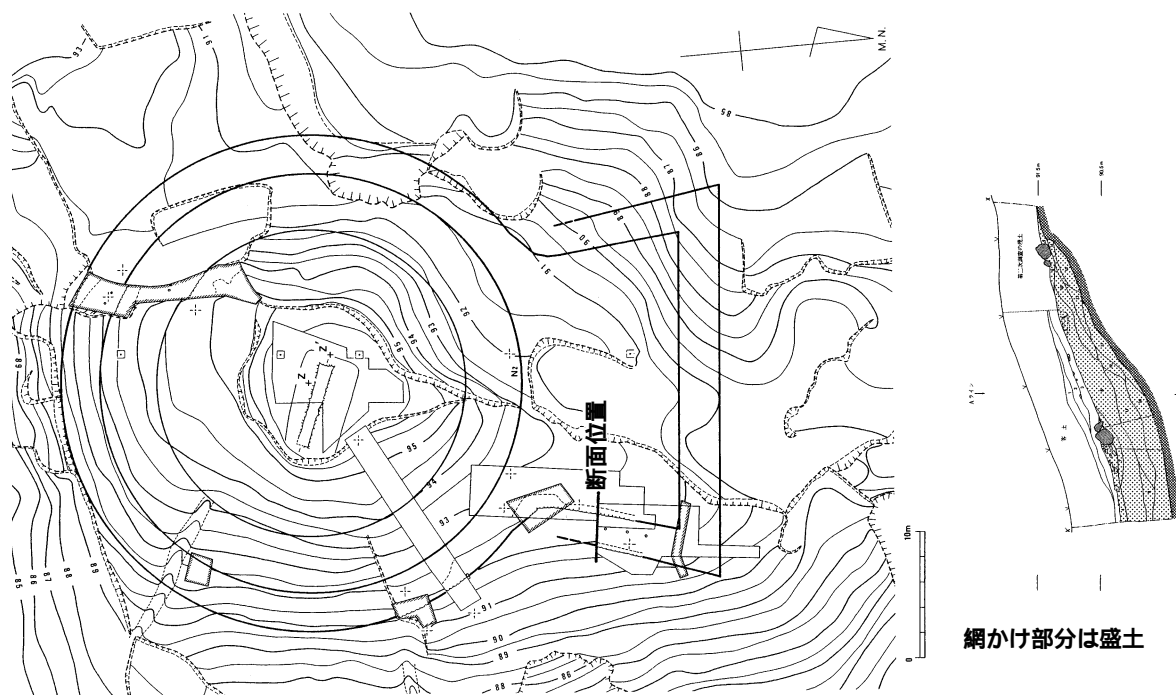


Fig. 5 鳥居前古墳 墳丘盛土状況

京都府大山崎町にある古墳時代中期初めに作られた前方後円墳である。前方部が短く、後円部三段、前方部二段の構成で、報告書では「前方部と後円部の最下段が段違いになるという特異な墳丘構造を持つ」特徴としている。省略程度の違いはあるが、弁天山D2号墳の最下段と通じるものである。

旧表土やその可能性のある土層が認められず、墳丘構築にあたって広範囲にわたって地山が削られたものである。盛土中に土壇状の高まりが確認され、それが墳丘のみならず墳丘外にまで及び後円部最下段を構築する部分にも観察され、「土盛り作業の行程において一つの単位をなし、かつ傾斜面に一定の平坦面を確保することによって以後の土盛り作業を容易にすべく意図された足場」と推定された。（北条1990）地山が全面的に削平されていることから、盛土作業が計画性を持って行われたと思われる。

後円部を最高所とする地形に作られ、地山の傾斜に合わせて墳丘も傾斜している。前方部上段は地山を削り出しているようで、そこから急激に地山が下がり地形となっているために、盛土することによって墳丘外側にまで成形している。つまり上段葺石列がほぼ地山近くにあり、下段葺石列は盛土中に掘りこまれている。設計された墳形を得るために墳丘外にまで盛土によって地形を改変していることに注意したい。また、墳丘西側の詳細が分からないものの、東側盛土は大規模であり、北から東側にかけて平野に開けた立地上との関係が指摘されている。

c 福島県堂ヶ作山古墳（会津若松市教委1996）

福島県会津若松市に所在する。後円部三段、前方部二段の築成と推定されたが、大きく地形に制約を受けた前方後円墳である。墳頂部トレンチでのみ盛土が確認され、その厚さは正確に分かっていない。報告書では後円部上段の大部分が盛土であると推定している。葺石は後円部中段の一部と上段、前方部東側くびれ部、西側上段で観察され、粘質土の地山部分に見られるとのことであり、岩盤のところはそれを葺石風に削り出しているという。後円部と前方部とも最下段には葺石が認められず、後円部についてはその変形も著しい。前方部の段築についても付加的な様相が強いように思われる。

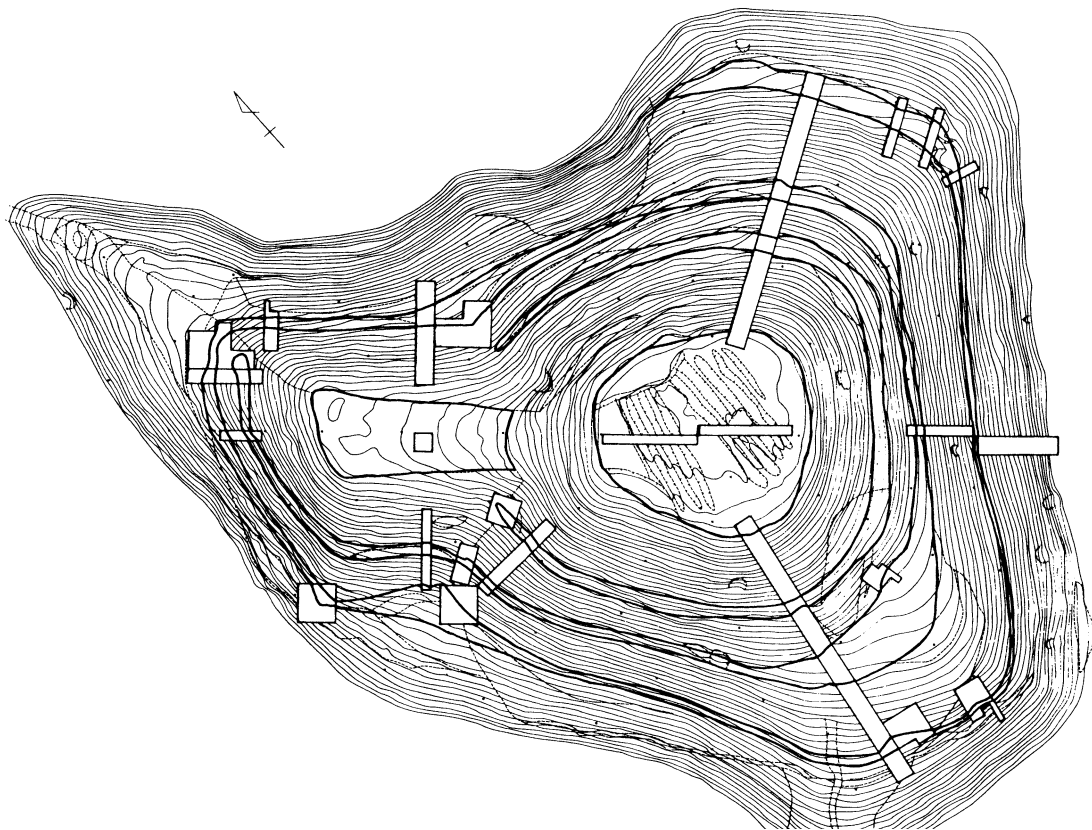


Fig. 6 堂ヶ作山古墳 墳丘図 (S = 1 / 500)

本墳の段築構成を示すテラス面が不明確で幅も狭い。地形に合わせて地山を削り出しているために前方部の両側面で東側が一段、西側が二段という違いが生じたのであろう。また、後円部最下段はほとんど地形に合わせて墳丘基底の平坦面を削り出ただけで非常に歪な後円部となっている。しかも前方部西側下段と一体となってくびれ部の平坦面を作っている。後円部最下段が歪な形でありながら前方部の下段に続いていくので、そこが墳丘として意識されていたのである。一方で目的とする墳丘要素を入れるためにはこのように作らざるを得なかったという地形的要因が多分にあるのではないかと考える。墳丘整備としての後円部の成形と前方部の墳丘成形が、前方後円墳を作り出すという最終的な目的に昇華したものともいえよう。

段の築成と視覚的效果

前項で僅かな例を検討したが、丘陵上に位置し墳丘の大部分を地山削り出しによって作られた古墳には個性の強い墳丘形態を持つものがあることがわかった。一方、岡山県日上天王山古墳（津山市教委1997）や福岡県三国の鼻1号墳（小郡市教委1985）などのように、丘陵上に立地しながら下段を地山削り出しで作り、上部を盛土によって構築するような前方後円墳には段築の省略や水平面を意識した墳丘構築など、前項で検討した地山削り出しを主体的に用いて作られた前方後円墳とは違う墳丘状況にある。秋常山1号墳はもちろん前者の範疇に入る。

墳丘要素の一部が省略されるのは古墳を作る主体者がそれを必要としなかったのか、それとも構築する技術の困難さがあったのか等の要因が求めることができ、個々の古墳の状況を検討することによって答えが見えてくる。先に検討した諸例は古墳が立地する地形にかなり制約を受けたものであり、古墳の占地した結果として省略あるいは改変が行なわれたものと考えられる。

しかし、諸条件によって墳丘要素の一部省略をおこなってもなお、古墳築造主体者が「前方後円墳」
として使用・機能することに満足しなければ、それを作る目的が達成されないことになる。被葬者を
埋葬する儀礼や墳丘あるいは周辺で行われたであろう祭儀が過不足なく執行される必要があり、埋葬
儀礼終了後外部に古墳の威容を示すことも考慮され、それらを十分に満たす条件で墳丘の構築が行わ
れたはずである。このように考えると、墳丘に観察されるいくつかの省略は単なる手抜きではなく、
必要な要素以外を外して墳丘を構築した結果であり、その取捨選択はそれぞれの古墳の個性によって
異なる状況といえよう。

埋葬儀礼や埋葬に伴う儀礼空間として墳丘を分析することで墳丘要素の省略を類型化する必要もあ
ろうが、それを考えるにはあまりにも材料が乏しく筆者の力量も及ばないので、ここでは外からどの
ようにみせようとしていたのか考えたい。

弁天山古墳群は北から南に伸びる主尾根とそれらから東に派生する支尾根上に位置し、西には狭い
谷が入りその対岸でほぼ同じ高さの尾根が伸びている。古墳は南に広がる平野を見下ろすこととな
り、築造主体者にとってもそこから見られている意識が働いたことは容易に想像がつく。弁天山D2
号墳は前方部下段基底から南7mほど平坦面が広がっているという余裕を持っていながら、そこを
墳丘として使わずに空地とし、後方部背後の下段を作ることができない所まで北にずらして構築し
ている。これはまた弁天山D2号墳の北側には弁天山D3号墳が築かれ、そこから見られることに
意識されていないかのようである。つまり、外形としての墳丘は古墳群内で継続して行われた葬送儀
礼執行・参加者からどのように見られるかを考慮して作られているわけではなく、被葬者が代表した
平野部の集団構成員などから日常遠望されることを意識して作っているのであろう。鳥居前古墳や堂
ヶ作山古墳についても同じような状況であり、集落から見られている墳丘側を定形にそして精美に作
るという原則が働いているものといえる。

それと同時に、古墳の正面も意識して作られたものでもあろう。前方後円(方)墳の正面はどうか
というのは、未だ定説のあるところではないが、葬列が墳丘を登る方向がその正面である可能性が大
きい。

近藤義郎氏が最近の著書において、墳丘の傾斜角度を検討した結果、前方部隅角が外部から墳丘内
部へそして埋葬施設への道であるとされている(近藤2000)。これは方形周溝墓の埋葬施設への道の
考え方(都出1979)と通じるものである。また、富山県谷内16号墳でくびれ部付近から後円部頂にか
けて墓道とおもわれる遺構が検出された(小矢部市教委1988)ほか、奈良県ナガレ山古墳の東側くび
れ部前方部近くで墳丘埴輪列を横切る通路状の埴輪列が検出され(吉村1999)、墳丘への「道」と認
識されている。このような事例が検出されるのは稀な例であり、和田晴吾氏が整理した墓坑に至る墳
丘への出入口についての研究(和田1997)が参考になる。ここではこれらの検出事例のほかに陸橋や
造出での祭祀状況からくびれ部付近に墳丘への登り道を想定し、近藤氏と異なる結論に達している。

古墳の正面については、墓坑構築と納棺埋葬行為の関係、その時点で墳丘の築成状況はどうなっ
ていたか、また葬送儀礼過程と儀礼執行者・参列者等の人の動きなど、前方後円墳を総体的にとらえる
が必要であり直ぐに結論を見るものではない。たとえば、ナガレ山古墳で検出された通路状遺構は円筒
埴輪列樹立後に機能するものであり、その道が葬送儀礼時点で存在したかどうか結論を導くのは容易
ではなく、納棺時とそれ以降の儀礼との在り方をイメージすることで推測できるものである。また谷
内16号墳にしても墓道とされた以降の幅は1mと切り立った「馬の背」のようであり、類例の乏し
さから普遍性を求められるか慎重にならねばならない。

秋常山1号墳はどうであろうか。大型古墳の威容を見せるという点で消極的な部分がある。現在、

前方部南に存在した丘陵は土取りによって失われ、古墳前面が開けた状態に感じる。しかし、古墳の東には幅30mの狭い水田がある谷をはさんで本墳が立地する丘陵よりも高い「西山丘陵」が迫り、南には「稲葉山丘陵」が続いているので、南から東にかけての眺望がまったくきかない。また、後円部西側には2号墳が隣接し、西からの眺望を阻害している。つまり、北から古墳を見た時には後円部と一部の前方部しか見られず、西から見た時には後円部の一部と前方部しか見えないことになるものの、少なくとも北や西方向から見られることを意識して作られたと推測できる。

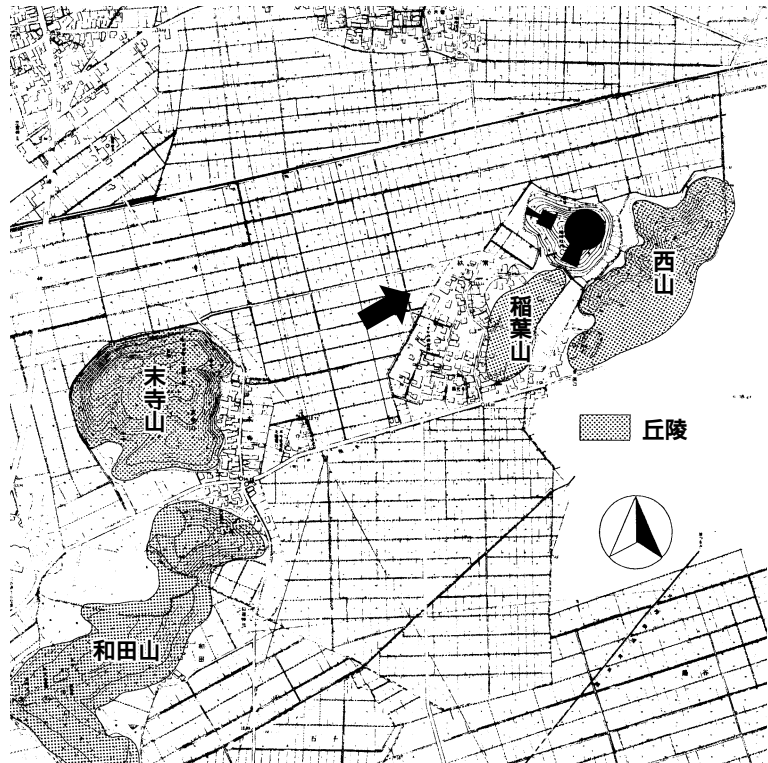


Fig. 7 秋常山古墳周辺地形 (S = 1 / 15,000)
矢印からの眺めが最も良好である。

次に秋常山1号墳が外部から見られることについてどのような意識をもって作ったか問題となろうが、最下段が2号墳との取り付けにおいて段の省略が見られるなど厳密な意味での定式的な前方後円墳(北条1986)を志向したものとはいえず、地山削り出しを主体として作られた前方後円(方)墳における墳丘要素の一部省略に共通するものである。墳丘東側の下段テラスも前方部に向かって3mほど高くなり、前方部端がもう少し短くなる可能性も捨てきれない。

さらに、盛土によって後円部を中心に墳丘と相似形になった最下段は2号墳が立地する丘陵との間の谷と一体となっていく。外からの視覚を意識すれば墳丘を精美に作り、墳丘外についてもそれと一体となるように修飾することによってより大きな古墳と誇示できる効果があり、その目的を達するために後円部最下段は墳丘と一体となって構築されたものである。しかし前方部にかけては等高線が墳丘内側に向かって流れる傾向で、後円部最下段基底をなす標高20mの等高線は報告書で想定された造出の下部に位置しそれが墳丘内方に向いている。たとえ敗戦後の食料増産活動の開墾による改変が著しくとも墳丘形状をまったく推測できないまでに破壊するとは考えがたく、逆に見れば、それだけ破壊による変形容易な構築物であったことがわかる。このように、前方部と後円部との間には比高差が生じており、最下段を作るにあたって修飾的な意味合いも強かったのではないかと考える。

まとめ

秋常山1号墳を観察すると、「なぜ2号墳の方に前方部を作らなかったのか」という素朴な疑問がわいてくる。仮にそのようにして前方後円墳をつくると、北や西に向かって北陸最大級の墳丘の威容を示すことができ、遠くからでもその存在を認め誇示できたであろう。本墳のすぐ北には手取川が流れ、それを意識した立地であることは可能性のあることである。しかし古墳の築造主体者はそうしなかったのである。2号墳が既に作られていたのであろうか、それとも2号墳との計画的な配置による

ものであろうか、これら2古墳が作られた前後関係が確定されねば答えは得られない。

大形前方後円墳築造には、類似する墳丘形態からその企画が存在したとして多くの先学の研究によって知られているところである(上田1969、石部他1979、岸本1992など)。しかし、これらの企画論は畿内中枢部の大形前方後円墳の資料を中心に扱っており、尺度論をはじめとして墳形の類似性の合理的な抽出に主眼が置かれ、大形前方後円墳築造を政治史的観点からその意義を考えるものである。岸本直文氏はやや視点を異にして、これらの変化から規格の系列を抽出し、かつ地方の大形前方後円墳で相似墳を抽出することによって、倭王権の構造を考察するというものである。

筆者たちのように地方で研究するものにとって、地方の前方後円墳がどの畿内大形前方後円墳と類似する企画を持つのかあるいはどのような規格の上に作られているのか、を知ることが畿内と地方との関係を直接的に知る上に重要なものとなっている。一方、畿内からの一元的な影響のもとに古墳(この場合は前方後円墳を作る考え方になるか)を考えるべきではなく、むしろ自律的な側面を重視しつつ畿内と地方を「等質的な構成体として固有の位置を占めるといった視点に立ち、相互の結びつき方や競合関係を具体的に復原する手続きが必要」(北条1999)であることにも注意しなければならない。つまり、個々の古墳を畿内大形前方後円墳の企画の類似を無批判的に検証することよりも、その相違点も明らかにして地域での独自の動きも把握する必要がある。

また先に見たような丘陵上に位置する地山削り出しの前方後円墳と盛土主体の前方後円墳とでは、共通する墳丘企画が当てはまるか疑問である。もちろん丘陵上に位置する岡山県備前車塚古墳が奈良県箸墓古墳の墳丘の六分の一の企画で作られている可能性が指摘されているところであり(北条1986)、前方後円墳の「形」の系列は単純でなさそうである。また、福井県六呂瀬山古墳群や同手繰ヶ城山古墳、岐阜県親ヶ谷古墳など、定型的な墳丘を持たない前方後円墳の一群がある。まだ具体的な検討を行っていないが、これらは構築技術の系譜が平地に作られる盛土主体の前方後円墳と異なり、築造企画も異なる可能性を考えている。北条氏が讃岐型前方後円墳を提唱したように(北条1999)、畿内の大王陵級古墳を中心とする大型前方後円墳企画とは異なる「形」の系譜を想定してもよいのではないかと考える。

さて、能登の大形古墳である雨ノ宮1号墳の調査で、板で土留めして盛土構築を行うような技術が確認された(中屋1998)。この技術は愛媛県妙見山古墳でも確認されており、大形古墳を構築する技術の一つであったものである。大形前方後円(方)墳の築造にあたっては何らかの企画をもとに作られていることは、その整美な姿から容易に理解できる所であるが、設計図だけが独り歩きするものではなく土木技術と一緒にもたらされていると考えられる。その両面を検討することで、墳丘企画の選択がどのような政治的レベルで決まるのか、古墳築造に専従する集団との関係、あるいは地域間の繋がり等を知ることができる可能性を持つのである。

このように考えてくると、必ずしも秋常山古墳を三段築成の定式的な前方後円墳とする根拠が少なくなってきたと思われる。最下段は墳丘修飾の段として後円部からくびれ部にかけて構築され、それが墳丘を大きく見せる効果を生じている。その最下段を墳丘の段築と見るかそれとも基段あるいは奈良県西殿塚古墳のようなエプロンの存在とするか、意見の分かれるところであり、ここでは墳丘に付属する後者の考え方によりたい。そして視覚的に必ずしも必要とされなかった前方部前面まで段を作らなかった可能性を考える。

なお、秋常山古墳群は史跡整備事業が始まり活用に向けて有意な第一歩を踏み出している。これからの整備のための調査によって重要な成果がさらに得られることであろう。本稿は、古墳を作るという観点から見た場合の本墳を理解するための一つの考え方として提示した次第である。

かつて学生時代に大阪府教育委員会の一瀬和夫氏について大阪府普田山古墳や大阪府市野山古墳の外堤の発掘を通して巨大古墳の構築状況を目の当たりにし、古墳の築造技術を理解する重要性を学んだ。筆者は一瀬氏のような構築理論（一瀬1986、1991）を持っている訳ではないが、墳丘の築造技術と企画について50m前後の小型前方後円墳や尾根上の不正形な前方後円墳に研究者の目が十分に届いていないという問題があることに気がついた。また、北陸や日本海沿岸地域を中心に考えると、方形台状墓、四隅突出墓、前方後方墳等の構築技術が前方後円墳とどのように通じてどの点で異なるか等の問題が未整理の状態にある。これからの研究課題としたい。

最後に、秋常山古墳群発掘調査団による検討会や会議における多くの調査団員の方々の発言や教示、特に石部正志先生の意見や指摘に大きな啓発を受けた。文末ですが皆様に深謝いたします。

参考文献

- 会津若松市教育委員会1996『堂ヶ作山古墳』
石部正志・田中英夫・宮川徂・堀田啓一1979「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89号 古代学研究会
一瀬和夫1986「前方後円形墳丘の周溝掘削パターンと区画性 - 前方後円形成立に関する覚書 - 」『古代学研究』112号 古代学研究会
一瀬和夫1991「墳丘墓」『原始・古代日本の墓制』同成社
上田宏範1996『増補新版 前方後円墳』学生社
大阪大学文学部考古学研究室1990『鳥居前古墳 - 総括編 - 』
大阪府教育委員会1967『弁天山古墳群の調査』
小郡市教育委員会1985『三国の鼻遺跡』
小矢部市教育委員会1988『谷内16号古墳』
金沢大学考古学研究会1986『金沢大学考古学研究会活動報告』第4号
岸本直文1992「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39巻2号 考古学研究会
近藤義郎2000『前方後円墳観察への招待』青木書店
都出比呂志1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26巻3号 考古学研究会
津山市教育委員会1997『日上天王山古墳』
寺井町教育委員会1996『寺井町 秋常山古墳群』
寺井町教育委員会1997『加賀 能美古墳群』
榎本誠一1978「前方後円墳の企画とその実態」『考古学ジャーナル』 150
北条芳隆1986「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』32巻4号 考古学研究会
北条芳隆1990「墳丘築成における土壇の意味」『鳥居前古墳 - 総括編 - 』大阪大学文学部考古学研究室
北条芳隆1999「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室
中屋克彦1998「石川県鹿西町雨ノ宮1号墳の発掘調査」『古代』105号 早稲田大学考古学会
吉村公男1999「古墳の正面観」『同志社大学考古学シリーズ 考古学に学ぶ』
和田晴吾1997「墓坑と墳丘の出入口」『立命館大学考古学論集』

補記

本稿脱稿後に、平成13年度整備計画に伴って秋常山1号墳後円部西側と同2号墳北側くびれ部を中心に発掘調査が実施され、10月に調査を終了する予定である。来年度以降も史跡整備に係る調査が実施され、その結果によっては今回の見通しに大幅な変更の必要が生じるかもしれない。今年度の調査については現在進行しているものであり、まとまった形でその成果が公表されていないが、筆者の現時点における現地調査の見学による観察から、いくつか気の付く点あるいは新たな見通しなどを補足したい。

1・2号墳にかけて古墳築造時の旧地表の可能性のある黒色土層が検出されている。この土層は1号墳から2号墳にかけて広く確認され、1号墳トレンチ断面で標高約34mから標高32m付近にかけて、2号墳のくびれ部で標高31.5m付近(図面との照合によって高さを求めたもので正確ではない)に見られるようであり、1号墳から2号墳に傾斜する旧地形であることを確認した。そして、それより低い地形の部分では地山が露呈しているので、二つの古墳間は開削されており、深い谷状地形の想定は困難と考える。

また、本論では1・2号墳の間は地山成形によって墳丘を作っていると考えた。基本的にこの想定は間違っていないものの、地山開削が墳丘表面近くにとどまらず、内側まで及んでおり、結果として多くの土を盛ることによって墳形を作り出している。この盛土が本文中で言う盛土 類の斜め堆積によるものであり、大型古墳の墳丘盛土にしては強度の点で問題がある施工方法となっている。そして、それを境にして上部の盛土方法と下部のそれとやや異なるようである。

すなわち、前者は後円部円周に沿って土壘状に土盛りをおこない、次にその内側を内に向かって傾斜をもつように盛土する方法で、前方後円墳によくみられる技法である。一方、後者は地形の傾斜に合わせて斜めに堆積した盛土となっており、1号墳東側の下段・最下段の盛土に通じるものであろう。この技法の違いは、平坦面に盛土をおこなうときと傾斜面に盛土をおこなう技術が異なることを示し、後者の盛土の構造的強度が弱いことは言うまでもない。この違いが土工集団の違いを示すのかそれとも盛土の目的とするところが違うのか等考えられる。

従前、2号墳の埴輪から1号墳から2号墳という築造の流れを想定してきたが、これももう一度白紙に戻して考えることも可能になってきた。それは、1・2号墳の間には深い谷は無くむしろなだらかに下がる地形が想定された結果、2号墳が本来持つべき墳丘東側(尾根筋にあたる)の周溝のような墳丘を画する施設が見られないのは1号墳築造によって損壊したためと考えることも可能であるからである。1号墳は先代の首長の墳墓である2号墳を避けるように作らねばならないという制約を持っていたために南に前方部を作ったものであろう。これによって、なぜ2号墳の方に前方部を作ったことをしなかったのか、という疑問に一つの答えを出すことができる。

なお、検出された下段葺石と墳頂との中間に極端に傾斜が緩くなった葺石が検出され、当該部分はまさに前方部平坦面から後円部に接する部分の高さと合致する。これからの調査によってどのような形となるのか、調査成果を見守りたい。



Fig. 8 手取川から望む能美古墳群

能美古墳群の北には手取川が流れている。古墳時代はより北に流れていたと考えられ、手取川から遡上する舟から見られることを意識したものではない。しかし、その堤防から眺める秋常山古墳群を中心とする能美古墳群の威容を感じることができる。

石川県埋蔵文化財情報

第6号

発行日 2001(平成13)年7月31日

発行者 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地 1

TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂
